增補
改正
俳諧歳時記栞草
二
へ 5
4307
2

へ5
4307
2

増補 俳諧歳時記草

江戸 曲亭主人纂輔
藍亭青藍増補

夏

漢書律暦志 太陽者南方、南任也、陽氣任養物、於時為夏、夏假也、物假大乃宜、炎帝 帝、其佐、朱明、執衡而治夏平、

淮南子 南方火也、其帝炎帝、其神祝融、

祝融 神

禮月令 夏月其帝、炎帝、其神祝融、祝融顓頊氏之子、曰黎、為火官正者、

昊天

墓要 天曰昊、天言氣浩汗、

朱明

尔雅 夏為朱明、一曰長嬴、註、氣赤而光明、故曰朱明、

蒸炒

韓文 自從五月困暑湿、如坐深甑遭蒸炒、

說苑 湯之時大旱七年、雒拆川竭煎沙爛石、

四月

仲呂 律

月令 律、仲呂、高誘註曰、陽散在外、陰実在中、所謂陽成功

立夏

孝経緯 穀雨後十五日、斗指巽為立夏、

蹂躪

通俗志作蹂躪 廣義

蹕蹟四月、名也、**小滿** 月令廣義 立夏後十五日、斗指巳為小滿、四月中、小滿者物長于此、少得盈滿也、

余月 尒雅疏釈 四月為余、

乾月 月令廣義 四月卦乾、

五陽決退一陰陰憂而為純陽乾天也、

正陽月 西京雜記 陽德用事和氣皆陽為正月、

巳月 晉書樂志 夏正建寅為平月、故四月為巳、

首夏、初陽月、夏、孟夏 元帝纂要

卯花月 卯月釈名 波流花

故うのはな月と云、又夏至して、卯月ともいふ、

花残月 蔵玉 ふぢの花夏ふかくなるまで山のや山ふきにさけるがごとく

花のさう月

得鳥羽月 蔵玉 春のあごりの月 有家後鳥羽院

下るやまんえんの月

五月

蕤賓 律 律暦志 蕤、繼也、賓導也、言陽始導陰氣使繼養物也、位于午在五月、

芒種 節 月令廣義 孝經緯云、小滿後十五日、斗指酉為芒種、五月節、言有芒

之穀可播種也、

夏至 中 同上 芒種後十五日、斗指午為夏至、言万物于此假大而極至也、

仲夏 仲、同中、五月、夏中也、

茂林、蔚林 纂要 木曰蔚、林茂林

皐月 尒雅疏釈 五月為皐月、五月得戌曰厲皐、之氣也、五月建焉而辰有鶉首、鶉首者星名、鶉首月之暑乎、

鶉月 蕤賓 周礼注

橘月 蔵玉 たぢの代

ちちぶの月の名をとりて

ちちぶ昔のもいぶん 家隆

月えぬ月 蔵玉 晴るもみえぬ

空ちりや月ちりと

ひとりぬる 顕昭

早苗月 五月八農人苗を挿む故に早苗月と云、今暑して早月と云、

六月

林鍾 律 律暦志 林君也、言陰氣受任助蕤賓君主種物使長揪盛也、位於未在六月、月令六月、律中林鍾注林衆鍾聚也、白虎通 言万物成熟種類多也、云云

小暑 節 月令廣義 孝經緯云、夏至後十五日、斗指丁為小暑、六月節、

大

暑 中 同上 小暑後十五日、斗、指未、為大暑、六月中、

季夏 礼記 季夏之月、

日在都 字彙 九、

瓜期 左傳 齊侯使連稱管至父戍葵丘瓜時而往、及瓜代、

且月 尓雅 六月為且、疏云、六月得已、則曰、則且、且、于余切、

遯月 易 遯退避也、為卦二陰漫長陽當退避、故為遯、六月之卦也、

朔月 年浪草 云、季吟 増山井 六月の異名とす、礼記 曰、朔月少牢五俎四簋、云、此月朔の義、未詳、其義仍て考と闕く、

陽 年浪草 云、増山井 疑らくハ誤り、按、陽ハ暘ノ作

氷 月令廣義 暘氷石李竜于氷臺、蔵氷三伏之日、以暘太臣、又林滋暘氷の賦あり、

蔵玉 松ヶ下庶居

風待月 待月の夜の

夕立ハあれども、やらぐ

鳴神月 同上 ある神の月ともあり、夏中

定家 常夏月 同上 ちりぬるを妹ゆゑ思ふ心ぞ、みなづき月もちそなる花のさかりを 後鳥羽院

水乳月 奥儀抄 農事ども、みなづきの、水無月とは、雷鳴の月の上下と略して、

○一説、此月暑熱烈しく、水泉滴尽くるの意、

又荷田東麿ハ、雷鳴の月の説あれど、茅窓信じ難し、

月とは、了、此説、姑く、

い

四月

虎杖競 朔日 蔓纏綸 貴布禰の御神事、此日加茂の氏人、騎馬にて詣づ、帰る時、市原野の連理の芝、其大小多少と論ず、

稲荷祭 中卯日○山城国紀伊郡、例の如くして甚奥、

紀事 四月卯日、二ッあるハ初の卯日と用ふ、新御供、社家松本氏調進ス、神輿五基に供ずる、

己の刻ばかりに、神輿五基、御旅所の西に出ず、東寺の南門の内に入る、此所に於て床を設く、五社の神輿おの〳〵南に向て其上に安置ス、寺僧おの〳〵御供所に侍すること於て、東寺の役人甲冑を着し、左手に長刀を横ゑ、右手に御供餅を捧げ、東寺、地人の妻四人、寺中頭屋院より雑品供物を唐櫃に盛り、頭上に戴き来る、神輿毎に供ず、寺僧一人檀上に進み出て、奉幣を、又護摩を修ス、一座終て後、社家并に氏子供

奉り、北の方大宮通りと経て、五条松原
より、五条の橋と過ぎ、大和大路を本山へ入る、○ 龍頭太 俳諧歳時記云羽倉家譜 桓武天皇御宇の人荷田氏の祖と山城国稲荷祭の時、神輿のさきへ行く面と龍頭太とあり、その外の祭の假面八王の鼻と称す、龍頭太八、田中の社の神職、この面則ち龍頭太が作なりと以て、もと名づけしなるべし

伊勢神衣祭

十四日 公事根源 神衣祭八、神祇令の甘さう、神服部潔斎して、三河の赤引の神調の糸と以て、神衣を織る、又麻績連と云氏人、麻とりみて和妙荒妙と織て、神明に奉る、神衣の祭とは、延喜式の祭の条なり、揖て生ず、二月小白花と望らく、虎耳草花の似て、三月実と結ぶ、青大豆の如くして、四月、数顆攢り生ず、楊梅の揉くの葉の交りの裏なる、外色青く内紫黒色、小児皮と剥て食ふ味微酸く甘し、

覆盆子

本草 蔓に鉤刺あり、一枝五葉、葉小して、面皆皆青く光の薄くもて毛あり、白花と望らく、四五月実なる子と成こと

岩梨

和漢三才画会 江刀三井寺の山中に生ず、苗の高サ二三寸、葉の大サ瓢樹の葉の如くして尖り、地に揖て生ず、二月小白花と望らく、虎耳草花の似て、三月実と結ぶ、青大豆の如くして、四月、数顆攢り生ず、楊梅の揉くの葉の交りの裏なる、外色青く内紫黒色、小児皮と剥て食ふ味微酸く甘し、

覆盆子

本草 蔓に鉤刺あり、一枝五葉、葉小して、面皆皆青く光の薄くもて毛あり、白花と望らく、四五月実なる子と成こと

蓬蘖よりも小くして稀疎に生ずるものは黄に、熟すれば烏赤に、本草附注 子覆盆の形に似て、故に名づく、○ 蓬蘖、覆盆子、薦、樹苺、蛇苺、石藤 和漢三才図会 莞花、俗云以波不知花葉並に藤に似て小し、三月花と望らく、紫色、或は白花、又は草藤上の説のごとし、紫花白花の二種あり、三月より四月に至て花と望らく、又一種夏藤なり、黄白色、蔓葉花ともに紫藤に似て小し、山州山科の近道に往て有り、四月花と発く、

馬蓼

大和本草 木草凡物の大なるものの馬と以て名づくと云、日本にては、相似て、芋のごとく犬蓼、犬山椒、犬黄楊、おどろ、いぬ蓼は葉に黒点あり、

芋植る

芋の注、秋部

紫羅傘

本草 紫羅傘、鳶尾と名づく、葉射干に似て、花の色紫碧、抽でず、其根と鳶頭と共に茎二入る、○鳶尾は燕子花の類なり、花早く開く、一の茎に白花もあり、

石蘚花

或は石蘚に作る、本草 石上に叢生ず、其根糾結して甚だ繁く、茎葉生じて皆青色、乾くときは黄色、紅花と望らく、蘚の上に自ら根鬚を生じて、亦折下して、砂石と以て栽之、或は物と

以て盛り、屋下に掛、頻りに澆ぐ水と共に寸、年と経て死に、俗に称して

千年潤石蔚

藺花 本草 虎鬚草、一名燈心草、即竜の鬚のごとし、

但し竜の鬚は堅小にして、甄実す、此草は稍粗にして甄虚ちて白し、呉人栽之時、甄を取て燈炷とす、艸と共に席及び蓑と織る、和名抄 藺、和名為、年色立成云、驚鳧尻刺

五月

卯地打 世諺問答 今日、童の小弓を持ていんちとすること何の故ぞや、答む、左右の馬場に、馬に騎て弓射るこの侍るべしとて、この日ごとに、是にや始とぶべし、 紀事 児童、柳の木を以て大小の刀と作て、腰を首浦刀と云、男児これを腰に横へ、頭巾と着て、山伏の体をなして、晩に及て、鴨河の辺に出て、左右に列て、礫を擲て相戦ふ、是を卯地と云、

守宮を搗 武帝記 端午の日、守宮を取て、飼ひ丹砂を以て体を赤く画き、次の歳此日搗之人の臂に塗る、犯すこと有ればなり故に守宮と云

生玉の流鏑馬 五月 神社啓蒙 生玉神社八坂津国東生郡、天王寺の辺にこれを祭る、処の神一座、天生玉神なり、

社家註進 明應年中、本願寺の僧、この所に来りて寺院を建て、神地を掠めて境内に接し、神を不潔と悪み、かの僧と罰し、僧おそれて、神殿造替の宿禱とい、ぶ、神主藤原吉勝に願辞を告ぐ、数日にして僧の病愈ぬ、遂に神殿を今の旅店の廻りに迁し奉る、其後信長の兵火に焼て、灰燼となる、後に神璽を別所に迁す、慶長年中秀吉城郭を築の刻、今の地に迁す、 紀事追加 今日午の刻、流鏑馬を門外に立て、鳥居の方へ馳す、其装束腹帯陳羽織を着て、只一さんにして止む、

今宮祭 九日 今○山城国愛宕郡紫野にあり、 十五日用 祭る所牛頭天皇 諸神記

正暦五年六月廿七日、疫神と船岳山に安置せ、長保三年五月九日、疫神と紫野に迁座せ、霊夢の告ありて、京師の疫疾御霊会と行ふ、 紀事 午時神輿二基、相殿の宮各旅所に出び相殿の宮、一説愛宕の宮、古へ愛宕権現鷹峯に移す、一条院御宇勧請す、此社と今の愛宕山に移す、愛宕卒社地主神、故に社と守、神幸の日、鉾十二本あり、凡

鉾を出す町所々ありて、別當供奉し、氏子相従ふ神幸小川通りより元誓願寺大宮通りを過、船岡山の北の林麓を過て本山へ入る、

六月 忌火御飯

江次第 忌火御飯 六月十一月十二月一日早旦供之 以御臺盤一脚供之次供御飯御菜四種和布御汁一坏下畧 公事根源 内膳司より奉ると、大床子の御座にて供ずるなり、景行天皇の御時よりはじまる、忌火とて火を忌むなり、神事などの時ハ不浄の火をうちかふるをいむや、これハ月次神今食の御神事を今日より始めらるゝなるべし、

嚴島祭

十五日 藝州佐伯郡宮島にあり、祭る所の神三座、市杵島姫神、田心姫神、湍津姫神、○或書云推古天皇の御宇、播磨国の住人内舎人佐伯の鞍職、當国ニ左迁ス、恩賀の島にあり、時に紅帆の船来る、船の中に瓶あり、瓶の中に鉾を立、赤幣を着、うちに三女あり、容粧端正、告て曰、我皇祚守護の為来現せり、よろしく宝殿を恩賀の島に造るべし、と云々、時に推古天皇二十二年十一月、叡聞に達し、社を営み、嚴島大明神と号す、始の名ハ恩賀の島、後に市杵島の神号を用ひて、いつくしまと呼、或ハ地景の美を以て称す、當社、後ハ深山、前ハ蒼海、左ハ原野、右ハ松原、その野に水あり、御洗

井と名く、蓋し當社ハ山上にあり、廻廊ハ平地にありて、海潮みつる時ハ廻廊をひたす、乾る時ハ干潟五十町ばかりなり、無双の絶景なり、今通して宮島と号す、○池の御前ハ同国安藝郡にあり、嚴島と同じ神体なり、毎年六月十七日の夜、ここの神輿船舞楽を奏し、此に渡る事を清會と云、平相国清盛、霊験をたのみて、これを建立す、其後弘治二年、陶晴賢滅亡の時、兵火にかゝりて回禄す、ここに於て毛利大膳大夫元就再興す、廻廊周百十八間ありと云、例祭六月十五日より十七日に至る、先ヅ神前御池にて管絃の船を組む、舸三艘を舫ひて、座を張渡し、藩を結ひ、竹にて樓を作り、花と灯籠を釣して前後挑灯数多ともして飾る、十七日御船澁申の刻、件の舟を大鳥居の正面より乗出し、管絃を奏して外宮に押渡り、酉刻より管絃を供僧伽陀并舞楽畢て御船を嚴島へ漕戻し、長濱の沖にて奏楽を奏、亥刻頃大鳥居のうちに漕入る、六月上旬から諸方の商人あつまり、十五日より群集するなり、町入といふ、くはしくハ嚴島道芝記に出、

伊勢祭禮

十六日 十七日 延喜神祭式 六月十六日度会宮を祭、十七日太神宮を祭る、其儀、十五日黄昏以後、祢宜、諸内人、物忌ホを率

みゝく神の御雜物を陳列し、記く、亥時夕膳を供し、丑時朝膳を供ず、祢宜内人ホ歌舞を奏す、十七日太神宮ホ参る其儀一度会ホ同じ、○外宮十六日内宮十七日ニまを行ハる、京師より御奉納の神宝を神主神殿に捧るとき、宮殿の御戸を開く、是を拜ん為に、諸人群参すゝ、十人の祢宜其外、廣前にて松明をそへ、祝詞を捧く、今日出家円頂の者を許るゝく参詣ゆさ

泉

尔雅 水の本を源といふ、源と泉と云 釈名 泉ハいづる水、いづるのゝとゝづのつゞと略せるゝ

泉殿、瀧殿、

○泉水の辺、滝の辺ホ造る殿舎をいふ、

嵯峨の大覚寺 栖霞寺ホ瀧殿ゝ、

神泉苑ホ瀧殿ゝ、源氏松風巻

井戸 昏、井

漢昏 礼儀

志 夏至井を浚へ水を改め、冬至ホ鑽を鑽て火を改ゝ、

瘟疫を去べし、○さゝ井ハ六月井を浚るとゝ、夫木 松が根ホ多さゝ井とよみ、ゆくすゑも外の秋をしるゝ 定家

蘭苅

此草、俗後川く席ゝ、奏ハ門蘭花の条ゝを見べし、

白麻苅

和漢三才図会 苘麻 日向薩ホ多くゝ、

九州の土の産、其葉微し、胡麻葉ホ似て、大く鋸歯ゝ、本草綱目ホ、枲葉ホ似て、ハ、ゝ、ゝ、ハ、ゝ、ゝ精、ゝ、ゝ、○三餘齋曰、予遠州の種を得て、一年ハ其葉胡麻の葉、或ハ棣棠花の葉のごとく、花黄ゝく其実苺ホ似て、又翌年その子を種ハ則生じて葉桐の葉の如く、黄花を開く、扶ち揺の花の如く、実ハ半磨形の如く、是雄雌ゝ、ゝ、ゝ、ゝハ本草及び和三の説、ゝホ証とすべし、

櫟の花

時珍云、三種あり、一種ハ實と結び、ゝ種ハ実と結ぶ、其名を栩といふ、其実ゝ、其名を槲といふ、一種ハ実と結ぶ、其名を橡といふ、其葉櫟の葉の如くして文理あり、皆斜ホ匀る、四五月花を開く、栗の花の如く黄色 大和本草 今按ゝ櫟ホ似て同類異物あり、其木の高サ二三丈、実を櫟ホ似ゝ、

ろ 六月

六月會

或ハ傳教会長講会 六月四日ニまを行ふ、

公事根源 ゝ、ハ傳教大師の忌日ゝ、勅使登山の儀ゝ、

○山家説云、六月会ハ、弘仁十四年始て行ゝ、建暦三年ホ、勅ゝく御齋会ホ准ぜらゝ、宣命使あり、○釈最澄、姓ハ三津氏、近江滋賀郡の人、神護景雲元年ホ生き、弘

仁十三年六月四日寂す、年五十六、貞観八年八月、勅して傳教大師と謚す、此会八、叡山の谷々に論義を、会場一院で年番あり、十月天台会も同事く、

は

四月

鼻高祭 八日 大和名所記 毎年四月八日、南都興福寺中門内々、仏生会とおこなふ、伶人舞楽あり、其舞の中陵王の舞と奏する内、其面の鼻高きを、俗に此法会を呼く、鼻高 八部、佛生会の条に注す、

花御堂 同部、佛生祭とも云、

花摘 同部、戒壇堂開帳の条に注す、

花供 高野の花供、同部に見へ、

梅天 杜甫詩 南京西浦道、四月熟黄梅湛々長江夫、冥々細雨来、

梅雨 厳維詩 梅天一雨清、潜確類書 唐人成都と以く南京と、則蜀中、梅雨乃ち四月に在り、是四月の梅雨と云、

葉抑 本草 春初果蕚と生ず、即ち黄蕊又熟梅天黄梅天ともいふ、

葉櫻 戈广呂一汎ゆて、葉櫻と春花と開く、春晩に至く、葉長成す、

まつ見草 蕪門諸流、四月とせて首夏の新緑を賞する多し、

如花の異名、蔵玉 まつみぐさともぬまふ時鳥

立田の山の里み鳴けば、

花柚 大和本草 一種花柚、花ものを、其実小にして多くなるもの、酒ゆゑ美味如ふ故に名づく、味大柚に劣れ、

白丁花 和漢三才図会 花白く微丁香の気あり、故に俗に又賞すべし、

と名づく、小樹、高さ二三尺、枝茎動く、葉八狗黄楊に似て、四月小白花を開く、大サ三分ばかり、一種千葉のものあり、枝茎を折すれば、挿之活し、叢生す、墻籬際限なく、人家撫滴の下に植ふ、

北日草

花王 牡丹 白氏文集 牡丹芳花開花落二十日、一城之人皆如狂 詞花集 咲しうつるとみ〳〵しく花のうるはしみて北日〳〵忠通公〇改陽脩花釈

名 銭魯公嘗て曰、人牡丹と謂て花王と、今姚黄八真に其王なり、魏紫八乃其后也、本草 群花品中

花宰相 芍薬 牡丹と汎く并一〻、芍薬を花二と、故に牡丹と謂て花王

蓮の蕊 同上 蕊ハ藕芽泥を穿て白藕と成、即ち蕊、嫩弱、竹の行鞭の如く、長さ、芍茎と花相とすく、

その丈余に至る、九六月蟄を時、水に没ぶく取之、蔬と為て

蓮の浮葉 荷葉清明の後初て水ニ貼
茄ふづし俗ニ藕綵菜と呼ぶ
[和名抄]蕅 和名波知須之波比、
す、是を
浮葉と云、
飛蟻 [和漢三才図会]蟻ハ羽ある蟻之、人家の古き
松の柱の間ニ蟻生ズ其蟻細ニ白く、罌粟
子の如し、黒点ある処頭之尋て黄赤ニ変じ翼を生ド、再び
黒く変じて群飛す、奈何してもするなくあさえず相傳ふ咒
いの哥を書て其柱ニ粘ときハ蟻ことごとく除去るとぞかく
試ニ驗ある其哥詠人の詠あることをしるべし「むかしより八山ニ
住べきものあるらし里へ 初松魚 [東医宝鑑]松魚性
出ることおのがあやまり、 平ニして味甘く毒なし
し内肥色赤くして鮮明なること松の節のごとし故ニ松魚
とす東北江海の中ニ生ず[大和本草]相州鎌倉或ハ小田原
の辺ニてとるを釣て江府ニ送ること早く出るものを初鰹と
称し賞味す○烏帽子魚 鰹と云、之部ニくハしくみるべし、
[兼三夏物] 麨 [和漢三才図会]麦を炒、磨て細末ニし飛
羅て冷水ニ浸してこれを喫る、砂糖ニ
和して愈食之、○ 早鮓 是又一夜鮓と云、おさなくハ此製
俗ニ麦こがしと云、 魚貝の数種を細く截て醞醸

す、故ニ柿鮓とも云、其熟すること
さらし、依て早鮓一夜鮓とも云 ちく鮓 [毛吹草]羽州秋田
のちらく鮓、是 蝇 [本草]夏出て冬蟄ス暖を喜び寒
鰶ニ似る魚之、 を悪む、其蛆を胎く蛆と生ズ、灰中ニ
入く蛻化して蝇となる、蚕蛹の蛾ニ化
するが如し、水ニ溺て死し、灰を得て活く、 蝇虎 [同上]小蟢
蛛之、専ら
蝇を捕て喰之
是を蝇虎といふ、 方目鳥 [和漢三才図会]鷭、正字未詳、按ニ
大さ鳩の如し、黒色、短き尾、
尖なる嘴本紅ニ末黄之、脚長くして正青し、常ニ田沢ニ
鳴、夏月鷭を以て上饌とす味美之、又大鷭ハ形ち鷭ニ
似て大之、形色少し異之、[尓雅集註]鳩ハ即ち護田鳥なり、
人となる時ハ鳴く、主の宮を守るニ似ることあり、故ニ名之、
茖草 蘇頌曰、根叢生を作す、窠毎ニ三十茎を登ニ
赤きまた黄なるあり、七月黄花をひらく○陶弘景
曰、莖苗を取
て掃帚とす、 水馬 け部競渡の条ニ注す、 梅雨 さ部、五月雨の条ニ注す、
半夏生 [本草]半夏一名守田、礼月令曰、五月半
夏生、盖當夏之半、故名守田、[月令廣

義半夏ハ藥草ニ夏の半ニ居て生ず、月令
○五月中ノ旬ニ土日ニ半夏生ト云、

反舌無声

礼記疏ニ反舌ト蝦蟇ト云、

博多百合

和漢三才圖会 花黄白色ニて、背ニ赤き斑の文理あり、云

花菖蒲

白菖の屬ニ、其葉水菖蒲ニ似、色淡青、水陸ニ宜し共ニ叢生す、五月一莖ト抽でゝ莖端ニ花ト生ず、形状燕子花の如し、紫淡紅白ホの数色ニ、最も愛観すべし、水菖蒲ニ似ル花ともらく故ニ花菖蒲ト云

紫羅襴花

本草 白菖二種ニ一種ハ池沢ニ生し、根大ニ俗ニ是ヲ泥菖蒲ト云、一種ハ溪間ニ生ズ根瘦赤節稍密なるもの溪孫ト、俗是ヲ水菖蒲ト云、和漢三才図会 白菖ハ葉花皆燕子花ニ似ル、瘦少く、其花紫色、又白花あるあり、淡紅あるあり、

花ごろも

此ものの古来浅論多し、但し八雲御抄 童蒙抄 其外 頭注 密勘 等の諸ホ、菰のすゑ生るホ姿くさ〳〵、又田字草のこと云、競ヲ云、物の絵様ニ四出の花ト云ふもの、是ハ田字草のこと、

初蟬

七部蟬の条ニ可見

羽抜鳥、羽抜鴨

凡諸鳥、五月羽毛脱落あるも禿頭のごとくなるを羽抜鳥ト云、

新六 夏草の野沢がくれの羽抜け鳥 為家

六月

○博田櫛田の神社ハ筑前国那珂郡ニ在る祭る所の神、中殿ハ櫛稲田姫命、或説ニ大若子命、勧請ハ天平宝字元年、右殿ハ祇園牛頭天皇、勧請ハ天慶五年、左殿ハ天照皇太神宮、勧請年月詳ならず、件の三神相殿ニ正月八日正大般若を修す、六月十五日祇園会、十月二ノ卯日新嘗会、今六月十五日祭礼と行ふ、古八十六日十七日、永享四年六月十五日始て祭之、作山六基、大サ京師祇園会の山ホ四倍ト云、右山次第ニ上張りホ組上ケて、階上凡百人と居らしむべし、一基と引ス凡千人ニ及ぶ、木偶人ホ鎧ヲ着セて、階上ホ立て其甲冑ホ皆姓名と書あらハすが故ホ、領主の家臣、我もくとじと美と尽して着用の鎧と出すこと、此祭礼の為ニ也、

博多祭

十五日

橋立祭

神輿三基、供奉の行装又厳重ニて、

風土記

丹後国与佐郡長の方ホ速石里あり、里中ホ長き大崎あり、長サ二千二百二十九丈、廣サ九丈二尺、是ト天

橋立と名づく、又八久志濱、又八久志之渡と名づく、

拾芥抄 智恩寺八是、切戸文殊安置の道場み〻〻、天竜六斎灯明を供ス、

紀事追加 六月廿五日丹後切戸の文殊会、同橋立祭ニ、文殊会、橋立祭同事ニ、○天橋山智恩寺八延喜四年甲子勅願〻〻山号寺号とゝ〻、荘田と賜ふ、その〻ち四百余年を〻く、嘉暦年中、嵩山禅師住持ス、是禅刹の始ニ、夫〻〻三百余年、住侶詳ならず、寛永年中、国主京極高廣、別源禅師を請ぜ〻〻住持セ〻む、是より洛の妙心寺に属す、寺領五十石余、文殊堂八巽向ニ明暦年中改造、堂内ニ延喜の勅額あり、○橋立明神八、本社豊受太神と祭る、左八大河大明神、右八大竜王と祭 ○伊祢浦名所ニ、伊祢八惣名なり〻〻、九日出より亀島まで、入江の裏向ニ、丹後鄙ニ八、此所なりとる、鯨あるとる、○天橋立八、与佐の海中にある長洲ニ、長サ三十六町、土人浮島とゝ八誤ればなり、松樹亜木のやうに連なり、碧海中央六里松と作りて、詩人六里松と称ス、社の近処樹の茂りたる所と濃松とらい、おろかなる所を淡松と称スニ、俗に三保八捎ぶ〻〻く、橋立八一枝をうつしたるなり、

あ〻〻ら、二町ばかりの舟渡あり、是と九世渡とゝ、世に切渡の文珠とゝも是ニ、ゝ内外濱、子日の崎、萬代の濱あるとも、此橋立の別名なり、○竜灯松八、泊磯の辺にあり、松樹蓋のごとく、苗と生ず、一茎、くきの端に三つ葉を、浅緑色、頗る竹の葉ニ似ゝ、○此をの和産と相同じ、花八夏のはじめ秋に及ぶ、こゝるみたら

蓮花

尒雅 荷八芙蕖ニ、其莖八茄、其葉八荷、その花八菡萏、其実八蓮、其根八藕、其中八菂、その中八薏ニ、注ニ曰、芙渠八總名ニ、別名芙蓉、菡萏八蓮花ニ、

愛蓮説 蓮、花の之君子者也、○池見艸、蕗堪草、水堪草、

蓮実 貞徳曰、蓮八花ニ実と具してある故に、蓮の異名なり、蓮の実も夏ニ、蓮の実飛て秋ちる、

草

あ部、麻の葉の条ニ出ス、

○十六日例幣使野州日光山ニ参向、拝礼の儀あり、申の刻神輿三基、御宮を止〻〻奉て、新宮の拝殿に迂幸ありて、宵宮ニ、三仏堂の前に於て、例年の舞を奏ス、翌十七日巳刻に榊と御依所に渡〻〻奉る、次に御祭礼供奉の行装あり、新

四月

日光祭 十七日

宮より御旅所へ至るの間、凡十五町ばかり、矢士鳥兜鉾を持、職士赤面の大鉾八、猿田彦命と表す、獅子頭、田楽法師、神示男、女、三綱馬上素襖裃、社家馬上束帯、御神馬、御弓、御鉄炮、甲冑童子、御翳、大鼓、鉦、鼓、猿公、宮仕、神人、伶人奏樂亦有之、雇馬、匠、御祭礼奉行諸武家駕輿丁素襖、御本社神輿、白張百人、素襖九人、山王一説日光権現の神輿、白張百人、社祢北人、麻多羅神神輿、白張百人、社祢九人、行者山伏群行す、御旅所に於て献供の間、東遊奏示あり、終りて神輿還幸、御本社に奉る、日光三社とは、新宮大己貴尊、滝尾思姫命、本宮味耜高彦根命、外に家光権現、こゝに下照姫あり、三社の祭礼は三月三日あり、

煮酒

東医宝鑑 煮酒は味い殊に佳し、夏月のひは豆〻是本邦の煮酒に似たる名目と挙るし、本邦にては、夏日酒の氣味と失まざる為に、煮酒の法を用ふ、京師にては、是を酒煮と称し、此日酒肆、親き疎きとえらばず、價を〻べ、悉く酒とのまむ、是を酒煮の祝とふとぞ、

兼三夏物

煮冷

い部、冷汁の条に注す

煮取

和漢三才画会 鯉節を造る時、其液の滞るものを取て、こなしとし収む、黒紫色、味甘美、○煮取〻愛でもお僧愚〻 嵐雪

五月

入梅

さ部、五月雨の条に注す、

恐冬花

金銀花○弘景曰、此草藤生ス、冬も凌く凋まず、故に恐冬と名づく、○時珍曰、木に附て蔓延す、茎微紫色、節に對て葉を生ず、葉薜荔に似て青く、濃毛あり、三四月花を開く、長サ寸ばかり、一蒂に両花、二瓣、一ツは大、一ツは小、半辺の状の如し、長蕊、花初て白色、二三日を経れば色黄に変じ、新旧相ヤ〻にして、相映ず、故に金銀花と呼ぶ、気甚だ芬芳し

和名抄 恐冬 和名酒比可豆良

鳰の浮巣

大和本草 鵜、字彙に、好入水食、似鳧小、鵜鶴も

和名抄 鳰 俗に鳰の字を用ふ、万葉以下の古哥に、鳰鳥とよめる是〻、水上に浮巣を掛て、風に隨て揺ふ、

新名抄 祐盛法師曰、鳰の浮巣とは、かの浮巣を、ゆゝしきものにあらぬ、海の潮にさゝらるゝとのみ、ゆゝしきものにて、鳰の巣とくふは、芦のくきを中にこめく、俤も拈穂をぐ、くろげてめぐらふ、これは潮にとゞ上るあり、汐にまばゆきぶいてくるし、

幻住菴記 今年湖水の波にたゞよふ、鳰の浮巣のあぐれとゞまり、芦のねもと

の蔭ゆゑ〳〵く〳〵 貞享式 鴫 ゆゑハ鷺ゆゑハ鳥ゆゑハ水鳥の用あるゆゑバ巣とゆゑ〳〵べてハ夏と決すべし鳴の浮巣と
いつべ、古式に雑とゆゑせることゝて、水中の芦ゆ巣と掛ゆゑ水の増
減ゆ浮き沈みて、四季ゆゑと其すゝ捨おく故ゆ道理とつゞ
く雑とハゆゑゆゑゆゑ、鳥の古巣ハゆゑ〳〵くゆゑるものゆゑ〳〵、其巣
と成る時ハ夏ゆゑゆゑ、浮巣ハ決して夏と定べきゆゑ、
巣ゆ用ゆゑゆゑハ
勺作ゆゑ〳〵

六月

蒜根 本草 萌蒜、夏月根と食ゑ

八〆風瘴両加ることあゝ〳〵べ、○和俗土用に
入る日、蒜及小豆と食すゝハ瘟疫と辟んが為に、

佛の産湯 ふつ部、仏生会の条に出、

厚朴の花 本草 厚朴、其木質朴ゆゑ皮厚

し、故ゆ名づ、 和漢三才図会 按ゆ、厚朴、葉大ゆゑ〳〵ものハ尺ゆ近
し、擬の葉ゆ似て刻歯あり、色浅緑、冬凋て春嫩葉を
生ず、夏花を開く、形牡丹花ゆゑ〳〵、色浅紫、大サ一尺ゆ
う、隨て実と結ぶ冬青子ゆ似て、熟すゝ時ハ殼自ら
裂て、裏赤く、中の子黒し、老木
の皮ゆて鱗の皺を剥て苦用ニハ、

牡丹 事物紀原 隋煬帝の世に始て

牡丹と傳ふ、唐人も亦木芍薬と云、開元の時、宮中及び民間
競て尚之、今品極て多し、 貞享式 牡丹、杜若、この二名
ハ和漢の遠ひゆゑ、詩に牡丹を春と詠し、哥ニハ杜若と春
とす、中古ゆ俳諧の加減より、二名を夏ゆ用ひゝ、初夏ゆ
ハ花の出る故とぞ、○木芍薬、花の王、ふゝ草、花日草、
富貴艸、ふゝひ草、夜白艸、名取草、以上牡丹の異名、
ものゝ頭字の部ゆこゝ出せるとゝぐし、○年浪草ゆ、八
雲御抄と引く、山橘と牡丹の異名とする八八雲の誤と傳へ
たるものゝ、万葉ゆある山橘ハ、数桁子のゆゑ、又先代旧事
紀と引く、豊橘と牡丹のことするもこゝ、此先代旧事紀、偽
書ゆゑバ、専ら取用ひべし、此
二の名、牡丹ゆ用ふ〳〵ゆゑ、

嚢鐸花 本草 鬼臼の一種ゆゑ、葉数層を

ゆて、莖麻ゆて、面青く背紫ゆて、細毛あ、葉下ゆ莖を
付く、一花と開く、状鈴鐸のごく、倒ゆて青白色ゆ
て黄蕊、中空し、黄ゆる実と結ぶ、風吹バ動ぐ、凡ゆれ
バ自ら搖く云、 和産のもの、形状相似て異 てくぜとこの
草、園史艸史ゆ載ス、俗に狐の挑灯ともの是くとぞ、莖の高
さ一尺ばかり、葉ハ野車ゆ似て、細し、白花ゆて、内に青さ

彩竪に三條ぶりあり、花釜咲て、まことの宝鐸に似たり、江東原野に多しと云

杜鵑 和漢三才圖会 杜鵑の形ハ雀鷂のごとくにして、色灰黒腹白し、鷹の髭あり、翅も羽も白き斑あり、口中赤く、頭に小冠毛あり、脛掌蒼色、其前の指二ツ連膜あり、後の趾二ツ、諸鳥に異なり、季春鳴声ほぞんかけたかと云がごとし、夏に至て最多し、初秋に至て声やむ、冬月ハ深山に蟄すと云、○杜鵑の一名、和漢ともにさまで多し、杜宇、子規、鶗鴂、郭公、霍公鳥、姉帰、○蜀魂、不如帰、冥途鳥、四手の田長、沓手鳥、倶伎羅、謝豹、橘鳥、時の鳥、恋し鳥、三月過鳥、烟鳥、童子鳥、賤鳥、勧農鳥、以上各頭字の部にわかち入て注す、○杜鵑ハ鶯の巣の中にて生育よしとこと古へよりいへり、万葉 鶯之生卵乃中尓霍公鳥独所生而已父尓似而者不鳴已母尓似而者不鳴 下畧、又 續世継物語にもほとゝぎすハ其時頼政哥、ひとつ〳〵ひとのこゝろあるはほとゝぎすがなきの音すなるまれなりともいへり、今もたかく鶯の巣にて生じたるを見たる人まれなりと云へり、

兼三夏物

子孑 和漢三才圖会 俗云棒ふりむし、溝泥の中、温熱相感じて小蟲を生ズ、長さ二三分、灰黒色、微し科斗の形に似て、常に一曲一直して、棒を振る状のごとし、

蛍 月令 腐草化為蛍 和漢三才圖会 蛍大抵大サ三四分、黒色にして、両額に赤点あり、臭気あり、其尻銀色の処、夜光を出す、紙に裹めども赤光り外に徹る、藁稍を用て揉砕けバ銀砂のごとし、○窓の蛍、蒙求 晋の車胤家貧くして常に油を得ず、夏月には練の嚢に数十の蛍火を盛て書を照らし、夜を以て日に継ぐと云ことあり、窓の蛍とハ云也、○近世、哥学家の説に、俗にほたるびと云ハ漢字に蛍火と書けるを、そのまゝよみたる言にて、本邦古くほたるびといふことなし、ほたるとのみよみたり、実に後世の俗言なるべし、但し和泉式部家集などにも、ほたるびとよみたる哥もあれバ、今ハ漢語俗言ともに用ゆる俳諧の上にてハ、あへてとがむべきことにあらじ、猿蓑集 蛍火や吹とばされて鳩の窓、

五月

蒲人 金門記 午日、菖蒲を刻て人或ハ葫蘆の形を作り、諸物をつくり、髪に戴て以て邪を辟くと云々

火串 牧部、照射の条に注す、

六月

乾瓜 和漢三才圖会 新瓜を用て縦に八ツに切り

甕と去り、塩を摻ー、暑熱の石上を晒乾ー、六七日を〻能く乾き〻ると、磁器を扨め、用ふ〻時は浸ー

乾飯 引飯 同上 糯は乾飯と糯と用て飯を煮て晒乾ー、粗く磨り、頭まを去り、中芽のもとを取る、夏月冷水を浸ー、饌之、奥州仙臺道明寺を作る処最も佳し、○常に道明寺と云

兼 多識

三夏物

蛇 蛇の種類最多ー、委くは本草を考へ、

篇 金蛇 古加祢、銀蛇 志呂加祢、水蛇 義豆、蝮蛇 倍美 本草 蛇皮、蛇殼、竜子衣、

久知波美、○此外書つ〻が〻ー、

五月 **蛇衣脱** 本の名あり別録五五月十五日を取て〻、

蘓頌曰 南中木石の上、及び人家墻屋に多く之を取り、蛇蛻時なー、但ー不浄と着せは即ち蛻く、或は大飽ー

紅藍花 未摘花 同上 紅藍、其花紅色、葉は藍に似り故に藍てと亦脱す、

の名あり、家の場圃に種る処冬月、熟地に子を布く、春に至て苗を生ず、夏花あり、花の下に球蕚をのして刺多く、花球上に玉ッ圃人これを采る、采りやむときは復出ッ尽る迄至て止む、株中に実を結ぶ、白顆小豆の大サの如ー、その花を曝乾して真紅を染、又胭脂を作る、和訓義解 紅花、初め未詳聞次第に本に咲く咲に随て摘るに故に未摘花と云、

六月 **糸瓜の花** 秋部 注ス

土塔會 十五日○拾遺東生郡、四天王寺南大門の下に塔塚の前、土塔の宮を、等る神牛頭天王、古は毎年四月十五日大祭礼と行ふ、今他領と為り、大祭礼絶ー、ちなみに共今に於ー、天王寺の僧堂司示人催ふ仕神事と行ふ、次に四ケ法用、仁王経、法則、舞示を是を土塔会と云

常磐木の落葉 四時潤 諸木の新葉生ー て後に葉の落るを云、年浪草、多くは松のごと常磐木と冊ふ、松の落葉は秋と雖ども、夏に八松の外の冬木ともに泥めるまで松杉共外四時不凋の木と為ー、○清滝や波に散こむ青松葉 芭蕉

常夏 撫子の条に注す、

時の鳥 杜鵑と云、時鳥と云と、字のごとく訓る、時の鳥とは五月を云と、初聞鳴ん 俗成

薫夏物

通鴨 大和本草 日光山中禅寺の湖に真鴨まむ甚小ー黒色二種を沙黒と常に居て、北へ帰る、○凡水鳥、秋冬に渡るその八春月に帰ず、古巣に帰るその中に稀に池中ー常居するもの、芦葦の間に巣を営て雛を生あり

と通ず

一鴨と云、

五月

桃印符

続漢書 桃印ハ本漢の制、以て悪氣を止む、今の世端午に絲僧篆符を以て相問遺ふと以て屏帳の間に置く、

歳華 風俗通に東陽度朔山に太桃あり、十里に蟠屈、其北に鬼門あり、二神是を守り、以て凶鬼を禦ぐ、

蟐生

月令 小暑至螳蜋生

虎

雨

紀事 毎年五月廿八日多く雨ふる、俗に云ふ大磯の虎娘子、曾我祐成に相別る涙変じて雨となる、故に今の雨ハ虎御前の涙と云ふ、○虎ハ祐成討死の後尼となり、所の翁と案内すと、井手の屋形の辺り、祐成の最後の跡と云ふ、いづれ歟ふ、「露とぬ消ん跡と来てみ」

照射

孫部、鰐狩の条に出ス、

六月

土用

月令 中央土其日戊己、注土ハ四時に寄旺すると、各十八日、共に七十二日、此を除くハ木火金水もまた各七十二日、土四時に分てあるとなり、故に之る位に、専気なるべく、辰戌丑未の未に寄旺ス、未の月火金の間なる、又一歳の中に居故中央土一令を此に掲ぐ、五行の序と事、

土用干

むし部、虫干の条に出ス、

虎尾草

大和本草 虎尾艸ハ葉の如くして長く尖り、又徐長卿に似て葉の長さ二尺余、夏秋白花を開く、穂と事、形ち獸の尾の如し、花紅白の二種云、此もの中華に所謂、

時計草

かつらに似て細き蔓出、竹木にからみつく、葉のごと、花形ちせん風車に似たり、朝四ツ時に開き暮六時萎む、その次の答又明日ひらく、花八日あれども相続て盛久し、花ひらくときの様子偶偶と操るが如く、回るべく、夏葉に時計の栽のごと、○享保年長崎

東陵瓜

続蒙求 邵平故事に初て来る、

びて布衣となり、家貧くして瓜と長安城の東に種、瓜五色あり甚美し、世に是を東陵瓜と云、○又支那の瓜に東門青門等の名あり、邵平が故事に、

黐突

和漢三才画会 黐膠ハ鳥と黐所以のものあり、其樹数種あり、深山にあり、無大にして子を結ぶ、その黐にして少あり、子と結ぶもの黐にして多し、其色もろ〳〵、木葉女貞に似て薄く光沢あり、四時凋ず、

とらんでも、尺二三分落葉す、四五月細き白花と結ぶ、子を結ぶ正円なり〳〵熟すればバ紅色、攢り生る、其木の皮を剥て水に浸し煉り〳〵、是と流水に濾し皮渣を去ればバ麻筋の如く〳〵、甚稠粘る人用ひ鳥雀を粘す、是と黐と云、

心太 和名抄 大凝菜、和名古留毛波、俗ニ用心太ノ字ヲ云古ろろぶと 古呂布止○本艸 瑞枝 本朝式 凝海藻 閩書

石花菜ハ海石上に生ず、性寒、夏月ニこれを煮て凍らす、

ち 四月 地主祭

九日 庚富記 文安四年四月九日庚午、清水地主権現祭、神輿午刻還向き、其後獅子舞す〳〵、田楽ホの舞了る、○雍州府志 地主、古ハ旅所白山通五条の北にあり、今石地蔵の存る所〳〵、祭日暫し神輿を経書堂の前に居、是旅所の義を表す〳〵、清水縁起 祭る神田村将軍の霊〳〵、ちさの弘仁三年四月延鎮奏して、清水寺の鎮守とす、

苔 田圃家園に多く栽、三四月苔を起し、苔肥中空して脆し、これを折ればバ白汁あり、菓毎に苔と抱へ相重りて又と多つ、四五月黄花とむらく初て綻ぶ野菊のごとし、一花子とむすびこと鶴虱の子のごとし、

茶挽草 和漢三才会 雀麥 茶挽草田野に多くの生ず、穂粒を爪の上に載せば旋回するを、苗葉小麥に似て弱小、穂細小、小児茶磨を挽ぶ〳〵、依て名とす、

五月 重五 月令廣義 五義

月五日故ニ重五と云、

粽 菰粽、角黍、錐粽、茭粽、秤鎚粽、九子粽、芦粽、笹粽、飴粽、飾粽、字彙 粽餐同、一名角黍、風土記 端午ニかしはの葉粽、鶩を烹、筒餐を進る、一名角黍、菰の葉を以て粘米栗枣と裹み、灰を以て煮て熟せむ、蓋し陰陽包裹して未だ散ぜざるの象なり、月令廣義 九子粽ハ角黍に、唐の時、歳節端午ニ、粽の名甚多〳〵、形制も一なるべず、角粽、錐粽、茭粽、筒粽、秤鎚粽、或ハ秤鎚粽ニつる或ハ百索粽、九子粽あり、続斉諧記 屈原、五月五日汨羅に投ず、楚人これを哀み、此日に至るごとに竹の筒を以て米を貯へ、水に投じて祭之、漢の建武中、長沙の歐回白昼ニ一人となる、自ら三閭大夫と称し、回に謂て曰、祭らるゝこと甚し〳〵、但し蛟竜に竊られて苦しむ、今〳〵惠わるべ楝の葉と以て其上を塞ぎ、五綵の糸を以て之を縛ぶべし、この二物、蛟

竜の長さ二所ありと、今の人粽とつくり、絲糸及び楝の葉と帯ぶ、蓋その遺風か、本草 古人菰芦の葉を以て黍米をつゝみ、煮て尖角ありす、搜神の葉の心も形の如し、故に粽という角黍と云、近世多く糯米と用ふ、今俗五月五日節物とす、相ちがふ、或云、屈原と祭るゞ為ニこれと作りて、江ニ投ずとぞ、本朝食鑑 飴粽ハ、糯米と用ひて、蒸熟し、搗て餅とも、稲艸もて、外と稲艸と以て薄て、甑の中に蒸熟し、とり出して稲艸を剥さるゝハ、黄白の色あり、飴の色の如し、故に名て、味美し、微し香あり、をゞて粽の類、市人道喜と云者、巧みに造る、故に道喜粽と云、今京師の市上、専ら此粽を以て、贈送の物とす、○飾粽、かゞり粽ハ、天福本伊勢物語ニかゞり粽云〻注ニ五月五日、粽といろ〻の糸もて結ひとゝ云、拾遺集十八の詞書ニかゞりちまきとゝ、今も大内もハ五色の糸もて飾る粽とさゞらし、○今按ニ伊勢物語、かゞりちまきとある本ハ、かゞり粽の写誤とつくるものゝ、此段ハ大和物語ニも出て、かゞり粽とあり、又伊勢物語大ゝの本ゝ、かゞり粽とあるハ、此ゝ粽と云名目ハ削て去べし、塩嚢抄 粽の形ハ蛇に似せて巻く、是を服して毒虫を殺すゝと表す、

長命縷

續命縷、辟兵繒、五絲、絲、朱索

條達 風俗通 五月五日絲を以て辟邪に繫ぐハ、兎及び兵を辟ける人とて瘟と病ざしなり、一名長命縷、一名辟兵繒、一名五色縷、一名朱索、初学記 北人端午に雜絲を以て、合歓索と結び手の臂に纏ふ、一名條達、又條脫と云、雜物と織組て相贈遺る、及び日月星辰鳥獸の形、文綵金縷帖画を、秀尊に献ず、○是本邦の茅王ニ同じく部茅王の条通りて、

竹醉日

たけ部、竹植る日の条ニ出す、

六月

竹生島祭

十五日 神社啟蒙 竹生島の神社ハ、宇賀御魂神、聖武天皇天平三年辛未、竹生島の神現形ス、神社考 竹生島ハ、江州の湖中にあり、其巖石水精宝珠多く、本朝五奇異の其一なり、傳云、孝霊天皇四年、江州の地游て湖水始て湛ふ、駿州富士山忽ニ出、景行天皇十年、湖中に竹生島初て涌出ス、昔行基菩薩、此島に来るとき、神女現形ス、行基もゝ〻て寺と建く、辯才天の像と置、紀事 例祭六月十四日十五日、是と法華会と云、湖上ニ舟と浮べ、音楽と奏ス、神輿の船湖上に浮ぶ、毎年正月十日、社僧の中にく頭人と撰む、

○社僧説曰、此祭ハ、江州浅井郡の中あゝ、豪富の人と撰て、頭人を定む、旧記に、神亀三丙寅年、天照皇大神宮、祭主廣見ゐ神勅あり〳〵、岩倉山太神宮寺と云、額を送るゆふ、札所観音と宝厳寺と云、同年六月十五日、聖武天皇、掘諸兄、房前大臣、両勅使と以て、蓮花会と修せ〳〵めゆふ事、〳〵、今ゆ至る〳〵祭祠絶ず、毎歳頭人両人と定め、神事と司らむ、浅井郡捻氏神ゆる故、四民共ゆ差定す、往古ハ、近江国中へ差定せし也、、按るふ、この島、嚴山ゆ属す、山門由緒あるの灵場ゆゑ、近江一国ゆ預ること疑〳〵、此祭ハ、先ッ六月朔日ニ尊天と、頭人の家ゆ神幸〳〵奉る、天女の新像是と、假屋ニ安置し、十四日迄と御旅と称す、此日島ゆ於て舞乱あり、児四人舞を、十五日新造の天女の尊像と、神輿ニ迁〳〵、還幸と催〳〵、頭人供奉ちて、神輿と、早崎の一の華表へ立、供物と参詣の人ゆ施〳〵与ふ夫より島へ渡御、神輿船と、鳥船と、金翅鳥と粧ふ故ゆ名く、笛太鼓ゆて囃し、大船二艘と舫ひて、大竹ゆ五色の幣とて、幕と張、神輿船と飾り、頭人夫婦供奉す、管絃船、警固船ホ、大船十艘漕列て〳〵島渡りを、是と法華会と云、神事の法会、多〳〵蓮花と用ふ故ニ名づと云、又三月三日、心経会と修す、俗ニ是を島繋と云、別ニ記を、

竹生島妙覚院登翁記

牛頭天王と号す、又武答天神と云、或時、南海の女子と通じ、日の暮ゆ会ぬ宿と路の傍ゆ借る、二人あり、兄と蘓民将来と云ひ、弟を巨旦将来と云、兄ハ貧〳〵、弟ハ富り、神宿を巨旦ゆ乞ふ、聴ず、宿を蘓民ゆ借る、蘓民ゆて許す、粟箕を坐して、粟飯と献ず、其後八年ゆ〳〵、神其八子と将て、蘓民が家ゆ来り、その徳と報ぜんと欲し、蘓民ゆ教て、茅の輪と作らむ、其夜天下疫病大ゆ行り、人民死ること其数を知ず、唯蘓民が家の免れ得ぬ、是ゆ於て、武答天神告て曰、我ハ是速須佐雄能神と、今〳〵已後、疫を起らば、必蘓民将来が子孫あるとらんく、茅の輪と つくく、其災を脱るべし、

御湯殿記

茅輪、菅畳、神社考 素盞烏尊、児童、時、

夏 ちり

挂川へもつらし、蔵人所小舎人山科家紀氏調進ス○菅貫を茅輪も同物也、加茂神事次第ニ、次ニ入菅貫之輪云々、菅茅などを以て製しけるものなり、○名越祓の条ニ見えたり、

竹夫人 竹奴 青奴 【和漢三才図会】 抱籠

抱籠、俗ニ竹几といふ、夏月の夜これを抱て涼を取【刘熙釈名】竹几又竹夫人とよぶ、【山谷詩】趙子充示竹夫人詩、蓋涼寝ノ竹器、憩臂休膝、似非夫人之職、予為曰青奴ニ【雑談抄】和俗竹を以て籠を作る、二囲みて、長サ五六尺、短きものは三四尺、圓く又小きものもあり、昼夜臥寝の時、身ニ抱て涼をとる、名づけて抱籠と称す、

り

四月

龍頭太 い部、稲荷祭の条ニ出、

龍華会 ら部、仏生会の条ニ出、

五月

両社祭 廿三日○江州下坂本ニ社あり、下坂本より唐崎ニ至るの路傍ニ両社あり、南ハ若宮権現、北ハ酒井大明神、例祭五月廿三日、神輿二基遊行す、土人産土神とす、山門恵蔵坊、代々両社の事ニ預る、両社修造のことハ因縁あるを以て、藝州の国主より営せらるとぞ、

六月

林檎 【和漢三才図会】其実窪溝あり、縄の痕の如し、徐く熟して半青半紅、味ひ淡く甘し、微酸く脆く美なり、俗ニいふ、頻婆果なり、

ぬ

【兼三夏物】

蓴 ぬなハ 志部、蓴菜の条ニ出ス、

五月

鵺鵼の舌 【零凌記】鵺鵼ハ人多く養之、五月五日其舌の尖りを去れバ、語をよくす、邑尨清越也、鸚鵡よりも過ることとあるなり、○時珍曰、其舌、人の舌の如し、剪剔すれバ人言を作ス、

る

を

四月

大神祭 上卯【神社啓蒙】大神社、大和国城上郡ニ在、祭る所一座、大己貴命【公事根源】先丑日ニ使をつかハし、大原野の如し、此祭ハ冬ハ寅日、夏ハ卯日の暁、冬ハ夕ニ祭る故也、大神とハ大三輪の神也、大物主神の御事也、三輪と申本縁ハ、その大物主神、活玉依姫といふ女のもとへ、忍びてかよひ給ひけるに、その女懐妊ニ及びて、父母あやしみ思ひて、神人の来りける時、糸のをだまきに針を付て、衣の裾にさしけり、その糸をとめてゆきけれバ、三わぞありし、三輪山とぞ申ける、

大津祭 上亥○四官神社ハ江州大津の四の宮にあり、

神社啟蒙 小日枝、大日枝、氣比、小禅師、右四座同社ゐまのす、故ゐ四宮とも、○社説云、祭る所五座、中ハ彦火々出見尊小禅師、左ハ地主神、大国主神大日枝、右ハ塩土老翁日吉神 国常立尊小日枝 気比神仲哀 ともゐ五社の中、彦火々出見尊と以て本社とす、故ゐ四の宮とも、○此祭も日吉祭と、日吉祭の神代とあり、三月中に近江一国の中より、何方ゐくも切出さん其神と、飯室道の廣芝と云所の、相生の松ゐ立掛く置き、四月朔日の頃、日吉大宮の拜殿ゐ移す、同三日大津四宮より濱成磯成とも云ふ、是ハ大宮鎮座の時、粟津ゐ居る人ゐて、大宮の神まづ〳〵宿りゐ所にて、今の山王の社地樗殿のことと告奉し人と、粟津の神と崇む故に今に其名と仮に称す、神迹の魁首とゐ、大宮へ粟の飯と供へる人ゐ、舟にて啓導迎大宮の供奉ゐ、今日も衣冠ゐく、笠鉾とさゝせ、日吉の大宮へ来り、拜殿の榊と取て帰る、其体石の鳥居まで ハ毎言ゐく、ちびやゐる体に、鳥居と越ぎバ取得る形勢ゐく、大鼓と打、囃子とゐ、ハヤ柳ゐ至ゐ、俗ニ七本柳此所より舟ゐく大津へ着岸、四宮の拜殿ゐ移す、此日ゐ坂本山王祭まで、此処の神事に、申日山王祭ゐ、坂本へ榊と帰し渡す、其次ゐ山王祭の条ゐ、

紙 夏秋のまゝで老ごゐふ鳴く、こゝ十論為辨抄支考者ある、故翁のものぐさゐふ、此ゐど白氏文集とゐて、老鶯とゐ、

老鶯 抄草

病蚕とゐる、此詞のおもゝ〳〵ゐ、鶯や竹の子藪ゐ老を引く、さゝぐれや蚕ゐ〳〵上来の畑かく 炊二句とつゝ付しが鶯を筍藪とゐ、くゝ老若の余情もいとゞ老鶯、この名ハ全く新撰に、ゐれども、老鶯とハをゝ漢家の詩ゐ出く、或ハ狂鶯とも乱鶯とも、もぐく暮春の物なれども例ゐ今式の加減ゐ、残鶯ハ勿論ゐく、老鶯も夏の名とゐさバ鶯ハ老の感情ゐく、風雅ハ例のさゞみとゐん、此名ハ衆議ゐる

大矢数 や部、矢数の条ゐ

躍草

和漢三才会 高尺ゐ、莖微赤色に、葉小葵ゐ似く、両〳〵對生ゐ三四月葉のもとゐ小花と出く、白色に微赤ゐと帯、人の笠と着て躍るゐ似く、故ゐ俗人躍花とゐ、又債断を以て踊草とゐ、

五月 大

原志

神社啟蒙 大原神社、丹後国桑田郡ゐ在、祭る神一座、伊弉並尊、

社家記 春秋両度の祭奠ゐハ、遠近の国郡群をゐすに、其祭儀饗を事とせず、醴姿糧と以て礼とす、謙道と天下ゐ示すものゐ、

紀事追如 世俗、参詣の地向ふ山ゐ、ものぐくサスゝゐゐ、是ハ丹後国大原の社へ詣づゝ、蚕飼と守護のものゐ、蚕飼とゐ、

崇敬すと云、三月廿三日ハ春さしとて参詣し、此時、社内の小石を申請て持帰る、飼屋の棚におくときハ鼠の害なしとて、この石を猫と称す、九月廿三日ハ秋さしといひて、参詣の時、右の石をかへし納むと云 ○此祭ハ醴を醸して神に供じ、客に饗ふと、又店家の商物とする故、世俗甘酒祭と云しぞ。

鬼百合 時珍曰、巻丹、その莖葉山丹に似て稍長大く、紅花黄を帯て六瓣四に垂、上に黒班の点ありて、その子先結て枝葉の間にあるもの是巻丹也、多識篇 巻丹、今按に於尓由里

六月

大祓 公事根源 大祓と云ハ百官ことごとく朱雀門にあつまりて祓をし侍る也、六月十二月二さびき、天武天皇の御時からはじまる、解除ハ觸穢なとの時も神事なとを行ふべきハ臨時にも常にもあらず、この大祓ハ百官一同にあつまりて祓とするゆゑ、又ふハ家ごとに輪をこゆる事あり、○是六月晦日、朱雀門の前耳敏川にあることも、ことに百官の祓也、節折荒和の祓ハ天子御身の御祓也、いづれも六月十二月両度晦日におこなふなる、

大山祭 六月廿八日 江戸及近国の僧俗相州大山石尊大権現へ参詣す、これを初山と云、又七月盆中に登山するを盆山と云、志願あるものハ大小の木太刀を携行て、これを納む、その木太刀に必大願成就の四字を書て、これを納太刀と云、

温風 月令 季夏之月、温風始至 文選 朱夏振炎氣、溽暑扇温風 ○朱氏曰、温風ハ温厚の極り、涼風ハ厳凝の始也 ○小暑温風至六月節也、

鴛鴨涼し 水鳥の類をべて冬多し、故に和哥及び連俳ともに冬季とす、されども鴛鴨の類涼しと云ときハ夏季とす、

慈姑 和漢三才圖会 その苗を俗におもだかと云、其根を白くわゐと名づく、單葉の小白花をひらく ○時珍曰、慈姑一名燕尾艸と云、葉燕の尾の如く前尖りて後に岐ある故云く、

沖膾 セゴシ膾 貞享式 此名ハ俗習之、或ハ海辺の別荘、或ハ船遊の時に、魚のあたらしきを称すれば、決して極暑の名目にて、つきうと例の賞玩と云べし ○青藍曰、沖にて漁りたる魚を直に膾に和して食ふを沖膾と云 ○セゴシとハ、鰺なとの大きさならぬを骨のまゝに切るを、南海にてせごしなますと云、是なり、

わ

四月

綿抜 更衣に布子の綿を抜去て、袷とするを云、

和哥祭 十七日 ○紀州和哥山にあり、東照宮の御祭也、一名雑賀祭と云、

元和七年紀伊頼宣卿の勧請しける所にて、山鉾其外相撲流鏑馬等ありて又城下の土人太刀を佩さらしを摺て躍踊となす。これを雑賀踊といふ。今日神事必用の食物は蒟蒻を剃刀の如く切あるく、一方ハ常の如く味噌を用ひ、一方へハ大豆の粉を付く家々にて製す。

和清天 〔白氏文集〕四月天氣和且清、緑槐陰合沙堤平。又同詩ニ、孟夏清和ノ月、東都同散官。○和清清和おなじことにとりて、

若葉の花 〔貞享式〕古式に木の若葉ハ夏とし、草の若葉ハ春とし、青葉ハすべて雑となせるものゝ、あるを或抄にハ花と若葉の二所に、若葉に花を結びてハ春とりつひ夏とせる。何故に決せぬにや。今按するに月花ハ風雅ニ巻の飾なれバ、蒔るものハ加減しても、四季を自由に配るべきなれバ、若葉に花を結てハ決して夏と定むべし。

若葉 新樹 〔和哥題林抄〕新樹ハ四方の梢青ミわたりて、木々の色もうすきこきにみえ、ちかき山本もいとくらうして、月も漏こず、村雨も音ぶかくして、露を落さぬなどよむべし、

若葉の楓 〔徒然草〕卯月ばかりのわかかへでで云々 〔和名抄〕雞冠木 加倍天乃木

紅色に成り、鶏頭木、加比留提乃木 今案ニ木の名ハ其葉岐ありて蝦の手に似る故かへでと略せるなり、〔和訓義解〕

わくら葉 病葉とも書、夏山に紅葉の如く赤くなりて、又ハ黄白色なとにも朽るをいふなり、

綿蒔 〔和漢三才図会〕相傳ふ往昔蚕綿の外ハ穀木を以て衣服とす、是を木綿といふ、中古ニ草綿始ることハ、本朝桓武の朝に即ち類聚国史ニ見へたり、中華ハ宋の末中華に先だつこと、凡二百年ばかり云々 此草の種を下すことハ、早晩あり、早きものハ八十八夜以後麦苗の際ニおいてまき、と撒く、晩きものハ四月麦を苅て株の傍を攪てまくもあり、大底枝葉花、黄蜀葵に似たり、花ハ六月の部にしるしたり、

五月

早瓜供 〔延喜内膳式〕五月五日山科の園早瓜一捧を進る、若実のなるときハ花根を献ズ、

若苗 たの部田植の条にあるべし、

若竹 たの部今年竹の条にあるべし、

忘草 と云萱艸くの部にてみるべし、

和布苅 〔和漢三才図会〕石蓴海藻、和名近末米、俗ニ和布の字を用、今云和加米、麁布に對して和布と弱布といふ、〔本草〕南海に生ズ、石に附て生ズ、紫菜に似たり、色青し、按るに今云和布也。○海人鎌を以

六月

綿花

[和漢三才畫会] 四月種と下す、莖弱く蔓の如く、高さ七の四五尺、葉に三尖あり、楓の葉の如く、秋に入て花を開く、葵の花の如くして小く、紅紫のものあり、実を結ぶ、○此もの、種を下すに早晩あり、花も又同じ、夏の末に花開くものあり、大底黄罌粟に似て、浅黄色にして、四月綿まくの条見へ

月堅田祭

上巳日 ○或説に祭の日上の巳祭る神詳あらず、滄海志に云、堅田むらは柳田の庄ト云、又閑が演ると云、北と今堅田と云、出来島、この地伊豆の三島の風景に似る故、伊豆権現と勧請すと、もしは伊豆権現の祭あるべし、今土人もこれを云ふ、今土人本居神なるべ、天文六酉年九月廿五日、江州観音山の城へうつり、衣川に勧請せし天神の社是なり、四月子の日祭あり、今上巳日に祭る所も、神田明神なり、堅田の城主一代江戸に住す、故に神田明神を此所に勧請すと云ふ、

戒壇堂開帳

花摘 ○江州比叡山に在、八日

[帝王編年記] 弘仁十三年六月、参議左大弁藤家業、戒壇堂を建ぐ、一の宣旨と帯て登山す、傳教喜悦に堪ず、閏六月十一日殊に勅詔を下して創め戒壇と築、十四年四月十四日、修禅和尚義真始て受戒と行ふ、[紀事] 四月八日諸人参詣す、女人も常に叡山に登ることを禁ず、もしは今日許て、東坂本の花摘の社に詣ることと花摘と云、花堂と作りて小釈迦の銅像を安置す、○此社は傳教大師の御母堂、妙徳婦人と祭るとなり、婦人存生の時、大師御對面の為此処まで登山しなり、今日女人の参詣とゆるすは、此遺意なり、

賀茂祭

葵祭、御形日、[叢事根源] 未日、先に上卿陣に着く、六府とめ〳〵警固のよりと仰す、当日、使は近衛の中少将つとむ、昔夢のつげあるより、冬に人に葵桂の鬘とかるべし、賀茂松尾の社司、前の日ちるべき所に〳〵てもつる、欽明天皇の御宇より、此祭はもとより、下鴨の御祖、上賀茂の別雷二の神祭なり、この御祖とは玉依姫とす、賀茂の建角身命の女なり、ある時、せせらの小川のほとりにあそびたまふ、川上より丹塗の矢一流れくだる、玉依姫この矢とりて、我家の屋根にさしてねたまふ、しかして程なくもみて、男子となむ、もしは父とせられも、もしは母ぐるまに、或ときは酒をもりて、今の児に盃とたまへ、汝が父なりとせば児、その盃

とバ虚空にあげらく、家の屋根とふきやぶりて、我ハ天神の御子
なりとて、天上にのぼりしぞのぼりける、則別雷の命是也、いはゆる
丹塗の矢ハ松尾明神と後にあらはれ給ふとぞや、〔紀事〕上賀茂
中酉日、葵祭、貴船もまた修之、酉の前午日、西賀茂黄衣のもの、
榊を伐り、松に並て、御生所の假宮、并斎宮の幄の屋、及び大宮
假宮を搆ふ、黄衣五十人ばかり結番とあし、未ノ日假宮迁
宮、申ノ日古へハ関白詣あり、當日音楽あて、翌日社司葵鬘并
桂枝を、禁裡仙洞及び高貴の家に献ず、則御簾に懸く
賀茂地人悉く門戸に掛く、志るしとさハ夏天霹靂の災除、
祭の日、官家の人おのく葵桂と衣領にかけらる、賀茂の地
人、各これを頭髪に挿む、今日葵鬘桂枝これを諸鬘と
称ス、葵ハ静原より取来り、桂ハ松尾より伐来る、凡葵ハ當
社の神艸なり、桂ハ日吉神木也云、已御生とハ、玉依姫の別雷
命を産み給ふ日をいふ、実ハ申ノ日生れ給ふハ酉ノ日ハ神の生れ
まふを祝奉る儀ともいふ、御形祭御影祭と、同祭といふ人あり、
別の祭之、御影祭ハ三日以前、午ノ日にあり、御影社ハ洛北高
野川の東、御蔭山に社あり、即ち下鴨の末社之、〔康富記〕嘉吉
三年四月廿一日丙午、鴨御蔭山祭也云とてまた酉ノ日にあらず、

午の日之別祭とあるべし、〔河海抄〕賀茂祭の前日垂跡の石上に於て
神事あり、御形と号ス今本宮の北一町ばかりに在て御旅所之、道の
西に岡あり是を御生所の館と云、
祭の日仮殿を此所に建る、

神祭

榊さす　忌さす、　榊取、

是加茂祭と云く、○或説に云、神出て祭とよぶと云ハ加茂祭のこと
加茂によりて無名の祭と夏とす、故に祭に加茂連哥に付句と嫌
ありて〔貞享式〕まつりとや四季にわたるものハ祭と鷹の類あれどい
つまごひ其季の名目とまへく、四季の差別をなせり、かりさまど、
祭の一字にても御祭といへぞ秋なり、御祭ヨリなど冬なるかしこ
く諸社の臨時の如き名目あるをまぎらしからぬやうに遊ばり給ふ、
祭の用あり、貴賤なくとも、寒暑なり、礼まつりして和に遊
び、節供節日の式なりとも、俳諧にハ多用なれバ是らハ一世の衆議
に及ず、其時其句の季にまかせて、決して四季に用ゆべし、中略
祭および鷹と云類ハ一句にまかせて、するとまた夏と冬との名
目なく、今式としても共通之、○忌さす〔萩枝折〕卯月の忌さ
すとハ、賀茂の神事なるを竹串にさして、春の帰るとも見
ゆる心になり、神事あるとする人身ときるめ、松竹などに志め
なりて、門にさしてかかげることなり、○榊取〔後拾遺〕榊とる卯

月みるまゝバ神山のあらの葉ゞく[illegible]苟葉の一名と
[illegible]もあり、神山ハ賀茂の神山 **貞好草** 和漢三才畜会
花の容姿約らる故ゆ和俗貞好草と名づく、 **垣見草** 外花の異名、蔵王時鳥[illegible]か
[illegible]花咲ゆ **要の花** 和漢三才畜会 扇骨木、高サ二三丈、葉ハ海石榴の葉ゆ似て狹く
ゝり山里の宿、小ゝ、細ゆ鋸歯ゆ面清らゆ[illegible]四月小白花を[illegible]ゝ、細子
と結び殺るゝ千、八九月赤く熟ス、其木最も堅く扇骨と
するゆ堪ゝ故ゆ名づく、 **柳の花** 注、秋の加部ゆ[illegible]ゝ、猿蓑集 洗濯や衣ゆ[illegible]辺林の花 蕉之

杜若 和漢三才畜会 燕子花、其葉白菖ゆ似ゝ
ゝ花 大ゝ色淡く、其花実ともゆ白菖ゆ似て肥大
あり、紫色を正とす、近ごろ淺紅あるゝとの白色あるものを出スゝゆ
変種ゝ五月と盛とす、又四時ゆ花と[illegible]ゝくものを、参加ハッ橋の
産名と得ゝり、○貞らの花 蔵王 あつゝきの多き中ゆもかゝゝ
花ゆ袖さゝと紫あるゝ、○貞花 仙覚万葉抄 かゝ花ハ杜若ゝ、
貞鳥の啼ゝき咲バゝ花ゝ云、万葉ニ貞花とゝあるハさらゞゝ
ゝを定めゞゝれど姑く仙覚の説ニまゝく、載之○かゝつゞゝゆ

杜若の字ゝ用ゝる実ハ誤ゝ、杜若ハヤブミヤウガミ、燕子花
と書ゝゝゝ、又和名抄ハ劇草ゝゝつゞゝと訓ゝ、 **風車の花** 花彙 纏枝牡丹、蔓艸葉茎鉄線の類ゝ花ハ
辨あゝく單葉著碧色、其形風車ゆ似ゝり、又白
色あるゝ、三四月 **かんこ鳥** 和漢三才畜会 加豆古宇鳥、正字未詳、疑ゝハ是郭公
花をむらゝく云
ゝん、状ハ杜鵑及び虫食鳥ゆ似ゝ、微赤色と帯び、腹白
くしゝく黒斑あるものゝ、脚の指も亦二ツ前二ツ後ゝ、偽ゝ杜鵑と
ゝく貴ゝ、仲夏の後声あり、秋後色ゝゝ、其色大ゆゝく
円亮、加豆古宇とゝゝ、毎ニ山林ゆゝゝて人家ゆ近
づく、○真淵翁ハ俗ニ云ゝ鳥ハ、喚子鳥 **天蟲** 月令 **虹** 孟夏
の字音ゝゝ唱ゝ誤ゝるものゝゝゝゝれたり、
月、蠶事畢后妃献繭 和漢三才畜会 繭と作らんと
すゝゝ、葭簾を用ゝ掛ゝ、こゝゆ放つゆ素と食ず
ゝ、身白色ニ透明、そのゝ擇取ゝ、槌の中ゆ投ず、先ゾ
稍ある八枯菁草と用ゝ、縱ゝゆ内ゝ、蚕の寓居ゝ、
数千の蚕ものゝゝゝと作て蟄ゝ、○原蚕 周礼註ニ、
原ハ再也○一名晩蚕、ゝゝ二番蚕ゝ、春部あゝゝゝ

○蚕簿、え、部ハ注せり、

蟹子

薩頌斎経 蟹の類ハ今人以て食品とす、佳味なり 和漢三才斎会

擁剣蟹ハ江海ニ生ズ大なるもの味美ク塩水ニ浸ク煮熟する時ハ純赤色ニ変ズ甲ヲ脱シテ白肉ヲ取リ食フ其黄なるもの最甘美ク山脇和尚溪澗ニ有之十月翌日毎ニ必群生ス土人甚日ヲ候ひ多く捕フ亦一異ク 大和本草 蝦魁

(出)頌表録ニ前両脚大ク人の指の如シ長尺余上ニ芒刺あり鉗ク人ヲ手ヲ砕解ス 和名抄 擁剣、和名加散

米 多識篇 蝤蛑、加佐美

兼三夏物

翡翠

時珍曰大サ燕の如く啄尖リて長ク足紅ナリ短ク背の色翠色碧ヲ帯ブ翅毛黒色青ヲ揚ル女人の首飾ヲ作ル 和漢三才斎会 鴟、俗ニ川世比形小ク池川ニ在リ奥ニ捕ル翡翠、俗ニ山世比形大ク山溪ニ在リ魚ヲ捕世比ハ虫微の假名相通ズ其穴ニ窠ヲ作ル横ニ入ル一尺ニ其中ニ雛ヲ産ム 庖厨本艸 鴟、和名曽比、○此鳥魚ヲ害する故ニ鴟天狗、水狗、魚虎、魚師ニ 多識篇 蟹、加仁比志古 和漢三才斎会 の名あり、

蟹鰕

蟹ハ塩蔵のもの 三代実録 元慶三年正月三日癸酉、摂津国蟹胥、陸奥国鹿腊以て贄と為す御膳ニ奉ると為す 後集 秦ハ三月ニ蛛ヲ納ル人の肌膚ニ文まるの義ニ、○時珍曰、木の巣及び爛灰の中ニ生ズ子ト水中ニ産ミ子ヲ生ズ仍て変ジて蚊と為ル 玉元集 蚊柱ハ蚊の浮檐ノ如ク然ル其角

蚊遣火

又蚊火ト云 月令廣義 蚊鼈の骨と煙ニ焼ケバ蚊ヲ死ス次ニ鰻鱧の骨次ニ水中諸魚の骨と煙ニ焼ケバ蚊ヲ祛ク〻又浮萍 老泊と同ク焼く○拾遺ニ追ハラフと遣ト云、鬼ヲ追いも同ク〻〻いや詞ニ、ざ、ば、ハ蚊やらふ、ものを、

蝸牛

紀事 此月ヨリ五月ニ至ル 梁雨 ある時ハ蝸牛多く出ル或ハ床ニ壁ニ又壁ニ黏く高く登るとき ハ其涎隨て盡ル 盡ル ハ隨て落ツ其貝ハ有て人と見るとき ハ蝟縮ス児童聚て出出虫と云出ざるとき ハ釜と打破ラ ハ貝と俗ニ釜と称ス 夫木 牛の子ハ角ある ハ蝸牛角あるハ蝸牛角ハ身と孔なのそ 寂蓮 五元集 丈七ハ角まる孔庭のさつぶり其角、○丈七ハ髻結所ハ

蝙蝠 時珍曰、蝙蝠、俗人呼て仙鼠と、形鼠に似て、灰黑色、薄き肉翅あり、四足及び尾に連合て一のごとし、夏生て冬蟄す、日に伏て夜に飛て、蚊蛤を食ふ、又紙扇とかはぶりとなる、自生育す、○又紙扇とかはぶりとなる、

幬 説文 幬は帳也

荊葱 本朝食鑑 久葱 春葱の二種あり、春葱は初生して針の如し、俗にかぐごと云、美味生にて食ふべし、醋味噌に和すべきはなはだよし、

五月

賀茂の足揃 朔日 紀事 五月朔日旧例に依て、京兆尹、馬一足を出さる、其外武家、願ひある人も亦假くるなりとのらむ、其騎者上賀茂の氏人歩きことの壮人と擇びて、各禄を与ふ、又端午の騎ところのもの、壮年壮人とえらびて、各禄を与ふ、凡馬負北足騎者は烏帽子浄衣を着す、社司各埒の外に坐す、先一人毎に馬に乗り、馳駈して、その遅速と考ふ、執筆をして是を記さしむ、後馬の遅速同じくば則二人をして乗らむる故に、足揃と云ふ、○荒手結 馬場に本来樹あり、その内に於て勝負を決せしむ、検見のこの鐘を撃て、執筆これを記す、この樹と勝負の木と云、馬場の本、勝負の木の南に櫻あり、是と出馬の木と云、又其次に一株あり、是を三鞭木と称す、騎人これに於て互に声を揚げ鞭を挙げ、見物の良賤群集して、埒の外に並居る、

艾虎、艾人 蒲人 天師を畫 艾を以て虎の形をなす、或は絲を剪て小虎を作り、以て艾の葉に帖て、内人爭て是を相戴く、○同上 五月五日、人家百草を蹋て艾を採り人を作る、戶上に懸て以て毒気を攘ふ、○蒲人 金門記 午日菖蒲と刻て人、或は葫蘆諸物をつくり、并に戴て以て邪を辟く、○画天師 歳時雜記 端午に都人天師を画て以て賣る、又泥塑天師を作る、艾を以て鬚髯を作り、蒜を以て拳を作り、門上に置て邪を辟く、

幟 和漢三才図会 五月五日、家毎に幟及び甲冑をの兵器を立、俗呼て曹其、刀菖蒲を以て是を飾る、仍て菖蒲刀と号す、荊楚歳時記に、門上にかけて毒気を攘ふと、是曹人形と趣相似て、相傳ふ、光仁天皇天應元年、蒙古の賊来る、早良親王をして是を討しむ、親王、藤社の社に禱て出陣したまふ時に五月五日、忽ち神風吹て敵船を覆へし、立どころに皆敗走す、戦ひて勝ちぬ、此因縁を以て今に至る

五月五日の祭ニハ兵器を用ふ、民家も又もち、蕨森社、山州
伊賀郡に舎人親王の祠を、弓矢政所と称す、是く蓋其ならん歟
古の襄来ることゝ、国史ふるくべし、

○蕨森社祭の条見合すべし、

掛餅

歳事拾遺 五月五日、米の粉をこね編笠の形の如く、掛の餅とゝ、畿内にハさのみ用ひ
ぬすもの多し、

賀茂競馬

五日 詞林采葉 或記云、祭礼の日ふ
天皇の御宇、天下世挙て風吹雨零、時に卜部伊吉若日
子命に勅して卜ハしむ、乃チ卜して奏すく、賀茂の神の
崇なと、仍て四月吉日をえらび、馬を鈴とつけ、人猪影と蒙
りて駈馳て以て祭祀をなす、能禱祀せむ、因之五穀成
就天下豊年なり、来馬ゝ始まる、 注進略記 五月吉の競
馬ハ七十二代堀川院、寛治七年、五穀成就天下泰平のため、
はじめて十番九疋の馬料を寄らる、例年是と行ふ、 紀事 この日、音楽あり、午の時競馬あり、近衛院康治年中
始て行はる、もつぱらハ其始ハ臨時の執行なり、後世五月五日式日と
なりしみや、古へ諸社毎に多く競馬を、今漸く絶て、存する

処のその稀なり、当社競馬の料ある故ふ、今ふ至て断絶せず、
今日来る処の氏人北人、各冠の纓を巻き、鬘と付け、尤の方ハ
赤袍を着し、右の方ハ黒袍を着す、各南の一の鳥居の外ふ
於て馬ふ乗り、馬場の末ゝ馬場本に至て、先ッ才一番
とえらび、左右一疋毎に馳す、是を空走とえ、その後各ふ
らべ馳て、遅速を争ひ勝負を決す、古へいはゆる真手結
なり、 文昌雅録 軍中、端午と以て 踏 柳 とふ、

帷子

和漢三才図会 通俗、夏月必
用の衣、凡帷子と名づく、端午ふ至ると着ふ、浅黄色を用ふ、
七夕ハ用ふハ白帷子と用ふ、近代士庶人の通例なり、按、和名抄、帷
和名加太比良、

鹿子百合

花律 白花紫点あり、其花横に向て開く、
紫点あるゆゑふ鹿子百合と名づく、

河原撫子、唐撫子

あ部、瞿麦の条ふ注す、

萍蓬

天和本草
葉ハ芋に似て厚く光あり、茎つゝ水上にうちのべる、葉も花も
水面にうかぶ、根大なり、夏月黄花をひらき、秋の末迄、一茎二花
をひらく、賞

酢漿草花

蘇頌嘉経 酸醬草、嫩き時小
する故堪ふ、 酢漿草花 児喜く食ふ、○時珍曰、一名

酸母此三葉酸し其味ひ醋のごとし苗高さ一二寸叢生して地ふ布く極く繁衍やすし一枝三葉両尖晩に至て自ら合帖し整こと〻一の如し四月小黄花を結ふ長さ一二分内に細子あり

蚊幬釣草

和漢三才画会 葉捷ともふ續根草ふ異冬も亦凋まず

ちゝ〻ゝ多し但し根細き髭のごとく子あり引ふ抜やすし其莖三稜を小児中間と裂て引擴げ以て蚊帳を釣ふ比し〻戯しむ蓋てき香附子艸の雄く

輕息

子、鴨の子

本朝食鑑 車鴨、輕鴨、芦鴨、この三ツハ四五月ふ至てあやさしむ或ハ秋去り冬来もあり或ハ夏鈇さしむ歳をるもあり共ふ野水田溝ふ栖て或ハ孕み或ハ孕ざるもいなし○九鴨の子、初生其毛黄白色卵を出さゝ〻水上ふ浮ぶ

藻塩草 かりの子ハ鴨のかひご

御仝 古哥ふかりのこともよめるハ雁ふあらず鴨の子のこと歟

鹿の子

紀事 毎年五月の時節、南都春日山ふ麋鹿の子漸く成長す、ちゝ〻ゝ力なく足らず、麋子市ふあるを若狂犬ある時ハ噛て殺ことをもまハ死ふ至る、この故ふこの節、興福寺の下僧又町奉行の小吏相随ひ市中と経廻り若頭犬あるハすなわち殺ことと〻くその脚の筋を断く其犬をして、横行せしむ、

六月

掛鯛おろす

朝日○春部の掛鯛の条注ス

嘉定喰

嘉定銭、かつゝ、

○十六日 明天皇二年六月十六日、豊後国ふ白亀を献ず改て吉兆とし〻祝之是かこのゝと嘉祥の儀なり、このゝと更ふ本説あり、只彼銭の銘ふ嘉定通宝とゝれハ、勝とゝ名詮を賞翫すゝ〻〻〻〻○長明四季物語 仁明帝巽和のころ、御代の栄ることを祈らせ給ふ、賀茂の上の社ふ奉て、御祓をかゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ六月十日ゆゝ六日あん吉日ゝ、御占の人〻考申上ゝ〻ゝ〻ゝ其日行ゝ〻ゝ、年号と嘉祥と改元ゝ〻ゝ〻ゝ社司の日記ニゝ、○一説ニ嘉定喰ゝ〻ゝ〻ゝ、室町殿の大樹のゝ〻ゝ六月納涼の遊びふ、揚弓と射ふ、賭としてゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝの嘉定通宝の銭十六銅と出して、何ふく も喰物と買ゝ〻ゝ〻ゝのゝ〻ゝ〻ゝ〻ゝ、故ニ嘉定食と号セゝ〻ゝ、此銭ハ宋の寧宗の年号ニて、十七年ゝ其年毎ニ鋳させゝる銭元年ゝ〻十六年迄の印あると揃へて、其

日のまを祭りその代を定めたまふ、御湯殿記に女房詞にて
おつうとのつぼねまえ、おつうとは、嘉定通宝と中略して
のことなり、紀事今日公家武家同じく嘉定の祝儀を呼謂
嘉定通宝十六枚を以て食物をうひこまと服もれば其家ふ
福あり、故に今に至て其例ふあらふ又嘉通と、勝の和語相近
し、故に武家吉兆銭とす、此日五色の饅頭、並に諸品と土器
二枚に盛て、各白紙を以て裹て水引を以て結び、群臣に
たまふ、おの〳〵是十六銭と以て求得るの遺意なり、諸家に又
此儀を、或は孔方兄十六枚、或は米一升六合、家臣にあたへ
と以て雑品諸物とともに献ず、又土器に杉の葉を敷
き、其上に大饅頭三つを盛り、杉原紙を以て是を包み、凡物
毎に十六の数を用ふ、今夜諸家の中、十六歳の人振袖を切
て詰袖とす、是を月見の日、その数は土器に盛る処の大饅
頭の真中に穴をうがち、其穴より月光をみる、是今宵袖
とをもふ、

上難波御祓

の式、

珍敷東生郡高津の宮に、此社は生玉の北にあり、人祭
神比賣古曽の神、本名は下照姫命、大国主命女、天雅彦命妻、始て天の磐
船にのりて、地に降りたまふ、高津地、其船は、磐船大明神と号す、

仁徳帝、都をこゝに遷し、高津宮と号す、当社神傳紛
失す、当社を仁徳天皇の宮とするは非なり、社司は木津川に止て
禊を修す、

賀茂六月能

晦日紀事六月晦日の夜、上賀茂
の神事、音楽あり、祓を修す、地下
各茅の輪を脱出す、又枯麻の條を以て、木偶人を作り、是を
川水に撒す、今日六月の能、丹波矢田太夫、つとめ、それを
御手代会と云、社司真菜氏十ヶ酒鯛一双、楽屋に、おこなふ
ことを始る、是旧例なり、この能一座役者七人、なり、其外
つとむ、故に世七人猿楽と云、神事次第六月廿九日小月廿七日
御手代会、兼日仮幄を儲、夜遊神前において乱舞、中古の
猿楽女田楽の風流を、○今宵名越の神事をとゝのへ、
社司神人おの〳〵こゝに祓除し、菅貫の輪を入る、

唐崎祭

晦日淡海志唐崎大明神、女別当大宮初
願の地、紀事相傳ふ、此神日吉の末社なり、
社家樹下生源寺の祖神と一説に、是住吉明神なり、天智天
皇の御宇六月祓を修し、処々今日祭詣、平日の千度にあ
り、故に千日祭と称す、祈願ある人、木を以て小鳥居を作り、社に供ず、

形代

撫物

釈日本紀 人形ハ所謂素盞烏尊の鹿鰭手足の爪を抜其罪を贖ふ身の代の弊と 神祇式 大祓御贖物鐵人形二枚云々
○形代ハ人形と撫物とハ人形と撫く吾身を撫くるなり
の災殃を移して流もとのと贖物ハ罪を贖ふものなり、
則人形のごとし、

川社

部、夏神楽の条に出、

雷鳴陣

西宮抄 六月雷鳴陣、大声三度以上大将以下帯弓箭候御前、孫庇額間左右兵衛立南庭敷雷鳴御座鳴盛時分陣遣后殿、外衛督佐候殿上者帯弓箭簾中候解陣

風薫

唐太宗詩 薫風自南来殿閣生微涼 呂氏春秋 東南之風曰薫風

掛香

薫衣香 礼記内則 衿纓皆佩容臭 註 容臭ハ香物也、形容の飾を助為ス故容臭と云、纓を以てこれを佩ぶ、後世の香嚢即ち其遺制 源氏梅枝 くのえうのハこ 花鳥余情 又百歩香 ハ方もあるべし、百歩の方ハ凡香気の遠く聞ゆるもて百歩と云べし、
○薫衣香一名黒方、薫衣香もたきものの方より出ふ、
ちなべし、俗に匂ひ袋と云其方数種あり、 紀事 五月禁裡より

匂袋を諸家あり、是夏日汗穢の臭気を除んが為、 雍州府志 懸香ハ香剤各兼珠ねく調合ス各軽重多少の謂なり、
これを溶合して 肩代中に盛り佩の両角に緒を着て衣の領に繫、

川狩

紀事 此月賀茂川、高野川ハ瀬川、嵯峨大井川、梅津、桂川、吉祥院村、鳥羽、淀川、宇治川所々にて良戦川狩を、捫細或ハ扇細を以て執之或ハ簗を設て夜入て炬を燃し、魚を驚して執之是を夜振と云、或ハ鵜を放て執之是を鵜川と云、これを川狩と云、

射干

時珍曰、射干其葉最生一横に鋪て一面鳥の翅及び扇の形の如し、鳥扇、烏翣ホの名あり、 介雅翼 射干春生ず苗の高さ二三尺、葉、蛍姜ホに似て狭く長し横ホ張て翅羽の形のごとし、葉中莖を抽ぐ、萱艸ホに似て強く硬し、六月花を開く、黄紅色、瓣上ホ細文あり、秋実を結び房となす、中子黒色、根髭多し、

干瓢剥

新干瓢 和漢三才図会 乾瓢、去用の中を切横ホ連ぬること一二丈、紙紐のごとし、架ホ晒乾す、皮おのづから瓢を去り、白肉と用く薄く剥て両に達ふ、ときは色と変じて佳あらず、

眼皮

同上 眼皮と剪羅と一類異種と春苗と生ず柔弱なる童青緑の葉剪羅より厚くして円々尖末尖る六七月花を開く剪羅花に似て刻歯浅く其色肉赤色俗説云達磨大師九年面壁の時眠らざらんことを欲し自ら上下の眶を剪りこれを棄し地より此草を生ず其花肉赤色に

楮花

紙漉草

眶に似ることを因て眼皮と名く以為らく

時珍曰楮を杵に作る其皮績ぎて紵とすべきの故なり按に許慎説文曰楮穀乃ち一種なり雌雄を兼ねるのみ雄は皮班なり葉に捶あり三月花を開く柳花のごとく実を結ばず雌は皮白くして葉捶又あり碎花を開く実を結ぶ揚梅のごとく南人皮を剥持き煮て紙を作る又緝練して布とす堅くして朽ちず

和漢三才画会 楮皮今多く紙に造る布を織る木綿と称するもこれなり○楮は時珍が説の如く三月花あり六月の説は誤り故に雑談抄に花とつくりて楮とバうと李とすもとりさきど紙は常に漉く李とりごく殊に夏漉は紙臭気なくして下品に楮も種類あり大和本艸に山楮を一名ガンヒ又山カゴと云其木も皮も櫻に似て葉は柔に似て小に四月に垂を生じ枝長さ高数尺に過ず深山に

花は穀の花に似て黄に夏の末に咲くその皮を剥て楮の如く煮て紙を漉くこれを以て夏とする

蒲の穂

和漢三才画会 香蒲の花の状頗る鉾に似て故に蒲鉾と云又蝋燭に似たり

是香蒲の穂なり

芋

和名抄 芋和名加良毎之

○按部麻の条に委し

韓瓜

甜瓜に似て大きく皮青く味美なり通俗志に熟瓜と訓ず

浴仏

仏部仏生会の条に出ず

吉田祭

中子 北二社註式或人曰六十六代一條院永延元年十一月廿五日中の申今年始て祭礼誓願をなす公家の御沙汰と云江次第四月中子十月中の申裏書に吉田祭永延元年始之山蔭中納言一家これを祭る○吉田乃春日は中納言山蔭卿の建立に祭日幣帛使内侍の使を立つ倭舞を奏す江次第に余花は春に咲て独夏の来るにもちこしおびめきて書葉の中に咲ぬ山深きむ

餘花

題林抄 余花は春に咲ることなく山深きむ

よろひ草

牡丹の一名に名義未詳

夜白艸の異言なり

夜白

四月

草 開元遺事 明皇沈香亭の前の牡丹、一枝二朶、朝ハ深碧、暮ハ深黄、夜ハ彩白、香艶各異、帝曰、美人花木の妖と、楊国忠を召て、百宝と交く、樺燭千、○天津人今やぐらを詠むもんよもろつろ芍花さかりとも、国度尤大日

芦原雀、葭剖 き部、きりし の条みてこゝに、

五月 蓬菖

歳時記 端午ハ菖艾を刻て、小人子或ハ葫蘆のごとくにして、これを帯ぶ邪を辟く、荆楚歳時記 五月五日雞つくりて、これを帯ぶ邪を辟く、いまゝ鳴さる時、艾の人の形ハ似るものを采て撓てこれを取收て、病に灸す、甚験あり、○是らの説より、屋檐にも昔ある

六月 吉野の蛙飛 九日 當山の蓮花含む 吉野郡の内、蓮池と云処より、毎年蓮花を蔵王権現へ奉る、その花を菅に植て轅とす、九日の早旦ハ、神輿を舁ぎ出して山中を持あるく、つゞきて在家のもの子供ハ母衣を負ふる物を渡す、夜に入て、當山の僧徒、蔵王堂の前ハ行法あり、其刻下づへのものハ、蛙の形を作らせ、堂の後ハ入ちく、その形真に蝦蟇のごとく、行法をなしてかの僧四人扇ハ

先の蛙とまり弱けバ、堂後より飛出て、四人の僧の膝をとゝめ、ぐり飛ぶ、是を強く祈て責ル、次ハ神せめ、堂内を迎まりくと、終ハ祈て殺す、其後戸板ハのせて堂外へ舁出し、湯水をかけ、蘇生スとゝ、

節折 晦日 公事根源 ト部、竹の節を庭中席の上ハおく、節折の命婦、竹をとりて参て、御祓をとりて、疾この寸法をとり、果て官主ハ、ものをとりて、御祓をつとむる、あるいハ二度あり、二度ハ禄をとる、ハ生上の御祓の寸法をとりて、其程をとりあてゝ、よをとりて、節折の節ハ竹のよゝ、和名抄西節間俗ニ云世○是即ち荒和祓の御贖物あり、

た

四月 多賀祭 二十日 社説 江ハ初大上郡、多賀の大社ハ、伊弉諾尊、本地ハ毎量寿仏、鎮座年歴詳ならず、例祭四月二十日、祭祀當日、神輿本宮より艮の方一里ばかり栗栖村の大官所へ渡御、供奉行装、鉾十二本、神馬三疋、祢宜四人、神子二人、随身六人、神主三人、馬上其外氏子村ごとの種々の造花を生す、凡六十本ばかり、遂物八年に思ふ所ありて、定らず神輿三基渡御、坤の方、賓堂の社まで、大社の御使ら

て殿一人健児一人恭向行列先途拂十二人つゞく六人黄
の直垂三十人調度懸六人神事の警固ハ彦根の城主より
物頭二人これを出さる [雑談抄] 此ところの頭人を定るハ正月三日
よりて氏子の中豪富のものを撰て夜に入て神慮をとうて
ひて定む其頭にあたる家に神官榊を立る其頭人神供米
幾許ときまと捧ぐ祭の日四位に準じて衣冠を着し社へ
へ参詣一族一門風流
と尽してこまふちゞぶ、

當麻祭

俗ニ冬ニ上ノ申○大和国葛下郡當麻
都比古社二座磨子王子命比賣命ひ部

[公事根源] 大和国に侍る社へ午日使さるゝ、

龍田祭

廣瀬
祭の条にみゆべし、

鷹の塒入

[和漢三才圖会] 四月羽毛を易んと するとき韋緒を解去て鳥屋
の内に放つ餌食意に任す日を逐て脱落てあたらしき新毛を
生じて七月中旬舊のごとし○片鳥屋和年 両片鵠三歳
[鷹百首抄] 四月八日鷹を鳥屋へ入て毛をかへさする也とて
此時羽虫の菜を飼て又餌をも飼是をとやれ飼
とも云或ハ鳥屋踏鳥屋でより鳥屋鷹毛をかふる鷹
なども夏と又ひむろ山とやち板なども皆此時のうたなり、

夏なるべし [同三百首抄] 鳥屋へ入るとて動気の菜と羽虫の
菜に飼之此菜ハ榎木の腴にたまる水とどうけの菜に用る也
其水取て置てさやうなくして紙にひたして置て後に用の
時ひとぼしてつるべ竹のとぐひに溜る水も同じこととぞ
小壷の水とも云○ひむろ山とハ同抄に云むかし鳥屋とて土にて
塗ましまると氷室山と云其中へ樋をとけて水を入るを
下行水とも云○とろ板 同抄に鳥屋の内に水を
流して古き飼を洗ひながさんため也

盧橘

[日本紀] 垂仁帝九十年の春田道間守に命して常世の国へ
つかはし非時の香菓を求しむ今橘と云是也同九十九年の春
非時の香果八竿八縵を得て還来る [本草] 樹の高さ丈
余其葉両頭に尖り緑色光面四月小花をひらく色白
甚香ばし [古今] 五月まつ花たちばなの香をかげばむかしの
人の袖の香ぞする○古へ賞せしところの橘其種詳ならず
源氏物語枕草子などにも花も実もむつかしく具しくも
よまれつ去年の実の今年花さく迄落ずして黄熟
しつゝみえ漢土にもなく橘の種類にあらずとハ説も
とりありて○もろこしにもかくれなきとよみて只橘とのミ

いひくも、匂のよきもの、夏なるべし、

猶春の芽部、橘の条俤せ、

拾玉集 葛とハ、葛うらの白玉のやうに巻もちられバいふ、

玉巻葛 俤 奥

萩枝拙 葛の手と巻くるを、玉巻くと、葛とよむ、巻くと、

玉巻芭蕉 時珍曰、蕉葉と落さず、一葉舒るときハ、一葉枯る、故ニ蕉と云、○初夏中心ニ新葉と生じ、ひろ〻ぐ、冠ぐる、是と巻葉と云、玉巻く芭蕉と称す、このハ是なり、

筍 たけのこ

時珍曰、筍、俗ニ笋ニ作るハ非、竹筍と笋と同性滑利、多食ハ人と泻せしむ、凡竹筍ハ淡竹と上と、苦竹次之 紀事

凡笋、廉猪甚好し食ふ故ニ夜く人とり追りむ 和名抄 笋 和名太加毛奈

杜鵑と云、万葉 橘の林とうたもむ、ひろ〻ぐ、常ハ冬まで

橘鳥 たちばなどり

すゝ、ひろ〻ぐ、古今 やどりせし花たちばなも名をかへて

あだ、ひろ〻ぐ、声

ゑめるん 大江十里

魚三夏物

蓼 和漢三才画会 按ハ青蓼、三月ハ

苗と生じ、四五月繁茂す、秋ハ至て穂とをす、

蓼喰

槽加津田、毎ハ穂蓼と出ス、年中穂ハ、ハ一異ス

虫 孔叢 有蓼虫賦言、是虫幼長斯蓼、不以為辛○世俗ニ蓼食虫も好くしとなり、是ハ誘るべし、

五月端午 五月五日端午の節、端ハ初、午ハ古ヘ五字と通用す、もろ〻ハ五月初の五日の謂、珊瑚鉤詩話 端五の号、重九ハ同じく、後世五ノ字を以て午ニ誤せり、風土記 仲夏の五日を端午と云、

竹植日 竹醉日 晉書 五月十三日を竹醉日とす、亦竹迷日と云、是日竹を栽ゑバ必活、竹譜

竹を種ゑハ雌と雄とあり、根よりして上、一節発すゝものを雌とす、笈日記 降らずとも竹植る日ハ簑と笠 和 五元集

五月十三日 雨雲や竹も醉日の人もなめ 其角

田植、田植歌 早乙女 早苗取

若苗、紀事 九五月の尾より六月の首ニ至て、苗種生長すると

玉苗、民間ハ苗代と云、こゝを植んとして先こゝを拔を

早苗取と云、農民男女混雑して再び苗と挿む、是と田

植と云、女子苗と種るものとなぞらへ、各音と揚ゝふ、

是と田哥と云、或ハ児童太鼓とうちくゝみと勧む、凡苗と

種るハ半夏生の前ニ至、○若苗ハいまだ長ぜざるとなり、○

玉苗八、王八称美同じ、小山田ゐ今を玉苗植てなるとゝめがとすそゆまそ出るゐ、世実

袂百合 和漢三才

和漢三才画会 花正白、葩厚く大すゝ上ゐ向ふ或八横ゐ垂る、最愛すべし、うと深山溪谷の間ゝゝ出て生ずと得ゝゝし、縄ゐ縋り下りてゝゝ

ふ一株袂ゐ入ゝゝゝ縋て上る故ゐ袂百合と名づゝ、こもを珍重す、

六月

鷹鳥習と学ふ 月令 季夏鷹乃学習、注学習ハ雛のまゝ〳〵飛ぶことを習ふなり、

滝殿 泉殿 い部の条

竹皮脱 本艸集解 時珍曰、土中苞筍各時を以て出、旬日籜を落〳〵竹となる、

田草取 本朝食鑑 種て後二十日前後田の雜草を除き去て以て其根を固くす、蚤く田草を除くときゝ再び除の労なし、○夏分秋ゐ至迫、三度田間の莠を取、是を一番艸、二番艸、三番艸とゐふ、

簟 説文 簟ハ竹席、竹を以て席とす、

和漢三才画会 簟ハ竹筵、暑ニ用ゝ

抱篭 鋪 ち部、竹夫人の条也、

紈の納涼 み部、御手洗の条ゐ出、

四月

鷹爪 和漢三才画会 列珠の樹高さ丈ばり稍ゝ似ゝ、其葉細く小、四月黄花を結ぶ、状微録豆の花ゐ似ゝ繁く莢と結ぶ、録豆ゐ似ゝ、大和本艸 二種と云、一種木の属、是と鷹爪と云、一種草の属と云、

閩昼 花浅黄色、未鋭ゐ〳〵鷹の爪ゐ似たり、

五月

蠶豆引 時珍曰、豆莢の状老蚕の如〳〵故ゐ名づ、王禎曰、農昼謂ゝ、其蚕時始ゝ熟ス故ゐ名づ、八月種と下す、苗葉と生ず食べ〳〵、方ある豆中空ゐ〳〵、葉の状匙の頭の如〳〵、二月花と開〳〵蛾の形のごゝ、紫白色、角と結ぶ、連綴ゝ大豆の如〳〵、頗る蚕の形ゐ似ゝ、和漢三才画会 其莢上ニ向ふ故ニ空豆と云、嫩き莢豆と取ゝ食ふ、五月熟ス、○俗ニこの類熟〳〵取ると引云、

六月

相国寺懺法 十七日 紀事六月十七日、洛の相国寺閣上ゐ〳〵懺法と修す、世ニ閣と懺法所と云、松風の鈸、小狐の鐃、當寺の珍宝ゝ、是古ゝ佐ゝ木氏寄附する所ゝ、○寺中ニ定家卿の墓あり、但禅宗也、

○毎膳曰、王孫、和名おうそんハ、往昔本朝おうそんる明らけ〳〵、今識るるの多〳〵惜哉特ゑ毎毒の艸ゑ〳〵、療病の功最大〳〵○今本邦の里俗、王孫花と称するるとの八証とちぐさ〳〵、

須 和漢三才畫会 鮓師の小ゑるるとの、五六寸のるるを津波須と名づく、西国ゑ〳〵ハ和加奈と号、九月尺許ゑるるとのを眼白と名く、十月二尺ゑ近きるるとのを鰒と名く、江東ゑ〳〵伊奈太と称す、仲冬長三四尺ゑ〳〵ゑるるとの鮓と名ぜゆく、ミ

鈎瓶鮨 モ吹艸 和名吉野のつゝべ鮨ハ曲物ゑ入藤ゑ手を付る、其形鈎瓶の如〳〵、故ゑ呼ん、一説此鮨ハ、鮎を取く鮨と多〳〵、この曲もの小入く、吉埜川の水中へ沈め置く、熟する期ゑ〳〵出すゆゑゑ〳〵〳〵〳〵ぐこと、

月夜 雍州府志 飯ず〳〵の一名と月夜と云、六条家ゑ製之○異名を月夜と云ハ其飯の精白と云ゑ乎、

五月

鶯雨、墜栗花穴 貞徳曰、つゝどゞ花と云ゑ〳〵、赤き惟子のるるをハ、夏の花と云ゑ〳〵、犬追物秘傳抄 後土御門院、寛正六年八月、将軍慈照

薫三夏物

津波 近江国坂田郡、筑摩の庄筑摩祭 初午日ゑ〳〵、神社啓蒙 祭所御食津神、文徳実録曰、仁寿二年三月甲戌、近江国筑摩神ニ従五位下を授く、按ニ筑摩の庄ハ大膳職の御厨の地〳〵、故ゑ当職祭所の神と以く、此地ニ初る、盍この神ハ稲食を掌るゑ依く、里女婚を求るるるハ、祭礼ゑ必釜鍋を戴く神ゑ奉ず、不幸ゑ〳〵少壮の間ニ孀となるるるを、やむことを得ずして、改て嫁し、再び嫁する者ハ、二枚と用ひ、三〳〵び嫁るるとのハ三枚を用ひく、神幸の後ゑ候すると、中世、業平の花詞ゑ〳〵〳〵ひく、里婦笑靨を開きて、数枚を重ね艶態の故の為〳〵、固ゑ芦胡もぐるる、雑和集 俊頼曰、近江国つまの明神〳〵神おるるゑ、其神の御誓ゑく、女の男おるる数ゑ多〳〵ひく、鍋をつくりて、その祭の日奉るる、男おるる多〳〵ゑ人ハ、ぐるぐるがりて、火を奉るゑ、どちらまバ地のあるるを、やるるるるるるるるるれど、粢のごとくしていれ、煮ばゑ多〳〵ぐる、

蒸の子 委くハ春部、燕の条ゑ〳〵べ、

王孫花 名医別録 王孫ハ海西、川谷及び、汝南の城廓の垣下ニ生

院殿犬追物見物、射手、吾妻日記に、紅入ざる辻が花の白帷子、こゝもくれば紅帛も拘へ、

六月

月次祭 十一日

公事根源 こゝは六月十二月、年三度諸社へ御幣を奉らせ給ふ、弘仁年中に始まる、

津島祭 十四日十五日

○牛頭天王の祭り、尾張国海部郡、門間の庄、藤波の里にて、

社家傳習記 欽明天皇元年、こゝに崇め祭る、天王始め西海の對馬に降る、後小尾張の海部に移る、仍て其旧地の名を表して津島と号す、嵯峨天皇の御宇、其祠を立つ、始の祠は、栢森にあり、後居森の地に移し、更に祠を今の地に移す、

神祭記 当社夏祭は、この神島に鎮座の後、神民の夏日に堪ざると暗に知りて、避暑の為として、宵祭より十三諭を〻ひく、船の上の楽は殊に重楽一成の舞曲、妙音の笛声、別調と神制裁〻ひ〻ひて、この楽の一成を車楽舞、津島笛と唤初めて、世に車楽の説、臺尾大隅とうものと、十一黨の武士、計策を以て討取らるゝ事、起るゝ〻いはれ、社説に是と否〻〻、前説を用ひ、六月二日試乗あり、八日に町毎の車屋に〻調乗し、十三日江口に

もよして、暗の試乗を、十四日の宵祭、十五日の朝祭、こゝを里俗打舞〻と云、車楽船上の挑灯、もゝ〻〻三百六十箇、一歳の日数に象り、真柱の挑灯十二箇、八月の数に、高擡四方の灯篭三十箇、八月の数に、宵祭を尤奇観として、又翌日味爽の祭もあり、この時市腋車を先に、津島の車楽山車、その前後、搏論〻〻、五村前後と論ずる、五村は米座、塘下、筏場、今市場、下埇、是に社地前に大河あり、岐阻川の末に〻、其中数町に及ぶ大河に大船を浮べ、数千の挑灯を釣る、其影水に映〻〻、恰も星の如し、○芦の神輿、

社家注進記 毎年御葦の神事〻〻こゝに、国中の疫疾変異ありとす、こゝに津島社記、神祭式に、芦の御輿のことこゝに、社説に御芦の神事あり、毎年六月十五日の夜、神主これを行ふ、極〻深秘なり、もゝ〻〻もその為る処を知らず、六月後の余風に〻〻、牛頭天王の修法あり〻〻、おる物ゝ〻せて、旧記に、神翁一人、葦の葉に乗じて浮来て、その名を〻〻名のる、後に馬津の居森の窟に栖む、〻〻の神縁にて、芦の神輿と称する歟、

露涼し

露は秋花多し、故に連俳通じ〻

秋とすれども夏も又あり故に夏季とも、

釣鐘草 〔くがねそう〕 花紫色、

下ゝ垂て鐘と釣るゝに似たり、又白花

紫紫のものあり、葉も牡丹のごとし、

卯 四月

練供養 〔紀事〕 十三日より十四日に至りて、大和国当麻寺にて法会を修す、十四日練供養を、僕射拱佩の女、中将姫の忌日に、中将姫尼となりて、善心尼法如と云、〔練供養縁起〕 この来迎引接の法事は、恵心僧都あり、はじめこの僧都は、和州の良福寺村の人にして、雍渠の後、永観中、叡山にて、この法会をもてはじめなり、其後当寺護念院、本は紫雲菴とて、法如尼草庵の旧跡に、寛弘元年の比、僧都并に寛卯と、ともに此処に来り、本尊と廿五菩薩の假面とを彫て、同二年四月十四日、法如の往生の日を以て、迎接会を修しはじめ、是則横川の花臺院なりしを、処に、恵心僧都はじめて法会を修しはじめ、〇一説に、四月十四日は、

兼三夏物 〔和漢三才図会〕 萩、和名伊毛加良、一云、伊毛之、俗云、須伊木、〇俗に根芋と称するはずいもの、

根芋 〔和漢三才〕

五月 **合歓** 〔ねむの

花 〔神農経〕 合歓、〔名〕 忿草、憂草、忘憂、〇蔵器曰、其葉暮に至て即ち合ふ故に合昏と云、〔和漢三才図会〕 五月花ひらく、其花上半は白、下半は肉紅なり、散垂して糸の如し、〔和名抄〕 禰布里乃木、〔万葉〕 あじきなぶともよめり、又〔新六帖〕 かなかの花ともよみたり、

慰狩 〔ひのかり〕 照射、火串、〔つくぐしと〕 獣狩、夏季に、とそ、は鹿を射るに、闇なる夜、山の木うげを筈を焼、或は小炬を串につけて、是を火串と云、車、鹿、火影をうけて寄り来る、牝牡目を合、火をそなへて、鹿の目のきらめくを的として射取る、哥に、合す鹿とよめり、又さつ男の狩をひともよめり、まもるをの待と云ごとし、〔ことし〕 〔ことし〕

六月

練雲雀 〔ねりひばり〕 雲雀鷹

〇九六月毛とかはる日とあり、俗呼て練雲雀と称す、毛とかはりて、其飛ること速なるゆへ、故に鷹と故なり、と捕ふるを雲雀鷹と云、〇定家卿鷹三百首の内、河内女が子引の糸の移り雲雀一とよりの鷹とあはせてぐる、〇或説に、練雲雀とは、音入雲雀の畧語なり、

[四月] 夏羽織 単、あるひハ羅に、あつらへ近来の俗服とし、中山祭

中酉日 [神社啓蒙] 京三条猪熊の辺にあり、祭る神、豊石
牖、奇石牖命、[明徳記] 今六角堂の南、猪熊の東に迁
座あり、石上寺といふ、[兼邦百首抄] 二条大宮岩神へ付き
まふ中山大明神とやハ是三井寺北の院にまします、新
羅明神これなり 素戔嗚尊 [公事根源] 永承五年六月十六日、
神社を建立し、同六年十一月八日ニ従三位の神位を授
まゐらす、後冷泉院天喜元年四月よりはじめて官幣を
奉らるといふ 是四月の中の酉日なり、三井寺において
五月五日新宮祭と修す、是新羅明神の祭なり、

夏木立、夏草

[元帝纂要] 夏草ヲ曰茂草、木ヲ曰蔚林茂林○い
づれも、新緑おひしげりたるさまを哥によむべし、

名取草

牡丹の一名也、[藻塩艸] 昔、ある女この花
を愛しく、多くうゑおきて、昼ハ終日
ながめ、夜ハよもすがら風に損ふべきことをなげきたる
によりて、男、他の心ありとて、離別しけるとかや、
ならひきて元のごとくすゑおかれん、仍てなり、[蔵玉] わ人の
ならひとや名取草花さるまじきとがをするなし、

生節

[常陸国誌] 土人塩水を用ひ蒸乾し脯とす、味
生よりも美し、俗に鰹節といふ毒なし、○鰹節
の、やまざるなりしくて枯ざるをいふ、
○江戸なまりハなまぶしといふ、

茄子花

時珍曰、夏に
秋に至りて紫
花をひらく、五瓣相連り五稜縷の
如し、黄蕊緑蔕其茄を包むといふ

[兼三夏物] 蚰蜒

[説文] 附蠃ハ皆殻を負ふ蝸牛
とかく、殻なきものを蛞蝓といふ、

夏月

明やすきさまは、
涼しきさまなど、
余情に
よむべし、

夏の霜

[朗詠] 月照平砂夏夜霜といふ
この詩に、夏の月影を霜にみたてゝ
哥よむ事

夏雨

五月雨も夕立も、おしなべて夏の雨
なれど、各一種の景物となられたれば
夏の雨とよむときハ、甚だちめぐりて、常の
雨の趣に、夏季のあはれしかるべし、

夏夜

明やすき
くらし

夏野

きまま
并一あり
百草の茂るさまを専要とし、○
秣刈人とうたふの友なり 翁

夏山

郭璞書譜 夏山、蒼翠如滴

夏虫

身をこがす蛍とも、古哥ゐ夏むし

夏野の鹿

宗祇抄 夏野の鹿ハ角生初く、短くして、一束ばかりあるとかや、

万葉 夏野去小牡鹿之角乃束間毛妹之心乎忘而念哉 柿本人麿

五月永根

和哥ゐ、あるを絶とよめるハおもめのるし、根の永きもの也、永兼六年五月五日ゐ、あやめの根合ゝを、あるを、甚弐、寄合の俤のごゝ、左の根、一丈一尺、右の根、一丈二尺のゝ、古今著聞集ゐゝゝ、是ハ後冷泉院の御時ゝ、又郁芳門院の根合あゞ、たゞ、部田槌あんゝんの条ゐ出ス、

南天花

ゝゝを、八雲御抄ものをゐ、

苗

和漢三才図会 亜譜ゐ、蘭天竹と名く、其兼儼ゐゝて、竹ゐ似ゝゝ、子を生ド穂をゐす、紅ゐること丹砂の如ゝ、久ゝく經ると、ゞゞゐ脱ずゝ時珍曰五月小白花をもゝく、

ゝゝと庭中ゐ拉ぎバ火災を避べゝ、甚験あり、近頃白子の南天燭を出す、以く珍ゝゝす、凡此樹、長ゞがゝとゞゞゐ、山陽の地ゐ大水あゝ、作孟、土孟の山ゐ、長さ二丈余、周り一尺三三すあるものゝ、拉ゐ作ら俗ニ耶鄭の枕と云、

瞿麥

常夏

本草綱目 南燭、ゐゝ支燭と名ばく、

和名抄 瞿麥 和名奈天之古 一名止古奈豆

草花譜 瞿麥、早午ゐゝものを右竹と名づ、千年ゐるものを洛陽花と名づく、

蘊頌 苗高サ一尺ハゝ、葉尖り小く青く、根ハ紫黒色、形ち細蔓菁の如ゝ、花紅紫赤色、五月ニ至て開き、七月ゐ実を結ぶ、○大和撫子、唐撫子、川原撫子、鷺撫子、藤撫子ゐ、ゐの種ゐ、

栄雅抄 花の姿ちひさやかゝゝく、色ゝ咲けバどさゐき名子ゐゝく、撫子と云、又盛久ゝゝなるバ常夏とゐゝ、唐撫子ハ色ゝの品あゝ、大和撫子ハ紅梅色ゝゝ、鷺撫子ハ花の形ゐゝて名ゝゝ、藤撫子ハ色ゐゝその名あゝべゝ、○石竹、

和漢三才品会 瞿麥 即ち石竹ゝ、今以て二種とす、共ゐ葩の周囲ゐ刻歯あて切又あり、前紅紗ゐ似るものゝ瞿麥とゝ、切又ものゝを石竹とす、○かゝゝゐゐあゝるゝとハいぶもゝすゐつゐのゐゐゐる

夏菊

本草 菊ニ夏菊、秋菊、冬菊の分ちあゝ、

蜀譜 引花史曰、四月ゐ咲くものあゝ、張孝祥嘗て詩あゝ、五月ゐ咲くものあゝ、陳子高嘗て詩あゝ、六月ゐ咲く者、符離王常詞ゐゝ、秋冬ニ

冤くきものを以て貴しとすべし、夏むくきものを次とす云々

生胡桃 〔博物志〕張騫西域に使して還るに、胡桃の種を得たり、〔本草〕此果外に青皮肉ありて、これを包む、其形ち桃の如し胡桃ハすなはち其核之樹の高サ丈許、春初て葉を生ず、長四五寸両々相對す、三月花を咲く、栗の花の如し、実を結、

茄子 〔釈氏〕〔切韻〕茄、一名紫瓜子、〔杜宝拾遺録〕隋煬帝、茄を改て崑崙紫瓜と云、〔多識篇〕水茄 今按奈加奈寸比 ○谷茄、黄山谷曰、茄の老るもの子堅し、谷の如し、穀子茄と名く、谷と穀と音通ず ○白茄子、時珍曰、銀茄と名づく、云々

六月

撫物 かの部、形代の条に出す、

名越祓 〔神祇令〕名越祓とハ、名ハ夏の異語にて、夏越の祓之言ハ、心ハ不祥を解除、夏を越し、千秋に至らんとするの意あり、〔八雲御抄〕名越とハ、あらゆる邪神をなごむる故也、此説にあるべし、神を和す祓と云義也、○〔荒和祓〕で見る同じ 荒節 こと也、〔公事根源節折式〕晦日の夜、御贖物をあるべるに、あらよ 和節 みそぎの御装束云々、此次第〔江次第〕に委しく見ゆ、節折の条、見合すべし、○夏祓、名越祓と云ハ惣名之、荒和の祓

節折ハ天子の御祓にて、大祓ハ百官の祓也、と部、大祓の条にいへるが如し、○御祓、大祓、形代、小蝿声神、茅の輪、麻葉、流祓草等おなじ頭字の部に分ちいへるところ、

〔古今六帖〕こよみ月のなごしの祓をする人ハ千年の命のぶといふなり、　読人不知

夏祓 **夕祓** 夏祓夕祓とハ、其時節時刻をさしていふ、祓除ハいつともあるものなれ、夏祓と云て季を定め夕祓も、夏の夕方涼風を得て修する体、和哥にも読るいへく

夏神楽 **川社** 〔奥儀抄〕川社のこと、さまぐにいひめれど、皆むかしことなり、是ハ夏神楽のことなり、神楽ハ冬するをとを、おのづから儀あるとわく、夏なとする時ハささらに川のかよう みてするなり、河の瀬に榊一本を立て、そのまはりに篠竹を棚かきて、そのまはりに神供を備ふ、是を川社と云 ○俊頼朝臣曰、河社のこと、知人なしおぼつかなし、もろこしにあるべし、人の申ハ水の上に社を祝ひて夏ハ神楽するなり、〔川社〕河社おなじく夏神楽のこと、昔ゟ此道の先達さまぐにいひあへり、只古きものを見て心得べし、貫之集卅四、夜もすがら川社のみおりまさ衣いよ寒せばあゆみひぬらん、又云、天慶四年三月うちの御屛風の歌

夏ぐつ 行水の上おいそぐる川やろかりまこそあそ
ゐ、初の哥、新古今集神祇の部に延喜の御時、麗風に夏ぐつの
てらとよまれ侍りなれて入まち時代ハぶひまぶおもに麗風の
詠みて、夏神事とよるハぶ ぶ ぶ ぶ 六月祓の時のこと、又右二首ともに
絵の所に川社とかきなしハ三月六月祓の時のこと、
六帖冬の部、神事の哥に載ハ四季の国月の哥ともに冬をつけ
くる如く、類聚して、神事に入れも冬の哥とするハあやまり
六帖に引きハ河社を祓ハやぐて神事に、忠見集に、御麗風に六月
河辺に神事する処にあり 「みかきのくるぎて行水にいとぐ
あぐ」の神おもしろきもあぐのもくとやぐて夏神事と
よめるハ河社と八延喜式六月大祓祝詞に天神地祇ニ式
ニそぎとうけ給ひ、河の瀬に坐す瀬織津姫と云神おゆもの
と、大海原に打出く放ちやるとあくこの故に河原にて祓と
するハ河とやぐて河社とかうやむ八川中にうそめに社の
ことと引結ひ、神供ぐ備へ、祝詞をぐて後別に神事とも
ちくやぐ 匡房卿六月冬の哥に 「川やろ秋とおすぐと
おもへぐや波のしめゆ風の涼しさ」 武中将資成朝臣の家の
哥合、俊成卿の哥、 五月雨の雲ゐもあさと川社ゆこ衣とお

のおすすん、風雅集兵庫成実「川やろもあの波こす五月雨
に衣ゆすすゆひやもあすん」こさらとおもふおぐろあふ
ゐ事ここ、晦日に八十あさ私の家 **夏瘦** 万葉 石ノ呂尓吾物
まとナあつやせわれと云もあるべし
申寸夏瘦尓吉跡云物曽武奈伎取食 **夏引**
徒猿装 夏やせと彩ひのもちのむとつる如真

の糸 枝折秋 夏引の糸と八麻くまつを引前、 **神馬藻**
夏引の白糸八夏蚕の糸あるべ云く
下学集 神功皇后異国と攻ること、船中馬秣に海中の
藻を取て馬と飼故に神馬草と名く、神馬藻とおのうそ
と八神馬おハのるとあるまの哥、こくせと 濱藻、是おゆ八
ラあり名乗菜ともこさハ夏ホダハラとこさハ正月の飾物
みく、春勿論、○今按に濱藻とものくそとこのこと、
日本紀允恭天皇の紀ここそう、 重之集 ちハやぶるぐ
宮の神のこまゆめおのうそよ
もぞそる是莫鳴菜とよめるし、 **菜瓜** 和漢三才図会 本草に菜瓜
とくもの八越瓜ハ菜瓜、越瓜に似く小く、背に微毛あり、
六七月瓜と結ぶ、胡瓜に似て皮厚く、深青色、縦に白文あ、

内ハ越瓜ヲ似て煮食ヲ〻〻〻〻〻〻〻〻糟及び糠ヲ蔵む、硬く脆く美し上品ナ〻ず、一種、菜瓜ヲ似てふく、我鳥の卵の如きものあり、小瓜と名づく、糟おつけく食ふ、

奈良漬製す

[同上] 糟漬の法、六月土用の中ヲ越瓜の香こ物と採て、こまゝと破り、蛤貝と以て瓢子と刮去り、舟艦の形ゝ、灰と盛ること一時バうゝゝく水湿と去り、灰と拭ひ去り塩と盛り、凡十二斛酒糟三十斤と用て、瓜と色こ蔵む、各相碑〻めず、固く封ず、大低七十五日ゝく成る、

納豆造る

[同上] 納豆数種あり、大低蜻蛉の法より生ズ以て酒者ゝ、僧家こまゝと重んず、

夏切茶

[紀事] 六月の始、宇治の茶人新茶と新壺ヲ盛り、く常ニ茶と賣ところの良賤の家ヲ贈る、是と夏切壺ゝゝ云、凡壺の蓋紙ヲ糊〻〻〻堅くこまゝと張り瓜湿と〻て、壺の内へ入〻め、茶用ることあるこゝ、小刀と以て、壺の蓋合縫の糊帝と截て茶と生ずこまゝと壺の口と切ゝ云、冬ロと冠くの壺、盛夏の間處〻の山林清涼の地ヲおく故ニ、夏中用ゐ所の茶、先こまゝと贈る、故ニこまゝ

と夏切茶と云、

夏ぶし

[千梅こぐせこ] ニ誤て鰹の生節ゝず [雑談抄] 髪沸瘡ゝず、暑中ニ発する小児の頭瘡ゝ、江戸の俗訛て夏ぶしゝゝ云

夏深し、夏の別、夏ニ後

夏の限、夏過て、夏と追、夏の果、何も別義ヲ

ら 五月

蘭湯ヲ浴す

[大戴礼] 五日蓄蘭為沐浴楚詞 浴蘭湯兮沐芳草 [本草] 蘭八乃沢蘭の香草ゝ今の匂蘭花ヲそあ〻ざくるゝ人

向日明神祭

[神社啓蒙] 向日の神社ハ山城国乙訓郡、西里の辺ニ在、[名勝志] 當社の額、正一位向日大明神と竪二行ヲ志ゝず、道風の筆ゝとゝ、西里の民家の側ニ花表あり、[雍州府志] 一説ニ日ヲ向ふとのハ月〻ゝゝゝゝゝハ月読命と祭ることの〻或ハ日向大明神ヲゝく、本朝人皇の祖神、神武天皇ゝといまゝ是ゝゝゝゝゝ

結葉

金葉集 応徳元年四月、三条内裏おく、庭樹結葉と
いふことを題せらる、院御製、却立てこずゑ
を有葉るゐるとぬまは松のこゝろもとをさうなつて、

麥秋

○諸木の葉と葉と相交り結ぶをいふなり、

礼月令 孟夏、月麥秋至、註、秋は百穀成熟の期、此時

於こは夏とゐへども、麥ゐ秋ゐ故麥秋といふ、蔡邕月令章
句 穀は其初生を以て春とし、熟すを
秋とす、故に孟夏を以て麥秋とす、

麥の秋風

夫木 御園

生ふ麥の秋風そよめきて、

麥苅

和漢三才圖会 大小
山時鳥ちゝびやくと、 俊頼 麥もふ九十月種を
下し、皆四月黄熟す、其刈るとは、立春より百二十日に至ると旬とす、
故諺に云、麥は百日の中に蒔べし、三日の中に苅べしと云、但し小麥
は苅取るとき、大麥より遅きことを十日ばかり、麥は五穀の貴と
す、○二年草、年越草、ともに麥の異名、麥は年を隔て種る
故に名づくるか、

麥藁笛

同上 小麥稍厚く硬し、小児用て笛
と作りて吹くべきを麥藁笛と
云、夫木 うゐかとがすくびるゐ麥笛の
声ゆかしくも夏の日ぐらし、 西行

五月

六日菖蒲

京師室擔に菖蒲湯と
なす、是五日の夜の露を受る物を用ふ、彼金門記にいふる
神水の説むろの
ふるゐ、

室明神祭

十三日○拂房室の津に大社あり、祭る
神、上賀茂に同じ、例祭五月
十三日、是に先洛の上賀茂の氏人両人播州に下向して神事に司
るこゝ、其次第、先辰刻装束束帯す、己の刻の鐘を撞て神主以
下出仕す、即拝殿の座につく、御鍋を祝おろす、社家これを役す、
次に神主祝の式あり、賀茂氏子素襖烏帽子おの〳〵唐戸
の表神前の左右につく、次に神饌神酒を供ず、此間事長神子神示と
奏し、次に室津の梶女棹の哥を発す、次に神主祝祝詞を申す、是
よりさきに出貴船太田若宮の社の御饌を献ずるに神主祝内
陣に入て御饌を撤ずるに内陣の御幣榊を出すに祝御を閉ず、
神主先に神船着岸の後、神主祝頓宮の拝殿の座につく、両社人
御幣榊を捧て、大床に候ず、次に渡御ゐ、遊女十二人三日潔斎し
て、神事出内五人は男子の姿にして髪を剃り男髷にして金
襴の社衣を着、笛二人、鼓二人大鼓一人、残り七人下髪、残一人天
冠を戴きて、萠黄の水干を着し七人
ととゐ幣を採る、棹哥の役なり、

六月

虫干

虫拂 土用干 此月土用中、諸神社諸仏寺、天宝の虫拂とす、和俗六月土用中、天日の晴るを俟て衣服并書画の類を曝す、是を涼を取るなり、土用干なり、書画衣服の蠹虫を敎乘るなり、こゝ

う 四月

卯花衣

桃花御說 表白、裡青、卯に同じ、○四月こゝを著す、うの

梅宮祭 上の申 神社啓蒙 梅の宮八山城国葛野郡、王城とゝ二里バかあり、祭る神四座、相殿の神四座酒解の神大若子の神、小若子の神、酒解子の神○此祭今絶ゆ、土人ゆゑなく、祭の式江次第ゆゑ、橘氏の祖廟なり、世俗妊娠の婦女、當社の砂とゝゆく、帶穢を佩ゝ、是檀林皇后嘉智子の遺風、うの花

和漢三才圖会 按に楊櫨數種あり、山空木

卯花

管根卯木、唐空木、三ツ葉卯木、ゝゝ山中に

みな、人籬根に植るゝの八山空木、ゝゝる中空なる形に空虛木と名く、高サ丈ゝゝ皮白く、肌深青、空中ゝく、其葉円く長ゝ、四月小白花とゝゝく、簇とゝゝ愛すべし、俗に卯花こゝゝ、○十姉妹、管根空木と訓む、花蕚に八十姉妹、似て同じうすとゝゝ、こゝ京畿に多し、是も卯花ゝゝく、○岩本空木、岩の傍に咲くゝゝゝ、千載集俳諧哥、うの花よりでゝゝ、かけ島のゝゝもさゝゝゝ

岩とゝゝ、○異名、ゝゝ草、垣見草、雪見草、うの頭の假字の部に

八雲御抄 うの花くゝゝ

ゝゝち入ゝ注ス、

卯花くゝゝ

たゝ四五月の雨ゝ、

和漢三才圖会 金櫻子、

万葉に春さゝゝ行花

茨花

山林の間に叢生ず、大小蕾

薇に似て、刺ゝ、四月白花とゝゝく、夏秋実と結ぶ、黄赤色、ゝゝ小ゝ、拓猫

時珍曰、原野に多し、苗に似て長ゝ、

夏枯草

の高一二尺ゝゝ、其葉微方、葉節に對ゝゝ生ず、細莖あり、背白く莖の端に穗と作す、長一二寸、穗の中に淡紫の小花とゝゝ、三四月花ゝゝゝ実と結ぶ、亦穗と作す、五月便ち枯、

和漢三才圖会 夏枯草、穗の形矢筒の靫のごゝ、故に俗宇豆保草ゝゝ、和名宇流木是ゝ、

鸚実

和名 鸚 阿宇之智三ツ宇久比須乃実 岐乃美、今案所出未詳

大和本草 吉利子樹和名宇久比寸ゝゝ所ゝ山林ゝゝ小木ゝ、葉八山躑躅に似ゝ

西く相對ス臘月より諸木ハさくぶちて生ズ三月ハ小花さき四月ハ実熟す西く相對〜す〜く葉の茎より内ハを葉の茎の木より実の茎生ズ異物く當の始て鳴くふ此花さく故名よせ〜るや京畿ハく臼の木〜云この実の形臼のごとく上ハ窪みあて百菓の先ゲけく秋ハ紅葉〜〜落ツ立花の下草ハまるく

童子鳥 〜〜ざくの異名、灌頂口傳この鳥冬ハ深山の木のうつろハ住かゝらの毛ゝハ落く小童の髪のごとく〜、

兼三夏物

團扇 五雑組 大明以前摺扇ハ〜、多く團扇と用ふ和漢三才図会 方扇 俗云唐宇知波 翳ハ似く物と打ぐく故ハ宇知波と称、和漢文操 支考著 團賛の序ハ云ハ和訓ハいろる故と

毛吹草 城及宇治の鱧鮎 ちゝ〜さゝと俳諧の書ハ、うぢまる團の一字ととゝ用ゐ来ゝ云

宇治丸 是と宇治丸とい

鵜飼、鵜舟、鵜縄、鵜遣、鵜匠 和漢三才畜会 鸕鷀、和名之方 今云宇乃止利 按ニ和名抄云、大ゝ鸕鷀 日本紀私記、小ゝ鵜鵜と志万豆止利

云俗云宇 ○弘景曰、此鳥、卵を生ズ、口ニ其雛を吐○岐阜長良の鵜飼、六月避暑納涼の為ハ近国より来く見物ス所謂上川七艘、下川七艘、合て舟数十四艘、長良の渡ハ小瀬の渡ハで三里の間と上川ゝ云、長良ハ川下三里と下川ゝ云上川の鮎と上品とす、舟一艘ハ鵜十二羽、鵜遣一人、舳當一人ゝ、舟の舳先ハ鉄網を下し、篝火ゝ焚、十二の鵜の縄と左の手の指の股ハゝ持ゝ鵜の魚と追ふ事ひ、その縄ハ左ハく次ハとゝ持ゝ、その時、亜ある縄とゝ云ゝ〜ゝ持ゝ〜ゝ、その時、亜ある縄ハ解く、帯ゝ〜ゝ、ゝて鮎と十分ハ呑ゝ鵜ハ船で〜ハ追入ゝ、その手先のゝ〜ゝ魚と吐しめ、又水中次第と追ひく、甚ゝ〜ゝ、鵜縄長さ一丈二尺鵜の首ハ鈎と入く、腹中ハ入らざるやうハ設く、月の入ゝ船とゝ、月夜の間ハ〜ゝ、腰装と著ちいさき笠とゝ〜ゝ九三四月ゝ〜ゝめて八月三十日と限とす、

五月

馬弓 〜部騎射の業ゝ〜ゝ、

宇治祭 八日○離宮乃

社八山城国宇治郡宇治の里にあり、祭る所三座、宇治旧記演十

鳥 應神天皇、苑道稚郎子、仁徳天皇に當社八宇治の北にあり

て、関白頼通公平等院建立の時、離宮と南に移し平等院

に向ひ、此寺の鎮守とす、神社啓蒙 離宮八祭る所の神

一座、藤原忠文に、按に忠文八宇治氏人と号す、毋八息長氏の女

なり、天慶三年、秀郷貞盛に盛に、将門誅伐の功を以、恩賞を行ふ

るの日、小野宮左府忠文を以て賞列に入す、故に忠文ふ〳〵小野宮左

府を恨み、遂に宇治川に没す、其霊ものゝ祟をなして、百姓を

驚す、是を以て祭て宇治の離宮と号す、○西説互に異なり、この神

事そのもとを頼通公に勅し、天下太平の御祈に、五月八日の

刻に九日巳の刻に至りて、こゝに平等院を修す、太平の御神

事なり、云、三月梅苔の両種を以て神饌に備ふ、雍州府志 祭の日、

金銀の幣を奉る、供奉の人、金銀の幣あると誤りて、こゝに

こゝに従ふべし、さゝを年浪草にして、誤て春の部に載

せ、こゝに注八其所 月令 反舌毎声、蔵器 本艸拾遺 百舌一名反舌、

今の鶯なり、○ 礼記疏 反舌を蝦蟇とし、また是非とし、

鶯の巣 先板の諸抄に夏季とす、

鶯音を入

羅 細布、ゆく〳〵めの細きを布、越後縮のごとし、

○すゞく薄織の絹布をいふ、浮ごゝ、

浮の花 吳晋本草 水萍、一名廉、巣円く小にして、一豆一葉、根水

底に入て、五月白花あり、○凡荇萍の類、其花水面に発、

或八白、或八黄、五六月盛し、

瓜の花 花黄に、胡瓜、越瓜の類、すべて

その跌字の部にこゝ、

梅漬る、梅干、梅剥 梅剥八皮肉ともに剥掛晒し乾

こゝ、梅酸とする、こゝ、

浮巣 み部、水鳥の巣の条に注す、

蠖 尒雅注 蠖、一名守瓜、喜て瓜の果と喰ふ、和名抄

守瓜 宇利波閇 ○和にある者又同、形其蛍に似て、黄色ある虫なり、

うつ蝉 せ部、蝉の条に出す、

鶯の附子 貞享式 此式八例の當用に、今按に、鶯の子も

こゝ鳴習ふ、毛ふ、鶯の子に鳴の字と結び、冬至の

あるに、こゝ毛ば、夏八用習ふ、或八引鳥の親に附、或八笛と

以て引音と教、誓古八夏の間あもば、附子八

決して夏とし、笛と結びても夏とも、

六月打水

五元集 あらてや塔も崔もぬ〻わど　其角

ゐ

い部ハ係せ出す

の　四月

残花

貞享式 此詞ハ古今の論あり、去るとも、残の字を其季より此季ハ孫ハ残るとゝる道理ハ、花ハ〻〻春ハ来〻〻、残る夏と定むべしとき

兼三夏物

蚤

和漢三才画会 赤色肥る虱小さ

首六足ハ〻能跳る、夏日人家の湿熱の気より生ず、ものづゝ牝牡ハ、○さゝ〻ゝる夢ハ蚤の痕　其角

五月

幟

か部 飾冑の条ニ出ス

六月

凌霄花

時珍曰紫葳一名凌霄、俗ニ赤艶ハ

るとのびゝ紫葳と云、此花赤艶故ニ名く、木ニ附て上り高数丈、故ハ凌霄と云、年久しきとの藤大ハ〻く抹の如し、春始く枝と生ず、一枝数葉、尖り長く〻く、歯あり、深青色、夏より秋ハ至〻花を開〻〻、一枝十余朶、大サ半牛花の如し、頂ニ五瓣と〻らく、頼黄色、細点あり、秋深く更ニ赤し、八月莢と結ぶ、豆の莢のごとく、長サ三寸許、

す

す部ハ係せ出す

く

四月

久世祭

中ノ巳但シ巳ハ初巳　世の神社上久我の

民屋二町以内ハ、あるとき、菱妻明神と号、三代実録 貞観八年八月十四日丙戌、山城国正六位上奥我万代継神授ニ従五位下、

関白賀茂詣

中ノ申 公事根源 初度ニハ日次ハ〻〻

月廿六日、摂政右大臣謙徳公、賀茂詣のもゝ〻めあるべきハ、此事ハ必ず賀茂祭のまへの日ハ、るゝ〻、主人ハ乗車ハ〻く、地下殿上の前駈あり、白妙の御幣、神室の唐櫃やうの物とゝ〻げをとゝむ、琴持、菅笠深沓とゝ、とのとめ〻ず、上達部軒とつゝぬ、社頭ハ〻く神拝あり、葵桂と称宜をもてゝあるゝ、冠ハ〻く、東遊求子、駿河舞ハ、あり、○菅笠、檐賀茂詣行列の中ニ、大きなる菅笠を檐ひく渡るとゝ、

國祭

山城国賀茂の祭〻、

公事根源 三十代欽明天皇の御宇、四月ハ吉日とゝ〻びてまつらゝ〻、所見あるゝ、又和銅ハ詔あり〻、国司ゝゝを検察ス、ゝゝゝゝ〻ハの国祭ハ、賀茂の本祭あるべきハ、西の日の祭ハ公家より使を立らるゝ、走馬を献ぜらる、相〻るべきゝゝ、

岷江入楚

賀茂太神ハ、山城国の地主神ハ〻〻ゝゝゝゝ

くるハ中の酉の日也、灌佛 ふ部仏生会の条に出

草茂る 元帝纂要夏草と茂草と云、

字彙 茂ハ艸の豊盛の皃、草の王 大和本草 菓ハ菊ふ似く大あり、一葉ごとふ五つふ分き其分れる内に歧あり、四月花と紅く、俗に草の王と云、乳栁の花 和漢三才画会菓 撥ふ似て長く、撥ふ似て長く、○花もまた

沓手鳥 新撰万菓 郭公鳴立春之山辺庭沓直不輸人哉住濫○くつてどりハ時鳥の異名、此鳥、前生に沓を作て賣々り、百舌鳥ことを買く、價をもらハず、故に百舌鳥ハ此鳥の来るときハ木の下竹の中にかくれ、是古き諺あり、勧農鳥 杜鵑の一名あり、此鳥農業を催さんとて、四五月に来り田をつくれ、時すぎぬれ去る、故ふ名

俱伎羅 契沖の説に、くきらハ時鳥の梵語と云、○ことのくきらふとけるる声あり、とあやめ〜〜

蜘の子 時珍曰、按に王安石字説云、一面の倜と設け物觸て後鳴くなり、遍昭

夏 く

ふと誅ス誅義とも云ふ、故ふ蜘蛛といふ、○蟹銭蛭蟷蠨蛸絡新婦の数品あり、皆初夏ふ子を生ス、恰も蜘蛛の如し、 藻塩草 蜘の子ハ生を出て風ふふるまてちりぐふるまよ〜いつ、 新撰六帖 おあ〜世ふうまをこのひてを蜘の子のちりぐふそまくて

五月 薬王 五月の王、天暦御記

延喜十三年五月五日丙午、糸所より菓王と供奉せることくらもを、衣笠内大臣、常の如し、去年の九月の菓莫と撤して菓王と以て懸替御柱の前ふ着る例あり、 枕草紙 五月五日ハ、縫殿より御菓王とて、いろ〜の糸を組さけてまあらもれ、御几帳奉るを色の柱の左右ふ付くり云、 世諺問答 諸病ハ五月ふおこる、故ふ〜〜菓王と五色の糸まて調へて卯ぢふくを悪氣とをふ〜と申本文侍るふ、 雲州消息 今朝弐処より菓王一流を給ふ、作るふ百草の花を以てし、貫くふ五色の縷と以も、草虫の形を模〜て其花房ふ洒〜む芳艶の美興あり感あり、古人の云續命縷と懸る時ハ人命と益云ふ、ちの部長命縷の条かふし見ぐ〜、

薬日 競駈 薬草摘 薬狩 世諺問答

五月五日

と薬日といひて、あの日一切の薬草をとるあり、荆楚記是皆雑薬と競ひ採夏の小正云、薬と萱て以て毒氣を止除す、

宗祇抄 きそひぐりするとハ、四五月ハ薬狩とそもるも也

萱草花

忘草 時珍曰、萱本謎に作る、護ハ忘あり、詩ハ憂思不能自遣故欲樹此草玩味以忘憂也、呉人云ふと療愁とハ、其葉蒲蒜の葉の如ふして柔弱あり、新旧相代りて四時青翠あり、五月莖を抽んで花をひらく六出四垂朝ハ開暮ハ蔫む、秋深ハ至てすなはち盡く其花紅黄紫の三色あり、李九華が延壽書ニ云嫩苗を蔬として食へハ風と動し人をして昏然と醉るがごとくあらしむ、因て忘憂と名く、此も又一説あり、兼名苑ハ忘憂艸と

清輔奥義抄 忘草 萱草とハ、まあり、兼名苑ハ忘憂艸とうけて、大和本草 諸説を引て本邦の萱草にあらざるもあり、五月莖を抽んで六出四垂といふハ花の形相似たるものあり、一種朝鮮萱草あり、葉冬も枯ず其花紅黄色あり、時珍ハ説ハ似たり

雲見草

楝の異名○吉野山遠き軒端ふるる雲見草、

栗の花

藻頌圖經栗の木高さ二三丈葉極めて槲ハ類ス四月花を開く青黄色條長ふして胡桃の花ハ似たり、

山梔子の花

時珍曰梔ハ酒器あり、梔子あるハ象る故ハ名く、俗ハ梔ハ作る佛書に其花を稱して簷蔔とも、謝雲運ニ之を林蘭といふ、葉兎の耳の如く厚くして深緑也、春栄秋瘁ハ、夏ハ入て花を開く、酒盃の如し、白き瓣黄の蕊

車百合

和漢三才図會 葉畧濶く對生して車輪の如し故ハ車百合といふ、其花瓣卷轉横ハ垂る下野日光山、和州大峯の産各異色あり、

黒百合

同上 花ハ黒色の色の絶て濃、惟紺色愛もべし、本奥州より出、

桑實

同上 桑ハ蠶と養ふの地多くこれを栽實のらぎるものあり、俗に男桑といふ其桑の椹ハ初青く白く漸く赤色黒く熟し味ひ甜く、其木堅實ふして黄白の色、

水雞

同上 竜鳥和名久比奈、按るに大さ鳩の如くふして頭背翅皆蒼黒の斑あり、淡黄赤色を帯眼の上ハ白き條あり、觜蒼くして長く頷胸の間白くして黒白の斑あり、尾短く脚長く淡黄あり、夜鳴て且ハ連声人の戸を敲くが如し、蓋水辺ニ在り、晨と告く故ハ水雞と

名く、本草 多く田沢の畔に居る

黒鴨

仙覚万葉抄 黒鴨 一名かるといふ、

夏至の後より夜鳴て秋後即やむ

鴨のたぐひあり、田舎の人黒鴨といふ 和漢三才図會 輕鴨 全身黒色頸の後に青色と帯光あり眼の上に淡白の條あり、嘴黒くして啄端淡赤く白色やゝ黒く

黒えん白

縦の紋一條あり、脚掌とも赤し、

たゝえん

梅雨中の空合をいふ、譬ばかさゝりして今を降りそうなる空のうちに又あるゝくあるけしきを黒えんといひ又に雨ふりあがらん折ともまんともするけしきあるを白えんといふ多くは暮うる空の一きゝり晴てあゝくあるを多えんといふ

六月

鞍馬寺竹切

廿日 親長卿記 文明三年

六月廿日今日鞍馬竹切也、夜に入て護法の儀あり云々 今に至て今月今日之也と修す、紀事 紀峯延鞍馬寺の主となる夏五月護戸と修す日中大蛇北の峯より来る峯延毘沙門の咒を誦す蛇おのづから斬て段々となる此事の本願人藤原の伊勢人禁闕に奏して役夫五十人を設しかれ蛇を静原山に弃俗其地を呼んで大虫の峯といふ今に至て毎年六月廿日村民薬師堂にあつまり大竹を縛て立て又別に竹二本を堂の中間に縛て横に法師廿人餘白き袴を着し山刀を佩て庭上に出て一本の竹を近江と称し一本の竹を丹波と称し法師各十人左右にわかれ同時に声を揚奔走して山刀を以てこれを截る、その遅速によりて両國の豊凶を占ふ速なるものは豊を得ることなしとて後その竹を以毘沙門堂の前に来りて又段々に截ることと竹切とのこと峯延蛇を斬の遺意あり又夜に入て寺僧各毘沙門堂にあつまり其側に僧達中間に一人を置各肝膽を凝してこれを祈る件の一人忽に倒れ即しばらくして蘊生す、是疫鬼を拂ふ法、

僧達は寺僧の外下輩あるものをいふ、

縁起 松尾寺鑑禎和尚、宝亀中に居とこゝにトス雌雄の大蛇あり、鑑禎持念し一蛇忽ち死す、禎一蛇に謂て曰此山水乏し水を施さゞゝと蛇誓ひて去俄にして清泉涌出る今の閼伽井是也 寺説

竹切の事、具には蓮花會といふ是中興開山峯延和尚咒法を以て蛇を斬るの遺意にして峯延の遠忌會あり、夜の護法は開山鑑禎、和尚の一蛇を救ひ護法神となせし遺意なりと云、

雲の峯

杜詩 奇峯突兀

火雲昇ぶ 陶潛詩 夏雲多奇峯 夫木 六月ふりめとゝ
えて大そらふあゝ〜さ峯の雲のいろゝ非、衣笠内大臣、

薫衣香 〻の部掛香の条をみるべし

葛水 天和本草 葛の粉、夏月冷水に入くゝたて〻飲む、
よく渴を解胃を傷らず功尤多し、

葛の花 蘇頌曰葛ハ春苗を生し藤を引蔓一二丈 和漢三才

圖會 花豆の花ふ似て大きく、實かまく黄色豆の莢の如し、

海月取 崔禹錫食經 海月一名水母貌ち月の海中ふ在ふ似くう故ふ名く云〻 滑稽雜談 泥海ふ生ち故ふ備前筑前ふより多く此月取て擬の菓と多く割て海月の肉と包み塩と用ひ只葉と以て淹藏ちる也、

霍亂 傷寒論集成正珍云夫霍亂の病ハ夏月暑時飲食過度の致ち所胃中擾乱上吐し下瀉ちる者是也霍と臛と古字通用説文云臛ハ肉羹也大氏人の食の爲ふ傷る〻所肉食居多故特臛を舉て一應食物と統る也凡人其嗜欲ちる所皆これと乱といふ○青藍云俳諧歳時記ふ先板の諸抄香需散霍乱ふと六月の季に出ちといへどもあゝて風流ふ益あり是

で今こゝとのせゞといへゝ愚按ちる ふ先板の諸抄こゝ
ちと出せる八皆附句去嫌ひの用ひんだあり、炭俵集
附句息吹くも霍乱の針、其角

や

四月

山科祭 上巳○社ハ勧修寺の南の境内、往還路傍れ水の辺ふあり、祭る所醍醐帝の外祖、宮路氏夫婦の昊神ふ〜て勧修寺家の祖ちり、寛平十年より祭は〜まりて官幣あり〜ぶ今絶て只神饌と供ちるのみ、今土人宮路氏の社と八幡の社と合せて本居神と〜九月廿七日こゝと祭る是と勧修寺祭といふ、今の世ふ山科祭といふ八北山科諸羽明神祭ちり、九月九日祭礼ちり、神体ハ大己貴大王の二神ふ〜て本朝補翼の神也、

八瀬祭 上辰○八王子天満宮両社の祭あり、天満宮の宮ハ愛宕郡矢脊の里ふあり、八王子の社ハ天満宮の巽二町ぞ〜りの山腹ふあり、傳へいふ管家少年の時比叡山法性坊の室ふ入く學文ちと、その往来休息の處ふ後人社を建て人祭の日大竹と切てその枝ふ五色の扇挑灯ふと鉤り提て雜しふ、ぐら持あり〜ちり、其唱哥俚語方言と以て興あり、

矢脊一村九百軒ぞうり、父老或ハ上ゝる人をのゝしらく、又吾をさゝてげらとゝく、此俚語も亦他ハ出ざるものゝ、

山崎日九使 三日

名勝志 八幡宮寺中讃岐ハ云日の使、四月三日、是一郷万代の勤役なり、山崎より辨備を云く晩陰ハ及て日の使あり、相列て山嵜の孤村より来る、儀式京洛の大臣ハ同じく主人冠ゝ紫藤とゝけ、舞男の巾子ハ櫻と挿む、彼ハ馬ハ騎あゞら、二度神庭を廻りて、下馬せしめ、一面ハ御殿ハ相對し、再拜して衣の袖と刷ろふ、

神事記 日の使ハ八幡宮才一の神事也、治暦三年まで、猶勅使の義あり、同四年兵乱ハよりて退轉を、芹賣尾屋関戸の院勅裁と申下し、在地の神人これと勤むるゝる間交野の土民、御先の役ゝ、弥陀寺と号ス白杖と捧て、鳥羽木津より出る者、年頭馬長あり、神巫舞人、次第司、蔵人司先行を、色掌人笛と吹鼓と打、又細男とゝふ、二ツの人形あり、ハ武内高良の神ゝ、ゝ此祭も今絶くるゝ、〇明月記ハ建仁二年四月三日、山嵜の民家悉く経営を、毎年祭礼あり、その道ハ橋と渡を、播磨大路より八幡ハ参ると見えゝ、ハ往昔此祭ハ山崎より八幡の山下まで、大河ハ橋と渡をとゝく、今の橋本其遺跡まり、此使と勤ると日の頭と称し、其人を日の長者と云、郷の上首とも、其裔と長者衆と云、

山嵜祭 八日

雍州府志 山城国離宮八幡の傍ハあり、祭る所大山祇の命ゝ、延喜式 山城国酒解の神社一座、注ニ云ハ山嵜の神と号、同書 山城国と摂津国との境ハ疫神と祭ると云く、此社ハ、山州名跡志 天神八王神の社、大山嵜、北の山ハ、ゝ、祭る所素盞烏の命の御子八王子、今土人本居神とも、〇俳諧晨時記 今日此使ハ童使とゝ、ゝとあり、今武ハ日の使の所ハ記ハ誤也、明月記ニ云 建仁二年四月八日午刻、水無瀬殿ハ参上ス、未の刻出御、この辺の辻祭二社、天王社 酒解社 御前と渡さるその中一方頗る田楽ハ供奉副ふ、土民ハ此事を営む云くことをとりて思ふや、

矢數

洛東三十三間堂蓮華王院とゝいひ、人の得長寿院ハ、土人山嵜の神と、武塔天神 牛頭天皇 と合して祭るわけゝ、洛東三十三間堂の辺ゝ、同所の池の中社若と観世とも、凡此所の矢數毎年四五月永日のうゝ晴天と候ひてもすゝ、射人堂前ハ居て、今日の昏より翌日の暮ハ至て、通も所の矢數他ハ超過し

ると天下一と云て、

山茗花

[和漢三才圖會] 賣子木今知佐の木と云處々山中に多く高さ七三丈徑一二尺皮粉青白色老さときハ淺褐色中心白く其葉梅嫌木の葉に似たり長く尖りて二寸ばかり面青く背淡し冬凋こ春生ず三四月花をひらく碎花にして小く、白く單瓣あり野梅の花に似たり朶稍長く垂る大朶と作さず但し毎二三攢生のこと實と結ぶ狀小連子の如し初め青く後黑し堅くして肉白色 [清稗雜談] 山茶菜類の昔に似られバ名くといふと云 [新撰六帖] 我ことく人もまと ちふおもふ〜〜白雲ふかき山ちさのもと

藪椿

[和漢三才圖會] 女貞山海經云泰山に貞木多しといふ是なり其葉拘骨及冬青に似て冬と凌きて凋まず五月細花を開く青白色角實ある [倭名抄] 女貞和名太豆乃木 [和漢三才圖會] 女貞木の葉海石榴に似て鋸齒ふし故に姬海石榴と名くとき、俗に是を藪椿といふ然るに野椿の藪に咲ゆゑて初夏の頃花あるをもとりとむ夏なり、

兼三夏物

魚簗

[ろくせと] の說ハ魚簗とむりとむ夏なり、上り簗と春とり、下り簗と秋とをさをさ連句して其季に連る時ハ上下の斷りに及ぶ三季に用ふと貞享式にあり、

五月

山田の御田扇

廿八日、是ハ伊勢山田太神宮の御田植なり、[今式] 太神宮の宮前にて神事修行の扇あり是を御田扇といふ是を以て田を扇ぐ凡情とあれ共虫を生ずる患なしといふ産婦も又この扇を求て相向ふ所の柱にかくるべし極て産安しとぞ是虫の障をさへぎるべし○五月廿八日とへども日定らず下旬に日をえらぶて是を行ふ當日祢宜數輩御子羅子これを勤む神田ハ高倉山とて俗に天の岩戸といふ所の東の麓豐宮寄にあり件の人々此所に至り御子羅子早苗を植るまねびとなす神人後を修す太神宮の一の鳥居にて神樂唄をうたひ笛太鼓にて舞ふ長官ハ乘輿、祢宜ハ騎馬御子羅子ハ雍樹にて高倉山ともきて鳥居の所に至る素袍を著たる者長さ六尺ばかりの大扇を捧て、黍詣の諸人に戴かしむ又一說に凡山といふ所の土人六人女の形とあり伊達染の帷子を著赤き襪をはき烏帽子をいくぐき黑塗の棒をとり廻し扇にてあるぎまふ內宮外宮

とゝふ同じ、もゝをども山田の名世ふ高し、其扇を模して泰詣の諸人ふ與ふ、内宮八七本骨、外宮八六本骨あり、縮と負さる馬の画、鯛と鉤る人形の画或八鶴亀ホと画きあるものあり、是と長官宅ゆて其日の朝典るゝ、

藥草

摘くの部藥

大和撫子 なの部撫子 時珍

の条ふ出、

楊梅 時珍

の条ふ註、

目楊梅その形楊子の如くゆゝて、味もひ梅ふ似たり、故ふ名く實と結ふ楮の實の如し、五月熟ゆて、紅白紫あり、紅ハ白に勝もり、紫ハ紅ふ勝る、顆大ゆゝ枝細ゆゝ、

魚築打 石と堰木と障て、魚の徙来と通るものゝ上り築の条ふ委し、

ま 四月

松尾祭 上ノ酉 神社啓蒙

松尾の社ハ山城の国葛野郡ふあり、王都ゆ西南と去ること二里余、祭る所の神大山咋神、廿二社註式 市杵島姫也云〻 公事根源 乱世以来上ノ酉ノ日ニ、祭式江次第ふ出たり、此祭日吉の神事の如く、葵ゆ〻と掛、仁明帝美和四年始て祭るとゝふ、紀事 神輿七基、其内一社、毎年白木と以て新造をこゝもと武御輿とゝふ、祭日神幸畢て後桂川

の東ふ捨ツ、豆日児童再び此神輿と舁もゝして後これと碎き破ゆ、その木片と取て厠ふ挿む、これ疫とゝらふの兒ありとゝふ、武御輿民間ふ子ボレル宮と称スゆゝろハ今日再ひ遊行も猶祢ぼまてるゆ如し、神輿七基ハ月讀の社、櫟谷の社、三の宮八宗像の社、衣手の社、四大神御旅所ハ七条朱雀西ニ在、

當宗祭 上ノ酉

○河内国志紀郡當宗の社ハ、仁和四年四月始て勅請し、公事根源 午の日使ゝ川 杜本當宗ハ程近き故ふ人の使両社の祭のゝめふ下向ゆて、宇多御門の御外祖ゆゝ當宗氏ゆるふよりて、仁和五年四月十四日祭りとゝゆめ行はる、姓氏録 當宗忌ゆハ後漢の獻帝より出、四世の孫、山陽公の後ゆゝ、

松前渡 南部津輕ふの商人産物交易の為ふ蝦夷松前ゆ渡るとゝふ北海ゆ各春の間ハ寒氣強く波涛穏ゆゝ故ふ四月ゆゝ初めて出岸し、九月と限ゆふ歸國ゆ、まゝ依てゆゝ夏と上ると秋と云、

天蓼 和漢三才會圖 藤天蓼多掛るふ

山中ふ多ゆ、今人家ゆて、ゝもと植、其蔓蒼黒く拓及び櫻桃の葉ふ似て、皺あゝ、三四月小白花と開く、状梅花ふ

似て小し實を結ふ但し雌雄あり人その嫩葉を取く酸味醤ふ合和て羹と食ふ猫常ふ喜びて食ふ、

祭 かの部神祭の所ふ註を

五月

松本祭 朔日 淡海志 江州大津

松本村ふ神社あり祭所の神平野大明神也人皇十七代仁德天皇の廟あり難波の平野と移し奉るとゝ云ふ本宮往昔六七丁南の山狐谷ふありとゝ慶長中今の所ふ移す神輿一基あり今の傍ふ精大明神と並祭る

豉 俗ゴヽイリとゝ投るふ是猶樂まれゝの訛言あり脊純黑く腹ハ淡赤し関東ふて水スヽシ又サウトメと云ふ是ゝ然るふ得て水をまし水馬くと思へる華多邑去る旬合ふ水馬の題ふく藻の花と休ミ所や水まほしゝ

蒲 水中ふ生ぜ菓蒲葦の華の如し刈て馬ふ秣其ぜ肥

蒲 件の取ちひゝ云ふ

蒲 春の末白茅を生ぜ筍の如し即蒲菜也八月花と開く草の如し子を結ぶ粟ふ合て粥ゝ食ふ

蟲 〔こくりせこ〕 圍く扁き黑き虫豆をごとり水上ふ浮旋ゆて止まらぜ筑紫ふて カイモチカキ 江東の

五十七

植 廣韻 天豆ハ菽ゝ小豆ハ荅ゝ 和漢三才圖会 天豆大低夏至の十日以前種と下ゝ諺ふ夏至の鳥脚とゝふハ既ふ生出る形鳥脚の如くあれバゝ七月花とひらき九月莢と結び十月ごまと収む、

六月

蠓 和漢三才圖会 蠓蠛 一名 醯雞 列子ふ朽壤の上ふ生ゝ雨ふ因て生じ陽を覩て死ぜ雨雅注ふ飛て磑ひくとゝきゝて風ふく春つゝとゝきハ雨ふるゝこゝろハ風吹んとするとゝきハ旋ゝて飛て磑ひくゞ如し一ハ上り一ハ下て脊つくゞ如きゝとゝきハ雨ふるゝ云ゝ形蠅ふ似て小く翅身皆灰色背窄其大さ一分ふ過ぜ

甜瓜 時珍曰胡瓜の味諸瓜より甜し故ふ猶り甘甜の称を得ゝり、○王禎曰二三月種と下し五六月花ひらき六七月瓜熟ぜ、○美濃國本巢郡真桑村ゝ甜瓜の權輿ゝ故ふ真桑瓜と名ゝ、

四月

罌粟の花 時珍曰一名象穀一名米囊一名御米其實の形罌子の如し其米粟の如し乃ち穀ふ象て供御ともゝし故ふ諸名あり秋種冬生嫩苗蔬ふして食ふ甚佳し葉白苣の如く三四月薹を抽で青苞と結ぶ花ひらくとゝきハ

苞脱して花四瓣大さ仏盞の如し、蘂ハ花中ふあり、鬚蘂
ゑまと裹ん化開て三日即ち謝て、蘂茎の頭ふあり、長さ一
二寸、大さ馬兜鈴の如し、上ふ蓋あり、下に蔕あつ、宛然と
して酒罌の如し、中ふ白米ひつ、極めて細し、其花麦態當
ふあらず、白き者、紅の者、粉紅の者、杏黄の者、半紅の者、半
白の者、故ふ麗春と云ひ、賽牡丹といふ、又錦被花といふ、

蕙 白及

和漢三才画会 蕙蘭 紫蕙 黄蕙 紫蘭 紫蘭茎と立て、
葉と生ス 秋蘭ふ似て、潤く薄し、色淡青ふし
て縱理あり、三四月、茎の端ふ白花とひらく、香ふし、又黄紫の
二種あり、云〻○按ずるふ和俗蕙と称るもの、白及の類ふて、
葉大ふあり、山中ふ生るもの、白花黄花あり、又盆ふ植て愛
するもの、黄蕙、星蕙あり、此根菱の如く稜あり、蜀本艸云
白及の属ふ、白及三四月一臺を抽出て紫花を開く、冬凋
む、根菱ふ似て三角あり、白色角頭ふ芽と生ス、和俗ハ
紫蘭と称るもの、根菱ふ似ざるもの、

兼三夏物

ふし、黄蕙、星蕙ハ蜀本草の説の如し、

夏籠、夏行

安居 佛者四月十六日より、七月十六
日ふ至て、九旬の間、禁足忠尼

既ふ終ることと結夏と云ひ、既ふ終ると解夏と云ふ、七月十
六日より、十月十六日ふ至ると自恣と云ふ、釈氏西覽 南山抄
云云偏ふ夏月、約らにまろハ一ふハ無事、遊行ハ出世の業
と修まると妨ぐ、二ふハ物の命と損ま、慈ふ違くこと實
ふ深し、三ふハ所為既ふ非、故ふ世の謗と招く云〻 五雜組
四月十五日より、天下の僧尼禅刹ふ就て搭挂もことと結
夏と云ふ、又ことと結制と云ふ、蓋し長艱の辰ふ方て外ふ
出てハ恐らくハ草木虫蟻と傷らん、故ふ九十日安居禁
足あり、七月十五日ふ至て始て盡く散し去、ことと解夏と
云ふ、西域記ふ十六日ふ作と是ことて、結夏十六日と以て始と
まるハ印度の法まり、中国ハ八月の晦と以て一月とす、天竺
ハ八月の満ると以て一月とす、則中国の十六日乃チ印度の
朔日也○安居 釈氏要覽 南山抄云形心静摂
と安と云ひ、要期ふ任ずると居と云ふ、云〻

夏書、夏經、夏花、夏行、夏斷

故ふ安居の間、他の化益と專らふ勤て、三界萬霊ふ回向
等まる〻、一夏九旬と八十日と旬と、九十日まるゞゆゑふ九旬

といへ在家を志ある輩ハ夏を修し九旬の間飲酒悪肉と断ずと夏断といふ経文を讀誦すると夏経といふ、

霊有縁無縁の菩提の為ふする也云云、

五月

懸の甲

蓑纏輪 けづりとうけハ柳を以てこれを作る元日祇園の前掛と標格として甲のかさしとも是邪気を祓ふ神咒なりとぞ

競渡

鬼車 **水馬** 云云の部飾甲の糸と見合せべし、

月令廣義 楚傳云曰競渡ハ越王勾践ふ起る **歳時記** 五月五日の競渡ハ屈原を拯んとまもると以也後世遂ふ戯とする、

荆楚歳時記 屈原この日を以て汨羅ふ死ス人舟を以てこれを拯ふ今の競渡ハこれと其遺俗也南方競渡のもの其舟を沿めて軽利なもの〻むかさと飛鳧といふ又水車水馬といふ、

列将 父老士人悉く水ふ臨てこれを見る蓋越人舟を以て車とし撤を以て馬とす故ふ鳧車水馬の名あり、 **和漢三才画会** 唐人来ル長崎ふ寓居して此日ハ逢ときハ数艘の小舟ふ乗旗幟を立て先を爭ひ排龍々々と唱き

いひ速なるものを以て勝とす是競渡なり蓋屈原の為ふ

龍を逐へ

の意ふ、

梟羹 梟炙

漢史 五月五日梟の羹を作て百官ふ賜ふ其悪鳥の故ふ五月五日これを食ふ古ハ梟の羹を作て百官ふ賜ふ其悪梟の炙と重ず蓋其族類を滅ぜんと欲也、

獣狩

部懸狩の糸ふ出、

六月

解齋御粥

江次第 六月十二月中ノ卯後暁 **公事根源** 伸今食の次の日ノことなり御座の大床子ふて臺盤一脚ばかりを多て供也、

あるきこうちけふ和布の御汁をそへこれ三口食て御箸とこれ云云神今食ハ後齋あるハ中ふ入のとふ也、

鮮鯛の御ものを供して

毛蟲

陳藏器日 毛虫蘭と作る形毳の如し故ふ小雀毳と名く好て果樹の上ふあり大小とも小蠶の如し身面背上五色の斑毛あり毒あ〻てふく人と刺螫老人と欲るもの口中より白汁と吐凝聚て硬く正小雀の卵の如し其臭毳と以て痲ふ中ふあ〻て蛹と成も蠶の繭あるが如し夏月羽化して出て蛾とふる、

子を葉の間ふ放以蠶子の如し、

削氷

枕草紙 あてなるものけづりひの

ゆまつらふ入ておさらしきかをまりふ入る云〻

○水室の水とけづりぐきたるをいとあらて、

月 佛生會 八日

[谷佛灌佛] [龍華会] [花御堂] [甘水] [佛の産湯] [五香水]

○九諸寺院灌佛会と修ス諸品の花を以て小堂を飾る、是を花御堂といふ其内ハ小き釈迦の像を安置し甘草ホの香水と灌ぐ是を甘茶と云 [事文類聚佛運統記]

周の昭王三十四年甲寅四月八日中天竺国、浄飯王の妃摩耶氏太子悉達多を生ス云 [浴佛功德經] 清浄慧菩薩、佛ホ白して言く世尊若佛在世及ひ滅渡未来世の中、諸の衆生、云何ぞ佛を浴せん、佛言く我汝か為ホ浴佛の法を説ん、諸の供養の中、最殊勝なる衆の香湯を為り浄器の中ホ置き、先方壇を作りて、妙牀座を敷き、上ホ佛を置き、諸の香湯を以て、次第に灌ぐ、香水を用ひ畢て、優浄水を以て、其像を淋洗し、人各洗像の水を少しづゝ取て、自らの頭上ホ置く、初像上ホ水を淋ぐの時ホ、此偈を誦して云〻、我今諸の如来を灌浴ス浄智功德荘厳五濁の衆生垢を離れしめて、願くハ如来の浄法身を證せん云〻○龍

華会 [弥勒下生成仏經] 時ホ菩提樹あり、名て龍華と云、慈氏（弥勒翻して慈氏と云ふ）大悲尊下ホおいて正覚を成ト云〻是之ハ龍華樹と云ふ木の下ホて弥勒始て正覚をとなへ給ひ、此處ホ三度説法の会あり是を龍華の三会と云ふなり、四月八日ハ釈迦降誕の日なればハ釈尊を浴し奉り、當来弥勒ホ逢奉る結縁ともれバ四月八日とまくふ龍華会といふ、

深見草

[抄] 和名布加美艸 [和名] 牡丹の異名 [書言故事] 多く富貴

富貴艸

周茂叔愛蓮説 牡丹花、富貴者也

の家、彫欄丹檻の中ホあり故ホ花富貴なる者こゝ、

不如歸

[格物論] 啼き苦むときハ樹ホ懸りて、謝豹思歸樂とよぶ、その音不如歸と云、

蕗

[崔禹錫食經] 蕗葵ホ似て圓く廣く其莖喝くべし、

兼三夏

物

風爐茶

[茶湯秘傳抄] 四月朔日ハ更衣して、ろづ夏うまくもてる日ゝ、三月まて囲爐裏の茶と服し、爐とふさぎ、けふより風爐と立て茶と憩ふ、

數奇屋の寛障子やぶれ簾ふくへよろゝ涼しくなりて、

客とすてあも惣じて瓜爐の茶ハ朝茶湯多し適ハ
晝とするとあり瓜爐ハ奈良瓜爐と多く用ふるなり

蚋 毛吹草 常の俗稲四月より九月まで用ふ 和漢三才畫会 蚋子 蚋蟆子
俗ふ似て小く脚をまゝ黒色青〻〻多く出て人と螫腫痛むと最烈し

蚊子木、蚊

毋草、蚊母鳥 五雜組 嶺南ふ蚊子木あり葉冬青の如し實枇杷の如し熟すると
きハ蚊ハ塞北ふ蚊母草あり葉の中ふ血虫ハ化して蚊とする江東ふ蚊母鳥あり蚊と吐て二三升云云
滑稽雜談 和俗蚊母鳥と呼て佐く鳥とふ今聞ふ都々都々と啼かものあり

海蘿干 和漢三才畫会 鹿角菜 和名豆太 本草ふ東南の海中石崖の間ふ三四寸鐵線の如く鹿角の狀の如し紫黄色天采て曝し貨海錯とし水を以て洗ひ醋ふ拌まぜれハ脹起して新しきかと如し味極て滑ふ美也若久しく浸すときハ化して膠の狀の如し女人以て髪と梳るふ粘あるて乱をゞ云云

五月 息車

けの部競渡の条ふ出、

粉團を射 天宝遺事 唐の宮中端午ごふ粉團角黍と作りて
金盤中ふ釘を纖妙愛をべし乃チふ角弓を以て是と
射る粉團ふあるるものハ食ふとを得蓋粉團滑膩ゆし
て射ぐるし都中盛ふ此戯とする也、歳時雜書 端午ふ水
團と造る又白團と名く或ハ五色の人獣花果の狀と雜ふ
最精しきかのハ滴粉團と名く或ハ麝香と加ふ又乾團水ふ入ざる者あり、

藤の森祭 五日 神社啓蒙 山城の国紀伊郡深草山の南ふあり祭る
所舎人親王○延喜式ふ載る所の真幡寸の神社
二座是之別雷神 槇毒神 後ふ三所の皇子と合せ祭る三所の皇
子とハ早良親王伊豫親王井上親王又祭る所三座舎人親
王早良親王伊豫親王 紀事 是日神輿三基遊行社家藤
野井氏甲冑と着し馬ふ乗て供奉も帰路れのく稲
荷の社樓門の西並ニ藤の杜の馬場ふ於て走馬を祈願
する所の人あるといふとと又おのく甲冑を着し馬ふ乗
て馳駈をすると前ふ同じ一説ふ藤の杜ハ早良親王ニ故ふ
弓矢神と称ふ今日供奉の人甲冑と着るとと是蒙古

征伐早良親王歸陳の鎮魂供奉

富士垢離

甲冑と著ちて此神事ふ始る、紀事五月廿日より六月二日ふ至て、富士の行人毎日河辺ふ出て、垢離とゐ〜富士權現を遥拜ち、是富士參詣ふ初めしとい〜その間男女行人ども〜この病を祈福と索む行人そのもこむる処の紙符を願主ふさづく〜又祈願の人ども〜行人ふ交ゑて、垢離を修ふ酌長と先達と称ふ其会ちろ処と富士小屋と称ふ、

藤撫

子ふの部撫子の条ふ出、

六月

富士詣

紀事六月朔日より廿日ふ至ゑて諸国の民人富士山ふ攀登る凡富士山ふ登る四道あり、駿遠豆甲是ふり山ふ登るもの其方角ふより、その便ふ随ふその麓の領主多く人力の及ぶ所ハ坂路を修ちて、四道の麓行人止宿の家ありこれを坊と号ふ、山伏先達なり、參詣の人ども〜導して登山ち、昼午坊と出てその夜明るふ及で山上ふ至る凡行程八九里山腹三四の間大木森蔚くらより上樹木なの〜、晝ハ登るふ堪ぢ故ふ半夜ふ入て登る土人坂路中間の岩

窟ふ小屋と搆へ、ちと篠小屋と号ふ風烈しき時ハ、ちらく此室ふ入屋主雪水と以て茶と煎じ、これと嚼ぐ、山上所々ふ炭地炭社あり絶頂ふ池あり周二里余池の中常ふ烟あり、ちと塩硝硫黄の氣乃ちあるふあり登るもの、この池をめぐる若凡雨ふ逢ふときハ巡るとあらぬ攀跡と得ると富士山上といふ今略して山上といふ又或ハ禍定とらハ後世菩提と祈ると以てまろいふその人と行人或ハ道者といふむじめ登る処の坂路の外別ふ沙石の道ハ下る帰るときハこの坂ふり下る、行人脚底ふ草鞋と縱横ふ〜て穿ぐくの如くせざるとき足のいたさふ堪ぢたりて沙石ふ乘じ下ると八九里の間二時ばかり〜て禁ふ至る迄世山の腰と巡る者あり、ちと横行道といふ又横出山上と称ふその行程攀跡ふ比ちるハ道と倍ゑて且險岨堪難いとくるしきこれと苦行といふ凡山上七月以後既ふ雪ありて登ることとなく故ふ諸方ふり来ることなく、六月と以て限ちて、○一説ふ富士山八代孝靈天皇五年、淡海國の地折て湖底ふ時ふ富士山出現ち故ふ近江の國人富士と以て吾國の土ちとふりて近江の人

垢離ふ及ぶ他邦より来るもけも、近江の土砂と携て、山上ふ登るべし、近江の人ふ准じて平安と得るとり、緣記延暦二十四年託曰、我と浅間大神と早もと、平城天皇大銅元年社と立て是と祭る、本地大日如来、云云 神社啓蒙 浅間の社ハ駿河國不盡郡ふ坐り、宮記 富士權現と号ス大山祇女木花開耶姫ありト云云

螢

月令 季夏腐草為螢、云云 註云暑湿の氣と得るゞ故ふ腐て螢とあるなり

舟遊 暑を避ん

為ふ此遊びとるもの、江戸大坂の者、妓女及酒肉と携へ日午より舟と泛暁ふ帰る、この舞最多あり、

風蘭

潛確類書 一名挂蘭、名花譜曰、小ふして蘭ふ似たり、枝幹短らして勁し、砂土と用ひず、竹の籃ふ取てこれと貯へ、露ある処ふ懸て朝夕水と洒くと云ふ此物山石の傍ふ生も、取来て梭擱の皮と以てこれと包ミ、ことと樹下及び簷の下ふ掛く、凡と好て茂盛と故ふ凡蘭と名く、花葉蘭ふ似て軟横ふ垂る、五六月花と開く、微香あり、

振舞水

夏日市井の間ふ瓶とわとして、こゝふ柄杓及び茶碗ふと添、往還炎暑ふ苦しむ人とし

てこゝと飲しむ是と振舞水とい、五元集 ミ、ゝ、ゝ、ゝ

長德二年放生会と行ふる【寺説】慶長年中関白秀次公、この法花ゝ峯ふ城廓と搆ふる時上の宮を移し下の宮ふ合せ祭る、其後

御當家御陣所となる、其時今の杉山ふ移さる、別當願成就寺、往古聖德太子開基の寺院、江州ふ四十八ヶ所あり、其四十八の終りふ此寺を建給ふ故ふ願成就寺の名ありと神社の傍ふあり、普門院といふ、成就寺兼帶ゝいふ、ハ坊舍五十五ヶ寺ありしが、織田信長の兵火ふかゝりて悉く滅亡せ、氏子をくく十三ヶ村、外ふ新郷にて、舟木上田林の二ヶ村と加ふ、例祭四月中の卯、夜宮ふ躍あり、上の宮祭兩日下の宮祭兩日その中間一日と御旅祭といふ、花表を搆門との間ふ於て、九十三間の炬火を立、高さ六七間ばかり、七度半の使と合図ふ炬火ふ火を點じ、村々の祭太鼓ふも、一二間の炬火を點じ、三社の児三人と拜殿ふ座せしめこの児ともさめの太鼓にて拜殿の辺を拍子躍あり、エイくサヽラキヤウと拍子【紀事】八幡祭の神輿立基、越智川を渡る、

五香水

ふの部佛生会の条ニ出、

高野花供

廿日【元亨釈書】弘仁年中紀州

ふ遊びて、勝地と相る、高野山ふ登りて、金剛峯寺を創せ紀伊国伊都郡高野の峯ふおいて八定の所又曰釈観賢根蔭寺とゝ云ふ、表性吳集了見えず、聖宝の上足なり、延喜三十一年、醍醐帝の夢中ふ弘法大師奏して曰、我衣鉢を拓ぬる願くハ黍くせんと、こゝをふよりて釈法の徒、尤き者ふ勅して、紫衣一襲と野山ふ送る、観賢選ふ中にて山ふ入り八定の窟と啓くふ、雲霧隔るが如くにして儀容と看ば、観賢礼して曰少年よりて道と修し梵行玷なし、況て遺法と奉し歳月と累ぬるふおいて、と黙許せるとゝ、須臾にして真儀漸く見ゆる、霧歛りて月の彰るゝが如し、観賢頂礼して仰き瞻るふ鬚髮甚だ長ず、便ち剃り落して、衣と換るふ諸衆ゝと見るとあさまず、後世疑謗致さんとて、観賢重議して石と重し固く封ず、○今高野山宝亀院の住持、代々此事と顔るハんと色の御衣と奉る、是と花供と云ハ金堂ふて学但方の僧薬師会と行ひ、花と供せるの日と、大師の御衣をうる日と、同日のゆゑなりと、

駒牽

【公事根源】見ハ四月ふ

侍るなり、ハ月も名ハ同じけれど心いろもまろ、天皇武德殿ふ幸せ、王卿以下床子ふつく、左右の御監御馬の奏

と仇る、馬の頭庭ふ渡り御馬と引渡も自馬の節会の如、近衛兵衛の射手南ふやうり、四府騎射の丈と奏左右の大将まと奏聞も、近衛必将以下番長以上六人東遊ひを奏も右近衛納曽利狛犬と奏も、雅楽蘇芳菲駒形と奏す、この駒寧ハ来月の騎射の馬、射手人ふと御覧せらるもり、貞観の頃よりそめらるふの月の時ハ二十七日、大の月の時ハ二十八日ふ

木下闇 茂林して暗きとゝ万葉六行ゝゝゝゝ云し 木の晩とゝゝり、木晩の暮闇有尓霍公鳥何処乎家登鳴渡良之

柑類の花 柚金柑蜜柑まゝ 柚金柑蜜柑まゝ 其頭假字の部

みて見

鯔 和名抄 鯔師布之 崔禹錫食経 鯔魚性伏るべ〳〵、沈して石間ふ在りのゝ、遊覧志 石首魚

毎歳四月海洋より来る、数里を綿直して其声雷の如〳〵海人竹筒を以て水底を探て其声を聞ゝ網を下し流を截て之を取る云〳〵

慈し鳥 拾遺 伊勢の御うゝ 拾遺 伊勢の御うゝ

奉つとるみ子のまくまりて又の年ほゝきをと思、そのの山ゝえてきゝらんかゝぎもて慈しきゝ人のうゝ

らまゝ此哥より慈し鳥と異名せゝるゝし、

五月 五絲 ちの部 長命縷の条

ふ出、

今年竹 若竹 時珍曰土中の包筆各時を以て出旬目籜とおとして竹とまるとゝ云〳〵是即今年竹若竹まり、六十年ふ一さひ花咲實を結ふ其竹則枯るゝを綛と以竹實を結ふを籧と以ふまると篠と以、大まるを簜と以まり、

莓の花 本草綱目 地衣草 大明曰華本艸曰此乃陰濕の地日ふ晒さとて起る苔蘚し、○石蕊時珍曰其状花蕊の如し、○玉柏 弘陶別録 石上ふ生ス松の如し、高さ五六寸花紫まり、○桑花 日華本艸 桑の樹の上ふ生する白鮮也地錢花の如し、（本邦ふも亦屋上庭園石上樹上ふ多く苔と生す、九月淋雨降時毎ふ繁茂して花の状の如きものを生も倭名とれと苔の花といふ、

胡麻蒔 和漢三才圖会 胡麻三色あり、とりふ夏至半夏生の交ひふ種を下し六月花と開く、七月實熟も最早晩の二種あり、

六月

氷餅祝 毛吹草 勝尾寺の氷餅

[滑稽雜談] 和俗今日一日ふ至りて舊臘雪水ふ製ゝさる扮餅或ハ勝尾或ハ富士山より出る氷餅ふを祝ひ食して、今日と呼て氷室の節句と

御射の御ト

十日も禁裏堂上ふハ承らぬ、[江次第] 御射の御ト六月十二月十日此日官奏ある分らも [弘仁式] 神祇官中臣ト部ふと率て六月十月一日齋とゝ〜めてとト ふ九日トひ畢て十日ゝ之と奏す、[公事根源] 神祇官の官人一日より本官ふこゝりて是とトふ上卿ゝくまゐりて内侍ふつきゝく奏聞も是ハ主上の玉躰ふ御つゝしあらんことをうらふひ奏する義ゝ人白鳳四年ふゝ〜めておこゝふ

黄雀風

[五雜組] 六月中ゝ東南の風あゝで是を黄雀風と云ふ、梁元帝詩云季夏煩暑流金爍石、

香

極暑

薫散

時珍曰香薫ハ夏月解表の藥冬月の麻黄と用ゐるゞ如し氣虛の者尤多く服をべからぬ今人香薫の元氣と傷るとゝらも有病無病ふ拘らも槩用て藥ふ代て謂らく〜よく服して暑を

避くゝと云云○[五元集] 香薫散犬がねぶりて雲の峯、其角

香薫

宗要百圃と作アて香薫と種暑月蔬菜ゝ葉ハ茵蔯ふ似ゝ花紫ゆ〜て辺ふ連アて穂とあす、

心太

ゝゝろてんありとの部ゝるべし、

江

四月

えびす藥

えびす草

芍藥の異名あり [御傘] 梶原性善ゞ万安方ふとゝるふえびを藥と名付ゝり云云 もくもりの誤

烏帽子魚

[和名抄] 芍藥 和名衣美須久須利 べ〜 豆相の海辺鯉先寄らんとゝるとき小一物流れ来る、大さ二尺ばゝり形烏帽子ふ似て左右ふ紐の如き物ありその色瑠璃紺ゆ〜て光澤あり是と鯉の忘ぼ〜とゝふ漁者この物の漂流をゝを期とゝて海上ふ櫓と構へ鯉の寄ゝと見ゝ是と鯉見ゝふ西三日もぎて果〜て大ふ鯉と獲ゝとゝ烏帽子魚と名ゝることゝ

蚕簿

[和漢三才畫会] 蚕笛和名衣皆良、ふあれゝ、蚕簿ハ蚕簿と架も柱ゝ、蚕簿ハ

兼名苑云蚕と養ふ器ゝ其上に枝蛙あの部両蛙の条うるぐし、ふ施し繭を作らしむる者し、

五月

豌豆 和漢三才畠会 花瓣蛾の如し、形外白く内ふ淡紫あり、中心黒色其莢褐色、六月是を収め取る、

六月 **江戸浅間祭** 朔日○江戸浅間の社ハ浅草砂利場の後ふ

りゝ是を浅草の冨士と云又駒込ゆも浅間の社あり、又本所兵首及高田の馬場又鉄炮洲ホゆも同社あり、祭る所どゝしも駿河ふおゆゞ、今日麥菓ゆて龍蛇と作ア、是と篠ふつけて鬻くもれ多し、参詣の人是と買ひて土産とす、

江戸天王祭 相傳ふ元禄のもゝじめ大ふ流疫ゆ、よりて官ふ請奉アて、神田明神の社地ふ勧請ある處の、祇園三社の神輿を出して街ふ渡御し奉るゝまゝより後毎年祇園会と修す、先大傳馬町御旅所、神輿一基五日出輿、六日還輿、小舩町御旅所、神輿一基十日出輿、十二日還輿、南傳馬町御旅所神輿一基七日出輿、十四日還輿ゆあり、いづれも神輿還幸の時ゝゆゆあアの町々と渡御、社人裳束馬上すゝく、

供奉、鉾三本氏子是ふ随ふ神輿渡御の町々八一日廃務也、或八門ふ竹を植る家あり、是忌竹の意なるべし、其外浅草御蔵前、千住、品川、四ツ谷ホゆも此祭あり、中ゆも品川の神輿八海汀と渡御も、天王祭と八牛頭天王の祭とゆ義、祇園会とゆまぎらして、天王祭

とゆふハ江戸の俗の方言なり、

江戸山王祭 十五日

○神社江戸永田馬場ゆあり、祭る所近江日吉の神と同じ、別當勧理院僧正、神主樹下采女正、その外社家数多あり、乃官より神領六百石を附せらる、當社いゆ〳〵八入間郡川越仙波とゆふ所ゆ行り、その地仙臺仙人の住せ一古跡ありしを慈覚大師草創ありて、星野山無量寺と号し、天台の灵地として山王と勧請あるその後尊海僧正中興し、三十余院農とあらべくり、人皇百三代後花園院長禄三年、太田道灌江戸の城と築くの後文明年中仙波村星野山の山王と勧請して、江戸の城護神とまそ、その地今の紅葉山ありとゆふ、御當家御在城とあ〳〵まふゆとゆて、城西の貝塚ふ移さる、明暦明禄の後ふてび溜池の上ゆうつさる是今の社地あり、江戸第一の大社神殿巍々として、石の鳥居五十三段の

石階、松柏枝をつら結て上久〳〵し、祭礼六月十五日官祭と、神田明神と隔年に行ふ凡祭祀に預るの町、南は芝と限り、西は龍町、飯田町と限る、東は傳馬町濱町辺と限る、北は内神田と限りとす、神輿三基、祭礼の番組四十余番、各花ごし山鉾の一本練物とを出て、神輿渡御の町々は宵宮より桟敷を設へ、幕を張、毛氈を鋪つらね、軒に多くの提灯を釣る、十五日の未明先榊渡る、太鼓是に添ふ、其次猿の造り物ある引山その次諫鼓鳥の引山とゝる、其外の番組は例年の定めあり、此祭に糀町より、朝鮮人来朝の形を出立ち布を造りて大なる象の練物を出す、近年引山の外これと止らず、神幸の道本山を出て、永田馬場より御堀端を歴て糀町御門に入上覧所を渡り、竹橋より神田橋、鍍倉河岸を過、今は竹橋を常盤橋へ出る本町壹町目へ出、本石町三町目、小傳馬町、大傳馬町、旅籠町、渡る、傘鉾大吹貫幟屋臺、引山甲冑の法師に、ふり、氏子に預る處の諸侯も、又警固の武士とゝぐし、長柄鎧を立つらねて群行す、芝場町藥師堂（山王別當の別院なり）の境内に、神餐を献じ畢て、八丁堀日本橋筋を中橋へ、なり夫より本山へ還幸也、

炎天（極暑）

夏　て

の天と

いふ、

て　四月

手安天神祭　午ノ日

〇江州野洲郡江辺の庄にあり、永原村、北村三ヶ村の氏神、鎮座年月詳かならず、明和年中まてに七百余年に成といふ、又永保年中とも、四百年以前、延久五子年十月十六日、永原越前守再建、その後應永廿六亥年六月、永原越前守雅行修補、又明應七年四月十四日、同氏重秀改め造る、この重秀も越前守に仕し、世八万石余領、京極佐々木の同流にて、永原に住、依て本居神とす、四月午の日祭礼、神輿二基渡御あり、例祭正月十日より十三日まで、連三の千句興行あり、巻頭は時の地頭の句を定例とす、此所北村李吟出生の地なり、又平清盛の妾妓王も此地に出生、故に王家に奉行、判物の大繪図、氏子三ヶ村に傳来せり、別當實光坊の説なり、祭式未詳、

三才市会　粉團木の高さ五七尺、葉は箱根楊櫨に似て團く皺文あり、四月花をひらく、初は淡青色、後は白色、ふくらし花瓣て團さ二三寸、一種小粉團といふあり、木の高さ四五尺、葉狹く長し、棣棠の葉に似て粉團に似て小く白し、太さ寸半

繡毬花　和漢

むかりと

五月

天中節

提要抄 五月五日午の刻と天中の節とをて、天

師と畫 かの部艾虎の条うへし、天南星 藻頌蒲經 天南星八処々の平澤ふあ

ア、三月苗を生ず、荷梗ふ似て、其莖高さ一尺以来、葉蒟蒻の如く、両岐相抱く、五月花を開く、蛇頭ふ似くり、黄色、七月實と結び、穂とをて、石榴の子ふ似くり、紅色○時珍曰一名虎掌、葉の形こをふ似くるふ因てあり、南星とハ根圓く白く、形老人星の如くある故ふ南星と名く、云云 和名抄虎掌 和名抄保曽美

鐵線花 才画会

鐵線花、按るふ苗宿根より生ず、一梗ふ三葉、微芍藥の秧ふ似て小く、莖細く、韌甚勁し、故ふ鉄線とふ、俗称く蔓無く、其葉架ふ倚て繁衍、四月花を開く、蕚の下ふ六葉あつて莖を抱く、亦一異あり、其花白色六の瓣平ふ開て、蕚四く紫色最艶美、其蕚綻るハ天蠶糸ヒ綟て總と花ふ似て、其中ふ子あり○千葉鐵線ハ外六の瓣ヤし て白色常の如し、内の瓣もまく白色、千葉短く細く、随ひてひらく、青き蕚あり、外の瓣既ふ落るハ内の蕚ひらく、

六月

天満御祓

廿五日○當社ハ摂津大坂西成郡天満ふあり、祭る所の神、天満天神 摂陽群談 社家説ふ曰、天満宮の權輿ハ人皇六十二代村上天皇の御宗天暦年中ニの地いつる大多松原ニふ於て一夜よ松茂生す、その梢ふ吳光赫々たりと、人ことと怪ミて帝都ふ告て奏聞と遂く、帝即日勅使と下しくまふ時ふ神託あつて云、難波の梅をもくひ、築紫よりこそふ来るべ、と覺てその由と奏ま、依て菅霊と此地ふ鎮らる云云○例祭六月廿五日遷物車楽ふ、水陸とふ渡ア、詑アとて神輿夷の御旅所ふ出、往還川舟ふて數万の提灯群集、船多し

天貺節

書言故事 今要云、宋の真宗祥府四年詔て六月廿日と天貺の節とをて、

四月

袷

文選秋興賦 御袷衣 李善注云 袷衣無裏 ○九四月朔日と更衣とを、此日より袷と用ひ、端午に至て布衫と用ふ、

網鳥

ほくぎ ほくぎとその異名く、藻塩草 是ハ時鳥と紐ヒて取て、明年の夏鳴せんと云心云云

青簾

青葉の簾 藻塩草 青葉の笠とハ翡翠の簾 翡翠の簾 笠とて、四月朔日新しき笠とて

くるゆりとゝ一説ふ加茂の葵と四月朔日翠葉ふ
ゆけらく故青葉の笠とりゝ一説ふ夏山の翠あるを
ふゝ○青藍元禄年間の匂ふ「客ハ雑乳母々所ふ
青笠ぎとゝるたぐひの作例あまたはまべ天子の御笠ノ
とのゝりふといへ扇と賜扇の拜中の部孟夏
る説いをづめり、旬とゝる条ニ
見る甘水ふの部仏生会の条ニるべし葵祭葵蔓ふの部加茂
祭の条下
雨蛙枝蛙和漢三才画会背青くし
て腹白し大るもれ寸半に過ぐ、
雨ふんときるとき鳴故ふ雨蛙と名く大和本草土
鴨雨蛙とふ最も小ゆり色青く木の枝ふすむ
枝蛙
青ぎし枕草紙五月五日のをとゝ
条ふ青ざしとふものと人のも
て来るを青きうすやうと艶ふるまぐりのうつ敷て
これまぜこしふまゝ
云青ざしハ青麥少て
調じる菓子あり、蜀葵草葵タチ葵些名赤
蜀葵とりゝ○時珍曰

春の初め子と種冬月まゝおのづから苗と生ず
茹ふべし五六尺やゝて花さく木槿ふ似て大きく深紅浅
紅紫黒白色單葉
千葉の異ありけり、

兼三夏物

扇 五雑

枕草紙大明以前摺扇ふ多く團扇と用ふ○扇車扇引
扇すまひ以上増山の井ふ出ゝ○ふをあり
のゝ河海云蝙蝠と見て扇と作るゝ依て夏の扇の名物ゝ
端あらぎ昭潭志立山縣の里婦縷績ふ長せりゝ
竹と以て袗と為て暑服ふ充ふ袗ハ小襦ゝ○按ふ和
俗ふ襦袢管襦袢汗衫ハ袖の
のぬぐひ
山堂考索陽事と用ふる時ハ則日進で北ふ
昼進て長し陽勝る故ふ湿と為り暑と為る、
和漢三才画会臺笠今莞と編てゝれと作る竹の
骨と用ひぎ呼て編笠とりゝ以て暑と禦ぐべし、
鱸和俗夏月其肉と魚軒ふ作て洗ひ淨め穀酒
小侵ゝこと食ふこと洗ひ節とりふ、

汗巾
端と縫ひれと用ふ暑
編笠
洗
青

鷺 和漢三才圖会 蒼鷺、鷺ふ似て小く、色蒼黑し、以上お今蒼鷺と称る者鷺ふ似て大く、頭翅皆蒼黑、項冠毛も亦同色、頭上胸ふ至て、黑毛斑々〻〻、翅の端正黑、觜の外黑く内黄、腹白く、脚緑あり、毎に水辺と歩して魚と食ふ飛ぶときハ高く挙て遠く翔る、その肉最美、夏月ことと賞す、

安居 けの部夏蓮の条ふ註す、

青山椒 和漢三才圖会 本草に秦椒蜀椒の二種あり、秦椒ハ其葉對生、光て刺あり、四月細花と生じ、五月實と結ふ生青く、熟すもハ紅あり、蜀椒ハ釘の如き刺あり、葉硬くして滑あり、四月實と結ふ花ふく、但枝の間ふ生ス云其實しまゞ紅熟せるこゝをと青山椒と時珍曰灰藿四月苗と生ス蔬と子蘂と云ふ、

蘂 灰藿の紅心あるもの〻莖葉稍大ふして、嫩きとき亦食ふべし老るときハ莖枝ふあるべし○やくりせん蘂の杖ふあるる日まで、こゝに

鮎 若鮎小鮎とて春あり、たゞ鮎とむくうゝバ夏ふ落鮎渋鮎とひて秋季あり、

五月菖蒲と

獻す 和漢三才圖会 仁德天皇三十九年辛亥五月始て菖蒲を献す、続日本紀 聖武天皇天平十九年丹、天皇南苑ふ御して騎射走馬を觀ふ是日太上天皇詔して曰昔ハ五日の節常ふ菖蒲を用ひて縵とまとのこゝろ此事やゝ久今ゝうして後菖蒲掛ざる者ハ宮中ふ入ことをゆるさ云云

菖蒲の輿 公事根源 六府あやめの輿と南殿の階の東西ゝ、四日ハ朝餉の庭ふ是とゝろ、主殿寮呀々ふ菖蒲ゝ、○菖蒲の御輿の料木ハ梅ゝ畑ゝ供奉人今出川家ふ納む即衛士ふ遣て衛士ゝとと作る其法根菖蒲と連ねて棟梁ゝ細木と以て柱ゝ、西ち小殿の形と作て檜の葉並菖蒲菖蒲と以殿宇と葺衛士禁裏ふ献ゝ云云

菖蒲 時珍曰菖蒲ハ蒲の類の昌盛ゝるもの故ふ菖蒲と名く、和漢三才圖会 菖蒲屋の檐ふゝくものく或ハ仲の日、菖蒲ふ浴し、或ハ石菖の根と以酒ふ清し、ゝもと飲バ邪氣と禳ふと云云

菖蒲人形 此人形ハ力士の形と模して作る多〻江戸ふて元禄のころまでハ市中と賣あるき〻ふも、反懐集 端午の部

ふ「五月雨や傘に付くる小人形」其角とあり、

菖蒲

今八十軒店尾張町其外便りよき街々にて是を賣ゝ

ひく沼沢江池あとふ下ゝゝにて引心と奇ふるめり〇函

引ゝゝ草末にの露も五月雨ふまくる水野のあやめ

ひくゝあり

菖蒲の髮

菖蒲と軟とゝる

資任

条下とゝるべゝ

菖蒲の案

延喜式典薬寮式云五月五日菖蒲生菰黒木

の案四脚芋六両黒葛四斤を進る省輔以下

寮頭とゝふ執る人進み訖ゝて

菖蒲の枕

続拾遺

即退出て輔曲ゝてこれを奏す

やめぐさひと夜ぐさの枕ぐふむすびもそぬ夢のこゝ

かゝ」前中納言雅具

後水尾院當時年中行事あやめの枕

一對ゆゝ御枕をとふあり、こゝ

枕ハ匂當の内侍ゝりゆくすん其様あやめとたけ五六すゞ

かゝふ切て五すゞくふあとさきこと紙ひ

ねりあて結ひて両方の小口ふさゝをむ云

菖蒲湯

同年中行事五月五日の条云けふハさうふの御湯まゐる

よべのさうぶの御枕一對とうすゆゝふつゝあゞら竈殿紙

ひねりを引ときて御湯ふ入る大戴礼五月五日蘭と

あくゝ人沐浴ゝ云是菖蒲と以蘭の葉ふ代るあり

菖蒲の占

三潮草女兒の戯ふあやめを結ひ唱へて

もゝと軒のたゝあやめとくゝ

菖蒲浴

の糸如此ひて一事と祈る願ふ所成るものあやめ

ハ蜘蛛あり網を菖蒲のゝへふ曳く云云

衣

京師の俗端午ふ菖蒲浴衣同帷子と與ふるこゝ必

家々ふありとゞ官家ふハ菖蒲重くて朝服あり花

田萌黄のゝ根菖蒲とゝふハ表白裏紅又携衣とゝふ表

紫裏薄藤又菖蒲重紅梅を用ゝるゝゝあれど五月五

日着ゝる処の常の浴衣帷子と菖蒲浴衣

菖蒲酒

菖蒲帷子とゝふのこて當季の色と用ゝる非也

荆楚歳時記端午ふ菖蒲の山の澗中ふ生る一寸九節

の者と以て或ハ鏤め或ハ屑ゝて酒ふ浸め以瘟疫と辟

く本草石菖蒲一切の悪を除く端午の日菖蒲を

切ゝ酒ふ賣てゝと飲む或ハ雄黄と少しゞり加ふ云

棟と佩棟葺

證類本草五月五日俗人棟の葉と取

てゝとと佩日ハ悪氣と逐ふ〇時

珍曰按ずるに羅願尔雅翼に云楝の葉を以て物を練べ故に練と楝と名く其子小鈴の如し熟する時は黄色鈴と名く形と象る〉増山の井今も片田舎にて端午に

あくちの葉と軒に挿く所侍り今せんだんの木とゐふものなるに

有無日 廿五日 公事根源 これは村上天皇の御国忌にて、宮中にあるべしの日と色申あるべ、廃務日にてらるべきなれども政をなすべき侍らば又急事なる

あるべし、餓に政事ありさてゐる日とは申べ、

楝の花 蘊頌曰楝木の高さ丈餘葉密にして槐の如く長し三四月開花花紅紫色芬香庭に満て花臺石茱萸その樹高大數抱に及ぶ葉厚く光り夏月花者枝に満つ色淡紫觀るに堪へり一朶數萼數百群をなす頗る芬芳あり長き實と結ぶ桃葉珊瑚の如し一穂數十顆枝の間に垂糸す生は青く熟すれば黄色味甘し種田さ實の者は味苦し川練子是なり日本古未罪人と梟首する此木と用ひ故に他材に用ひず俗誤て旃檀と云旃檀は檀香〉又擅の字を用ひ 枕草紙 木のさまはいとくもとどいろちの花ともの〉けもなれもうるはしくおかしき色に咲く

夏 あ

うなゐらぶ五月五日

紫陽花 四葩花 韻語陽秋 唐の拾賢寺に山花あり色紫ふあふとをの〉〉、氣香〉〉、穠麗愛まべ〉人其名を知る者なし白樂天ことと過て標となるも其名と紫陽とりく 和漢三才画会

其莖叢生も莖葉綉蝕の葉に似て五月花をひらく云云此花もまくてまりとの花に似て淡碧色一名四葩の花 夫木

あぢさゐのをれのよひちはおとられて、あぢさゐのをれのあのもとけぢりは 俊頼

園圃に好事の者多く栽苗冬と經て長生す高四五尺莖細く柔ふして蔓延する如く葉苦菜に似て光沢ふし青色也て淡碧と帶ぶ初生莖の精と枹葉毎に抽でく葉と穿形の巴四五月葉の間に紫碧花と開き初て綻る時野菊のごと朝に開

朝菊 花景 花苦苦菊 荒本草云人家らきゝ

あざゝ 池沢の中に生ず葉も花も萍蓬草に似て別に〉あざゝは莖河骨あり長く水中に横たはりてよりとく葉は水面にうくべ水上に上らず花の形色はうるゐに似たり五六月水面に黄花を開く荇菜とあきらと訓 和漢三才画会 中古栗と云ふも近世梁とも誤〉

栗蒔 とちゝぶ大低粘るものを材とす粘ら

ざるものと粟とも穂大やうにて毛長く粒粗きものと粟とも穂小やうにて毛短く粒細きものを粟とも苗とも茅ふ似て種類凡て數十青赤黄白黑の諸色あり早中晩あり三月種るものを中時と云七月熟す五月種るもの五月熟す四月種るもの

青梅 酸しさハ葉ごとに梅のごとし杜國○梅とぐりいひと下時とも八月熟す

杏子 本草綱目 杏ハ葉円くして尖あり二月紅花を開く沙あるものを沙杏と云黄にして酢を帶るものを梅杏と云青くして黄を帶るものを奈杏と云大さ梨の如く黄にして橘の如きを金杏と云○和名抄杏あらめ

荒布苅 和漢三才圖会 本草綱目に海藻ふ似て狹く黑色長きもの四五尺縱の皺文あり柔ふ數株あり堅實にして乾けバ小刀の櫂とする其葉煮食ふべし

鯨 大和本草 東南の海ふ生るもの形肥大なり夏秋肉多く味美あり冬春美あらず又室鯨島鯨あり味劣し

六月

芦の神輿 つの部津島祭の条下ふくし、

熱田祭

神社尾張国年魚市郡江寄松姫島千竈の郷ふあり正殿五座第一天照大神第二素盞嗚尊第三日本武尊第四宮簀媛命日本武皇妃第五建稲種命宮簀媛の兄太宮司の祖神右五座西より次て是とりそふ○土用殿八神躰草薙の宝劔あり又熱田七社といふハ大宮八劔宮高藏宮大福田宮日割宮氷上宮源大天宮是こ此外摂社末社一百余座あり當社八人皇十二代景行天皇の御宇鎮座こ其後天智の御時故有て皇都ふ移奉つりしが十九年と經て天武天皇朱鳥元年ふくび當國ふ還座ありさまくり其砌八例祭勅使下向有て官幣と奉られ

あり抑當社の神事年中數度あり正月十日辰刻踏哥の神事大福田の社より始て改所大宮八劔又大福田ふて終る此社八倉稲魂を祀る故ふ五穀豊登と祈る神事あり

舞人十二人島巾子一人笛一人陪一人各櫻山吹を挿頭とす同

十四日八歩射の式十五日八歩射の的廿二日八両宮の歩射会三月初己午未の日祈年祭○同月初未の日午刻御田神社の供御此日烏喰の神事あり俗ふ烏祭といふ是八神事ふまくじまらざる前ふ大宮祭文殿の前ふて祝座の長外ふ一人平餅とりて烏と呼ぶ此餅と烏のくそざるうちハ神事と

えじめ〳〵いふ○五月五日ハ神輿鎮皇樓門上へ神輩（古實ハなし）
○六月九日山鉾祭礼あり熱田八ケ村よりことと行ふ（東三柄山一柄）○
同月晦日夏越の祓あり、鈴の社前の川岸ふおいてこれと修ス又
○七月七日ハ大宮の大掃除、十月初寅卯辰の日新嘗祭、十月
廿九日両宮外院煤拂ひホあり、此外諸社
の供御ハ月々數度これ有今無と拾て略記、

愛宕の千日詣

廿四日 神社啓蒙 丹波国桑田郡、水雄の北ふあり、祭る神
三座 伊弉並尊、火産霊神 云云 神祇拾遺 愛宕権現
端の御前、軻遇槌命、奥の御前、伊舎那美尊 紀事 六月廿
四日愛宕詣、是平日の千度ふ當ると俗これを千日詣と
いふ、寺僧六坊ホてこの日参詣の人ふ酒食と鄉食をこと
坊著とふ火札と買て歸路檪の枝と求め粽と付ことを
肩ホて帰る、檪の枝ハ竈の上ふ挿むくのおくけする
ときハ、其家火災を免るとふ、元六坊国毎ふ檀越あり、貴
賤と擇ず毎年札と贈り、贄と贈るこの使と勤るれと
中泉とふこの山嵯峨の西ふあり、延喜式ふ載る所、丹波の
桑田郡ふ属ス、今ハ山城の國ふ、本殿祭るところ愛宕權
現垂跡本地勝軍地蔵菩薩、是則慶俊法師再考勧請セ

る所ふ、當社そじめハ城北の鷹ヶ峯ふ
ふ、光仁天皇元年今の地ふうつす、

荒和祓

夏の部夏
越の祓の条
下ふ、

麻の葉流

祓草 年中行事 夏引の麻の
つくさのみをぎまらくも 大蔵卿○麻の葉と切て幣とす
るゆゑふ、ながふ流もまり、祓草ともいふ、麻のことく、
麻の葉ホてもて

暑日

字彙釈文 暑ハ煮ふあり、熱して物
とする故ふ名く、
と煮ゞごと〳〵云云○暑き日と以
ハ六月の季ふあり、暑と
むしりハ三夏と兼ぬ、

青嵐

夏木立の梢の緑と吹あら
の空ふ、一点の雲ホく、青こゝる天氣ホ東風のくゝ〳〵て
たると青東風といふ、無類の天氣、是と青嵐といふ云云

草

赤

麁文曰赤草一名山酸漿、高さ七八寸ばかり、一莖一葉壹
吾の如くふして薄く小さし、夏日其莖葉真紅ふ、
其苗山沢ふあり、故ふ山酸漿と名く、立花
と好りる人、夏日これと愛して花瓶ふ挿む、

青田

社詩 六月青稲
多千畦碧泉乱と、作ル
意ホく風景こるべし、

藍苅

和漢三才画会 四月苗
と植て凡七十日ばかり

にいまゞ穂とあくゝる時、晴且ふ露ゝ乗して抜採り、曝し乾をゝ云ゝ按まるふ抜採るゝ氏稀あして、苧とる者多、

麻、同苧 櫻麻 和漢三才圖会 苧麻大麻ゝのふ皮を剥て絲ゝとして通して苧と称を苧麻と以て真苧ゝを、羽州最上の産と佳ゝ奈良瀑ゝ織るゝの是ゝあり云ゝ 陸機草木疏 紵ハ宿根土中ふ在て、春ふ至て自生を、栽種るゝと須ひゞ荊揚の間歳ふ三ゝひ苧るゝ諸国これを種て歳ふゝゝび苧る便其皮を剥取、竹を以て其表と刮る、厚き所おのづゝ脆ゝ裏の筋の如きゝのを得て布と緝を、○蘊頃曰苗の高さ七八尺葉楮の葉の如くして、面青く背白く短毛あり、夏秋の間細き穂青き花と著く、○櫻麻、櫻花のさくころ栽る故の名ゝも、又麻の花の櫻ふ似る故ゝ、**主日桑苗椒** もゝ〳〵〇麻苧と夏ゝ〳〵、二桑苗川と秋ゝを、

青鬼灯 青しゝのひて夏季ゝも、**青瓜** 時珍ゝ青〳〵ゝい秋の部ふ註を、色瓜ゝいゝる是ゝ江戸ふてゝゝと本田瓜ゝゝふ九漬瓜ふ似ゝ長大ゝゝ、**阿古陀瓜**

阿古陀ハ寇も南瓜ふ似て今人好まゞ此瓜京師ふ多し味美ゝゝ、其蔓長く葉蜀葵ニ似て花黄ゝ、**麻**

地酒 諸国名物記 豊後国の製ゝ云ゝ 和漢三才商会 南都浅茅酒云ゝ 毛吹草 豊後国麻地草云ゝ 又朝生酒ゝゝ書、或ハ土ふゝとも云酒方の書云麻地酒ハ豊後国ゝゝ出、其造法糯米粳米等分ふ合製して冬月寒水と用て是ゝと醸し、土中ふ埋め、草茅の類と以て是と覆ふゝ、冬春ゝ経て夏月土用ふ至て則土中ゝゝとと出をふ既ふ熟せゝゝて土ゝゝの名あゝ、夏月の飲ゝ〳〵賞翫を、**洗飯** ナの部水飯の条ニ出、**雩** 紀事六月 早する時八民間請雨の法と修ゝ是ゝ雨ゝゝと民人鉦ゝゝ太鼓と鳴ゝゝて踊躍或ハ笠ゝ戴き蓑ゝ著雨中の粧ゝて是ゝと祝し、諸神と祈ゝゝ、**秋隣、秋近し、秋と待** 義ゝゝ

さ

四月下帯 御湯殿記 五月五日ゝゝ女房上下帷子ゝゝゝゝ帷子ゝゝゝゝゝふ深て着し、附帯ゝゝ帷子下帯ゝ用ふ、又四月ゝゝゝ用ふ、**山王祭** 申の日、俗ゝも地白ゝゝ申の日、但ニッあれバ

三の迫江国日枝の神社八滋賀郡坂本ニ有、祭神大己貴尊
申、こゝ所謂上の七社八大宮大国主命（十面）、観音二の宮麻多羅神
及び金比羅神ことゝ天台山青龍寺の鎮守ニ准ず（薬師如来聖真
子八幡大菩薩、阿弥陀八王子灌頂大法王子、千手観音ことゝ補陀洛
山と表す、客人の宮、白山明神の灵尊、去来諾の大神、山王の
行化と助け北陸と出てこの山ニ来現ある故ニ客人の宮と
いゝ（十一面）十禪子八地蔵の應化ニ大師此山と開き成就の後上
定心院ニ創む、叡山東の堂ニあり、十禪師と置こゝろ九人と
えらひ得て一人と欽く安慮と得て数ニ満て十禪師の才
器と歡抃して忽然ことゝてこゝろもて故ニ社とその所ニ走て
祭供をこゝとと十禪師といゝ（普賢）中の七社、牛御子八大威德大
行事八毘沙門、早尾八不動氣比八聖観音、下の王子八虚空藏、
王子の宮の珠聖女八如意輪あり、下の七社小禪師八弥勒龍樹、
悪王子八愛染、新行事八吉祥天岩滝八弁天山、末八广利支天、
叡の宮八不動、竈殿八大日、以上廿一社あり、〇三月十八日山王祭
の神とその所ニ於て伐取て四月三日ニ至て、西教寺の側
の松の木ニ寄せうけて又山王の社前ニ置、夜ニ入て諸人ことゝ
とゝ、大津の四の宮ニ立ツ、祭の日神幸の時大津より大宮
の拜殿ニ返し入奉る〇申の日江州東坂本の山王祭ア、午
の刻過て、田楽法師、獅子舞、比叡辻の人並ニ衆徒前駆して
神輿を迎へ七社の神輿山と下る時、前後とゝらそひ競ひ
すゝこて舟ニのせ〜む、山門の僧徒桟敷と構へ、翠簾をとゝ
て是をとゝゝることと横桟鋪といゝ田楽法師ホこの前ニ於て
芸をふもこの日京の山王町より供物と日吉の社ニ献ず前日
天台の當座主の御室ニ至てこゝをと加持し、翌日東坂本に至
りて供ず、又江州膳所の地人御供と献ず祭の日縛船二艘湖
上ニ浮め、音楽を奏〜て、件の供物と献備ず是と御供船と
ゝその船ニ乗るもの、多くハ猿皮と著て猿の假面を被る、
猿ハ元来日吉の使令ニ、ゝその中、六社の神輿へ、仮りニ供
きるゆゑ〜て後湖水ニ撤つ大宮一社の神供ハ、神輿の前ニ
置、ゝその後神輿、船と陸地ニ寄せ、神馬相むゝ得て、輿
中の神騎ゝるまゝと本社ニ入るゝといゝ七社の空輿ハ坂本の
地人ゝること昇て神輿屋へ入るゝ、今日山門ニ属ず所の供
人其ゝ猛威とゝろひ、神幸と警固も、俗諺ニ山王祭ニ礙る
ものあれば寒の語ハ今日のゝゝゝとぞこれ人と害ずる及
ぶの語ゝ祭ゝその前夜ハまゝ八王子の神輿と祭らゞ、急

ふ山坂と下りて、七社の神輿各本社七ヶ所の拜殿ふ居う、
抑山王祭ハ七ヶ年詣てぞ〳〵ふ盡く見つくしぞ〳〵とのべて、
古老傳へていふ、九月中の申の日、八王子三宮の両神輿と八
王子の山上拜殿ふ舁きもんおきさ、四月末の日ふ至て、件の二社
と神輿ふ迎へ奉ると、午の神事とのべ八王子拜殿ハ元来
山嶺ふ造りて出して階下遥ふ低し、神輿半ハ拜殿ふ行り、半ハ
拜殿の欄干と越て外ふ出し、神輿の先の方の棒よ柱とて、
相図と待て柱と抜とれハ神輿さゝらしまふ落つ、その下ふ神輿
舁数十人並居て中ふて請取直ちふ山坂と下を、誠ふ生死とこ
の一時ふ究ひこるとハ瀬の土人頭て役もる所ありこ是と神
輿落さらへ下し終りて、両社と二の宮の拜殿ふ安置て、二の
宮の神輿と拜殿ふ迎し奉るとハ、近年未の日の晩とあるを、
十禪師の神輿も又同〳〵、未の日三の宮、十禪師、四社の神輿
と大政所ふうつし奉る、同時警固の式あり、大宮、聖真子客殿
の宮ハ、大宮の拜殿ふうつし奉る、此間ぎけハ暑を、公人各白素絹
紫の刺ぬき五條袈裟と以頭とつゝ、太刀と佩、その余数十
輩甲冑と着〳〵、鎗長刀と持てその所と警固し、神前ろ武
器と立つらねて、終夜警固の勢ひとゝ〳〵て、各下山を、此日京

祇園の社より、御供と捧け来りて、酉の刻献備を、これと未の
御供といふ、暮よ及て宵宮落〳〵といふとあり、大政所四社の神
輿と石垣の際へ出し、石壇の下より柱ふて、神輿の先の方ハ棒
端と持せ置て、こゝとも又合図と待て、四社一同ふ落さんと設け
おくゝ、神事の役人、その所々ふ来集りて、時刻ふ至ればハ獅子舞
大政所ふ来り、二の社三の宮と次第に舞て退く、次ハ田楽法師
装束ふ菅笠と被り、藝と施し、神輿と拜を、この時公人頭取、
狂言さし花さて、ものゝう仕れといふ、田楽笠とぬぎ立烏帽子
と着てゝ、さひ舞ふ、この舞の扇と拳ると相図ふ神輿と落を、
四社の神輿、泉中ふてうけとゝ、先とうらをひて走る、収納所の前、
氣の宮ふて前後とをふ相揃ひ是より次第の如く、神輿と並へ
大宮の拜殿へ迎幸七社合せ奉るゝ、当日申の日山門の大衆桟
敷人の義ありゝ、公人甲冑ふて衆徒と警固を桟敷の前
ふおいて獅子舞田楽あり、是ハ宵宮ふ勅使御参向、当日まで
御滞留勅使への饗應の遺意とといふ、人皇七十代後三條院延
久四年四月廿三日始て祭の官幣と立らるゝのよしぜ二社注式ふ
出、或ハ六十四代圓融院貞元二年四月廿六日、始て上卿弁外記
史諸司と遣はさるゝとをいふ、〇九神馬の催し、一二番の鐘

る憑じて、恭詣の輩石の鳥居へ来て集る、三塔の公人人数とりつらめ、末の剋むろふ四の宮より榊と渡す、磯成束帯濱成文官、唐装束にて、各馬上七度半の使至て榊と渡す、世間も長け暑に社家春日祭といふことあり、社家の拍掌と待て、太宮前の麻と動らすと合圖して、神輿各先とゆらそひて、舁出す前後の勝負石の鳥居までよあり、神輿ハ飛ぶが如くハッ柳ふいてる、ふおいて神輿を船ふ乗せ奉るも又先後とゆらそふこの神輿船ハ湖辺七浦より毎年二月と出す、是より辛嵜の社ふて神供の義ゆつて七社神輿の駕輿丁例年潔斎精進してこれこ勤ふ今日の勝負の手柄と褒美して禄と賜ふてあり、谷々勝手よりこれと出す、日次紀事ふ七社唐寄より、神馬ふて陸地還幸と いふ誤なり、日吉鎮座記祭儀云卯月の祭礼ハ琴の御舘大樫木と以て神幸の祝詞と奏し、唐嵜ふて先盟の如く恒世の裔粟の御供料と奉る、神輿と出し祭るとハ桓武天皇延暦十年と云、又御舟祭始るとハ延元年中供水以後の例、云七社の神輿へ御供と献るとて各七膳献供の式畢て神輿舁る畢ハ唐嵜へ上て、陸地を本社へ帰る、西ハ高野矢谷修学寺、佛

格寺、田中、山中の人東ハ大津志賀、河野坂本苗鹿雄琴、仰木、乳母、真野ふの土人也、神輿舟ハ若宮の濱へ着岸且より上ゑ濱とふ所の土人、神輿と舁き炬火挑灯ふて本社へ還御あり、翌酉の日廊の神事といふ者大坂より来て、神楽と奏し終て、後神輿を納るあり、

榊取　かの部神祭　吉日撰むよ〜

〇大和國添上郡率川の阿波神社の祭ふ、或説ふ率川と三枝を別社ふ、率川の社の南ふ三枝御子の社あり、諸神記ふ件の社ハ右大臣是公の建立なりとて南家の苗裔ふこの祭と行ふ、又一説ふ三枝の花を折て酒樽ふさゝる故ふ三枝の祭と申ふ、頭形の説ふ三枝ハ〇〇〇

愛宕山と云ふ蓋故あるか、この日一基の神輿ふ冠らせる金鳳ハ愛宕山より下も、此金鳳下ると期として神幸と催ス、一基ハ野山大明神と申て、野宮より迂幸と云云いづれも土人本居神ともこの祭ふ土人嫁と妓女の如く藝をかるらせ、匂ふ於て舞しむ、近年引山或ハ傘鉾と出も、

櫻の實

和漢三才画会清明の前後花と開き實と結ふ大小大豆ぐらい、生ハ青く熟もまハ赤黒し仁あり小兒好でこれと食ふ、味ひ甘美ふく魚毒と解も俗ふ此子と櫻坊とりふ、

五月

鏡

異聞集唐の天宝中揚州より、水心鏡と進る背ふ盤龍あり、五月楊子江心ふ於てこれと鑄る、背龍顔る異なり、後旱もこれと祈ばハ則雨ふる、搜神記金錫の性一ふり、五月丙子日午時鑄ると陽燧とも、十一月壬子の日子時鑄ると陰燧とも、○時珍高堂録と引て云ふ陽燧一名陽符、火と日ふとる、陰燧一名陰符、水と月ふとる蓋銅と以てこれと造る、これと火水の鏡とりふ、五雜組唐より以前ふ揚州より鏡と貢も、五月五日と以楊子江心の水と取くこれと鑄る凡鏡ハ他ふし水清冽ふるとハ則佳ちるも、

左近の真手番

の日

公事根源五月三日ハ左近の荒手番、四日ハ右近の真手番、五日ハ左近の真手番、六日ハ右近の真手番、くひうしハ左右近の馬場ふて騎射のこと有しかも、射手ちるハ大將の申さるむること云云此日随身褐の尻と折て着る故ハ、さうの日と云ふ、荒手番も同しさまなれども、真手番正月ちるハ、五月五日とひさうの日と云ふ、ひさうハ引折の略ス、河海抄左近の馬場ハ一条西洞院、右近の馬場ハ一条大宮在、

最勝講

公事根源先ハ四ケの大寺東大寺延暦園城東福寺最勝会の講ちるとそれらてさだむて日とさだめらる、證義講師聽衆もとあり、最勝王經と清涼殿ふて講ぜらること、元亨釈書永延皇帝一条寛弘六年六月十九名德と宮中ふ延て最勝王經と講論もること五日、立て式しるそ、先代或ハ行ひ或ハ止む、今よ

五月雨

梅雨　入梅　和訓義解　黴雨　黴栗花穴

こと後例とあること、さつき雨降るの畧ス、○梅雨　坤雅四五月の中梅黄み落んとする時水潤土溽して柱礎こるの汚蒸鬱こして

雨ふる、ことを梅雨といふ故に三月雨ふることを迎梅といふ○入梅 四時纂要 閏人立夏の後庚日に逢ふを入梅とも芒種の後壬日に逢ふを出梅とも雨とゝもに新穢ふるゝし、○黴雨 紀事 立春後百三十五日大概黴雨ときは諸物黴腐る此節陸地處々に水ながれぞ涌出る俗に津井穴といふ○墜栗花穴 紀事 摂州天田郡丹生山田の庄原の村弁才天の祠のわくに毎年水ながれ涌て期と怒らば是則中將姫の嫌白瀑前を祭るものなり

墜栗花左衛門といふ

もの世々に家もと云云

榊の花

和漢三才會会 坂樹日本紀 賢木式 龍眼木漢語抄 和名佐加岐正字未詳 按もるに本朝神社必用の木なれば常磐の木密と用ふるゆゑし葉小さく色深青もして香あり四時周まぞ小白花とひらき實と結ぶ生ハ青く熟すれば紅なり日本紀に八百萬の神たち天の窟戸の事を祈ることゝ以来の香久山の坂樹と取て天の窟戸の事を祈ることゝ以来神の縁木云云

柘榴の花

潛確類書 石榴種甚多し千葉深紅やうて實と結ぶものを宝珠

と名く草葉のもれと火榴と名く甚ぐもく花と多く平葉のもれ一種白花をひらく白榴といふ黄花とひらく黄榴といふ 博物志 漢の張騫西域に使して塗に林安石國の榴の種を得て歸る故に安石榴となづく、

さるとりの花

俗かめのぞ

ふ多く生ず葉ハ柊に似て刺あり紫の

花史 杜鵑又石巖花と名く此花杜鵑の鳴ときに英とひらく

五月躑躅

故に名く、和漢三才會会 山躑躅 山石榴 杜鵑花 和名阿伊豆豆之今云さつき本草綱目に云處々山谷にあり高きもの四五尺低きもの一二尺春苗を生じ葉の色淺緑枝小にして花繁し一枝數蕚二月始めて花とひらき蓮華躑躅の如くやして石榴の花の如し紅紫五出千葉なるもあり梅雨に盛なり俗に品類三百余種に至る四月もしめて開き五月に盛なり俗に五月と称す授州須磨一の谷ゝ二の谷攝現山に至て凡三四里むかゝ遠州秋葉山の麓下乾川の両辺もまた三四里ばかり躑躅杜鵑花甚だ多し夏月に満山錦のごとし、

鷺撫子

部撫子の条に見えし、早

松茸 和漢三才會 松茸ハ八九月の交に盛に出るものと俗に早松茸と名く、其味香未可ちらず、

蠁子 和漢三才會 俗名抄云蠁子和名佐之酒醋の上にとぶ小虫なり、按もゝふ將醬醋腐肉の中に初め蛆と生じ羽化して小蠅となる、身黑く羽黄色大さ一分に過ず其眼鏡を以て視るに蠅と異なるこなく然るに蠅の子なれども一類二種卵生化生異へとも李流愁森歌云兼破昔異未休滴職光透長庭沙色暖炎無長叙一千仮割断頑雲看晴碧 藏王 さゝなみの暗間を

ゝゝゝ空よりも月ゝゝ月

五月闇

とつひとゝけん 顕昭

六月

西園寺殿妙音講 十六日 紀事 六月十六日十七日西園寺家妙音講を修せらる今日種々の珍果と家の妙音天(供也)堂上並に楽人相集りて管絃を催す又西園寺家の外琵琶を弾ずるの家又此式あり近世故ありて十六日此を修す 体源抄 妙音院相國師長公妙音天を四条の北室町の東に造らしめ毎月十八日妙音講を

と行ふゝゝ(妙)

座頭の涼 十九日 紀事 六月十九日盲人納涼会行ふ是音天八弁才天と涼しく人在京の検校及勾當上首一人清聚菴に会す心經を轉讀し頭人検校饗應を設け六波の中瞽者四人を撰て平家を談ず暑氣甚しく座席狹く故に検校の外勾當上首其以下並遠方の人来会するに及ぶ其外ハ粗二月十六日の式に同

座摩九御祓 廿二日 社說 摂州西成郡の総社坐広太神宮ハ十五代神功皇后三韓より歸陳しまつる時神武天皇の古例によりて卿船難波の岸浮見石の邊に寄せ神璽安鎮の為齋ひたまふの地なり神功皇后十年庚子難波大江の岸田蓑の島に鎮座(浮見石ハ今の御旅所の鎮坐石なり)祭る所生井の神福井の神細長井の神右の三津井の神に竈の神名波比祇の神阿須波の神二座と加へて五座なり(神名傳)例祭六月廿二日夏越の大祓あり神輿御旅所に渡御あり鎮座の旧跡八軒屋の南石町にあり今猶鎮座石とゝ俗ゝいふ神功皇后の憩息石とゝ人此辺ともべて渡辺大江の岸とゝ人今の天神橋一名渡辺橋とゝふ大江の岸にある故に名く南八

城内ふ属せ、北ハ兎餓野、南北と田蓑の島とふ、ふやゝ江口の辺まで當社の境内ゝて、末社あるこゝゆ、天正年中冨江の側ふ迄〜ゆく云 延喜式 坐戸の社○祭礼當日氏子の市民種々の趣り物と出せ、社司、西横川の川上ふ床と構へ、氏子の形代と 神代巻 然ゞとも彼地多ふ蛍火光く神、又ひ蠅声流し禊と修ゝ

小蠅声神

邪神あゝ、寢草木咸能言語あゝ云 奥伐抄 さゞふゝと いゝと、磨バ夏のくゝのちゝみゞゝるゆゝふ、けゝき神のけゝ ゝゝあゝ、こゝこゝとゝらゝふゞむ 陳陽書 夏至ゆ三の庚と初伏ゝゝ、四の庚と中と、六月ゝらゝふゝゝるゝあゝ、

三伏

伏ゝゝ立秋の後、初の庚と末伏ゝゝ、是と三伏ゝゝゝ、

さらし井

いの部井戸替の条下ふ出、

鯖釣

時珍曰青魚亦鯖ふ作る色と以て名くゝ、大なるものと鰆魚ゝゝゝ 和漢三才画会 能登の海上ふ四月多し、数万浪の為ふ漂ふ所と、釣せゞ網せゞゝて亦獲べし、

鷺草

奥州處々ふ鷺草あゝ、春苗と生ゞ麥の嫩苗の如し、高さ尺ゞゝ、六月莖と抽んで花と開く、正白色形鷺の如し、故ふ名く、 和漢三才画会 連鷺草

とゝる一種あゝ、高さ五六寸葉畧大く万年青の嫩葉ふ似、花白色鷺千有餘群飛ふ似ゝ云

櫻麻

あの部麻の条ゝゝゝ、

豇豆

和漢●才画会 十八豇豆長大ゝる者本草ふ相混じて其莢長きもの二尺ふ至ゝとゝ者是ゝゝ、夏至の前ふ種と下せ蔓長く籬ふ延其莢尺余ゝてその子九十八ゝゝゝゝ故ふ俗呼で十八豇豆とゝ、六七月莢の嫩きものと煮て食ふ味甘美赤白の二種有

き 四月

擬階の奏

七日 公事根源 四月七日ゝゝ八二月の列見の時の成選の短冊と三省よりゝてまゐると、大臣奏聞する儀あゝ、列見延引の時八是ゝ延るゝゝゝゝ

木輕虛皮の色粗白し故ふ白桐と名く、○梧桐一名青如狼狸、○宗奭曰梧桐四月嫩葉小花を開く、葉花の如し、[大和本草]梧桐又青桐といふ、古人詩歌ふ詠ぜしハ是なり、世ふ白桐多く、梧桐ハ稀ニ、[和名抄]椅桐者三月花紫く琴瑟ふ作るふ堪ゝるゆえ是なり、

金柑の花

時珍曰其樹攝ふ似て甚ゞ高大ならず、五月白花をひらく、

枳殼の花

時珍曰木橘の如くやゝて小く、高ゝ五七尺葉橙の如く刺多し、春白花一名ゆきの下、を生ず、

鴨足草

ゆの部ゝゝくし、

木芍藥

苒の異名ゝ、[賈躭花譜]天宝中禁中初めて木芍藥と重んぜ四本と得ゝり、紅紫浅紅、通白興慶池の東沈香亭ふ移し植とゝ云ゝ○時珍曰牡丹ハ其花芍藥ふ似て宿幹木ふ似ゝり、

羊蹄花

羊蹄根時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘、牛の舌の形ふ似ゝり、夏ふ入て薹と起花と開く實を結ふ夏至即枯る、羊蹄ハ根と以て名ゝる、根長蘆菔ふ似て莖赤し、[和訓義解]俗志の説又さしくとゝ、夏ふ至て小黄花をひらく、其根大黄ふ似ゝり○按俗大黄とゝ者是あり、蓼花ともふ黄赤の二種あり、其實枝ゝ振て動ぜそのゝ音きしくとゝ、

剖葦鳥

蘆原雀 [蘆鸎] [和漢三才画会]蘆虎蕭名花 蘆原雀 葭剖 蘆鸎 俗称 按ずるふ状棲の鶯ふ似て大さ雀の如し青灰の斑色長き尾田沢芦葦の中ふ在て好んで葦中の虫を食ふ其唱声喧く亮〻云故ふ此名あり

兼三夏物

切麥

ひの部冷麥の条ふ出ず、

木布

曝晒

[紀事]夏日奈良瀑布八講布、高宮布、木布の類を賣る、云云麻布、葛布、藤布ホのいまゞ瀑さるゝと生布とゝ木布とハ生布ふ同し、

五月

儀方を書

[五雜俎]五月五日すゝの紙ふ儀方の字と書ゝゝを家の四方ふ粘つゝゝゝ其年蚊蠅と退く、

競駈

くの部藥日の条ニ出

騎射

[年中行事歌合]五月五日豐樂院ふて昔ハ騎射と御覽じけるあり、是を馬弓とゝふ天子群臣みなゆゝめのうちを冠ゝふうけて節會の儀式ありしく、続命縷ゝまゝひけるゝゝ奥あるゝゝをそゝへれ

祇園の神輿洗

晦日 紀事 五月晦日、祇園の社火災と稜威を茅渟といふ、夜ふけて神輿洗あり、凡其式神輿三基、所謂素盞烏命、大政所と号す、西八稲田姫少將井と号す、東八龍王女今御前ト号、大政所今御前の神輿、二基八神輿屋より南門を出て石の鳥居より松林をまぎ一基八神輿屋より目病の地蔵堂の前を過て、鴨川の辺ふ曝して、祇園町より目病の地蔵堂の前を過て、鴨川の辺ふ曝して、いふ〳〵河水ふ神輿を灌てこれを洗ふこれを神輿洗ひと、今その義を〳〵とへども旧きふよりてこれを称まをすして後再び祇園町より西楼門ふ入り、三基の神輿と共ふ拝殿ふ安置をその供奉四条芝居の役者、竿の先ふ提灯を張外面ふ各姓名とをり〳〵、高く是を挙く、祇園の町々も家毎ふ高く提灯を張る、又六月十四日祭礼終りて後神輿三輿社頭ふ在を、同〳〵十八日の夜、三基の神輿八直ふ神輿屋ふ入を、少將井の神輿八今夜の式の如〳〵、凡神輿三基黄衣の法師三人、各常ふ[illegible]を預りて主宰を、

金銀花

ふの部忍冬の条ふ見べし、

胡瓜

時珍曰胡瓜張騫西域ふ使しして種を得、故ふ胡瓜と名く、按ずるふ拾遺録ニ云、隋の大業四年諱を避て胡瓜を改て黄瓜とも、正月二月種を下し、三月苗を生ず、蔓を引て葉冬瓜のごとく、四五月黄瓜をひらき瓜と結ぶ、

玉簪

和漢三才画会 此者葉円く潤くして末橋の捕干の形ふ似る、故ふ俗呼てぎぼうしといふ、五月花を開く 本草 時珍曰玉簪、一名白鶴仙、共に花の象を以て名と命を、人家栽て花草とす、二月苗を生して義とする、高さ尺ばかり、柔ある莖白蕊の如し、其葉の大さ掌の如し、圓くして尖あり、葉上の紋車前の葉の如し、青白色頗嬌艶、六七月莖を抽んづ莖の上ふ細葉あり、中ふ花朶十数枚と出す、長さ二三寸、本小ふ末大ふ、いまだ開ざる時八白玉の搔頭簪の形の如し、開く時微綻ぶ、

秬時

和漢三才画会 稷いふ四出、中ふ黄ある蕊と吐き頗香し、しへ八餅として華ふ食ふ、今八唯磨末と〳〵團子餅として賤民用ふ、

六月

祇園會

神社啓蒙 二十二社註式ニ人皇六十四代円融院天七日、十四日、禄元年六月十四日、御霊会と始め今歳ようこれを

行ふ紀事 先七日の朝、巳の刻、大鉾を六本各四条通りを東洞院の西に出づると渡るとりの六本の鉾各称号あり、其中長刀鉾闍とるる及ぶを、毎年魁首なり、この鉾四条通を、東の方の先になりて、此鉾行ぐる時、次の鉾過るるあるまず、函谷鉾を分二とも洲濱鉾或は放下鉾と称もとるる西の方の終りに成りて故にこの三本闍とるる及ぶをその間に鶏鉾菊水鉾月鉾三本船鉾一本並

天神山飛天神山古手山太子山山伏山孟宗山琴破山

白楽天山郭巨山芦刈山蟷蜘山笠鉾山二本花盗人山

木賊刈山岩戸山舟鉾以上十七本九鉾一本後山三本連行もきのこの角堂おいて取ところの闍の次第のごと

相傳に長刀鉾の長刀は三条宗近の作なりと民間疱瘡患るものこれをとりて〻〻〻〻は病愈とる九鉾毎に長さ十余丈余下に車輪二双を施し左右に大縄をつけて数十人これを引その年役に従ふ小児その上に乗り首に宝冠をいただき腰に羯鼓を繋き躍りこれを左右侍立の小童團扇を以てこれを揮揚す笛鉦大鼓の物ふてこれを拍ぶ九鉾毎に一本一箇らしろよりのくその大

ふる物車にのせてこれを引京極を下り五条松原通より各本所に還る、神輿旅所に至て神を假宮に迁す十四日巳の刻ばかりに山渡る、第一辨慶山その次鈴鹿山観音山八幡山役行者山黒主山浄明山鯉山以上八本昨日とる所の闍の次第に因てこれを渡す、第九鷹野山第十船鉾闍とるる及ぶ此鉾三条通西の終りに成りて西は三条より東は京極を歴四条通りを過て各本所に還る同日午の刻ばかりに三社の神を神輿に移し旅所を出づ四条通りの西を歴て大宮通御供町に至り三社の神輿を安置し御供を献ぜ終りて後東の方三条通りを過京極と歴四条通りとより本山に入る、両日前後の祭式古例あまたあり畧之

祇園臨時の祭

十五日 諸神根元抄 天延三年四月融院の御宇六月十五日始て走馬を奉らる勅祭東遊御幣ホの使左少将藤原理兼左右御馬五疋あり左右近衛の官人供奉この後中絶ぬ崇徳院天治以後毎年相續ぬ 慈覚大師傳 四融院天延二年甲戌感心院を以て師に附ぬ 三十二社註式 天延年中祇園の社を以て日吉の末社とし〇この臨時祭は慈覚

大師寺務の翌年もじめて行はる今猶祇園宮殿の傍ふ大師の尊像を置、**北野九度詣**

九日 **神社考** 北野の聖廟ハ天慶三年七月十六日右京七条坊の婢文子ふ託して右京の馬場ふ棲んと欲も其女甚さ賤して営構をるるあさはも家の側ふ祠を天暦元年六月九日始て北野ふ移る、**滑稽雑談** 當世ふ至て毎歳今日九度詣と称して南門の外弁慶松の邊或東向観音の堂前より、神前まで往返九度して、神拜とゆせり、是聖廟此地ふ遷座の日なるふよりり、九度八九日の義を用ゆるか、**木耳取** 時珍曰木耳朽木の上ふ生じ枝葉ふ、濕熱の氣ふ生る所、木耳木蛾とふ、○按るふ此物多く梅雨の前後ふ生ず六月ふ至て木耳堅く備る、此時取

麒麟草 漢名未詳高さ尺ばかり莖葉景天ふ似て小く、其葉浅緑ふして鋸歯ならし、莖の端ふ花を生ず、花もまた景天ふ似て色黄、**金瓜** 摂州兎原郡、田辺村小路村より産其花ひらり、夏より秋ふ至て其花猶あり、景天の別種ふ、ことと出も其色黄金の如し、**銀瓜** 参州の産其色白銀の如し、

ゆ

四月

雪見草 卯の花の異名なり **蔵玉** おもろろろ神ぬれ〜雪見草名をそ雪ふてけぬまゝで、

鴨足草 **本草綱目** 蠅鬲 虎耳草 陰湿の處ふ生ず人亦石山の上ふ栽高さ五六寸細き毛あり一莖一葉荷蓋の狀の如し、葉の大さ銭の狀の如〜初生小葵の葉及虎の耳の形ふ似たり、夏ふ花をひらく淡紅色

兼三夏物

内衣 和名鈔 温室云澡浴の法、七物其七ツを内衣とす、和名由加多比良、論語註明衣ハ布を以て沐浴の衣とす、○今ハ夏月平服をる所の木布なり以てゆかたと云、

五月

百合 時珍曰、暮ゆかさハゆうかとびらの暮ふ、と以て合成も或ハ云百合病を治も故ふ名く、其葉短くして濶く、微竹の葉ふ似たり、白花四垂の者百合之、○**姬百合** **鬼百合** **袂百合** **黒百合** **博多百合** **車百合** **透百合** **鹿の子百合** ホの数品あり、各其頭字の部ふわかち入べし、

六月

夕被 ふの部夏被の条ふ出

白雨

月令 此月土潤溽暑大雨時行 漢字和訓 五色線三云夏の雨こまこと錦雨とい、 御今 白雨と書ことハ、天満の森由已法橋、山谷詩ふあると申されしゝ丸執筆の時書始し文字こ 離騒註 凍雨ハ夏天の暴雨く、

夕顔

和漢三才會会 彼岸の中ふ種と下し、立夏前後ふ種を移し、五六月正白花をひらく、日午ハ凋ミ暮ふ盛く故ふ夕顔と称も、實と結ぶ早晩の二種あり、○夕顔や秋ハいろくのふくべ哉 翁

め 四月

冥途の鳥

三魂と縛めて關の樹下ふ至る小二の鳥 樓掌る一と無常鳥と名づく、二と拔目鳥と名づく我汝ゞ舊里ふ化して、鷓鴣鳥とあり、怪語を示しこ別都頓宜壽と鳴ん我汝ゞ舊里ふ化して鳥とあり、怪語と示して阿和薩迦とあり、 倭名抄 鷓鴣和名保度々木須

三夏物 めふ見ぬ鳥

とぞ 證歌考

飯

鮓

毛吹草 和州南都飯鮓○世俗まゝ夏月こもを賞もゝ其製多しとい、京の六條南都の製ふ限る

み 四月

水屋の能

四日、五日 紀事 南都水屋川の南ふ水屋の社あり、祭る所の神二座、素盞烏尊稲田姫あり、此祭ハ伏見院の御宇、疫病流行ふよりて始めて行ひ、いやしくハ神楽ホあり、今ハ申楽四番あり、地人能藝を施もく、四月四日五日あり、

御形の日

うの部賀茂祭の条ゝるべし、

三月過鳥

朗恒抄 四月五月六月ごろあるハ、ふきすゞをるといふ、○さみだれの雲間と鳴てもゞるくわゝそびゝ良のこゝろきもこ鳥、 倭名抄 もの異名、

都草

大伴黒主、 大和本草 細草ハ四月黄花とひらく、花の形豌豆の花ふ似て色よしゝ葉小ふして三ツふわかる、仙臺萩の如く、

蜜柑

して小ふして實ハ莢ありて兩々相對も、

花

本草綱目 樹の高さ丈餘其葉兩頭尖り緑色ふて面光る四月小花をひらく色白うして甚ゞ香し、 大和本草 其花を花橘と古哥ゝよゝえて、

兼三夏物

短夜

明安〜月令廣義 夏至の節晝六十一刻三十分夜三十八刻三十分○古今 夏の夜のあけぬるほどをまこととぎすなくこゑ一声ゆ明るものゆ、貫之、

○寐入らぬゆ飯焚家ぞ明安き、冬松、

水鰍

和漢三才圖会

惠曾魚正字未詳、按ずるゆ鰍ゆ類して、灰色ゆ黄ぞ帯び、頭、畧蝮蛇の如し、鰍硬く鬣短し、下ゆ碧の線文三條あり、大サ五六寸より尺半ゆ至る、糸切歯 水鰍水鱧 此節ぞ賞をひらきて潮ゆひゝ上夜ぞ越て生捕ゝ用ひ又潮ゆ漬うるぞ其儘用るぞ、畿内ぞ切流〜漬流〜ゝいふごとぞ水鰍ぞいふ、

水鱧

和漢三才

圖会 海鰻 慈鰻鱧 狗魚 和名波無、俗ニ波毛、唐音の略ゆ鱧の字ぞ用ふるゆ甚ぞ非ゆり、糸切歯 五月の頃ハ潮も自然ぞ多〜此時磯辺ぞよるぞ網ゆて取るぞ、ぞと水鱧ぞいふぞ、又一説ゆ鰍鱧の両種ぞ大坂より大和ぞ送るゆ桶の水ぞ湛ぞ魚ぞ漬る、大和川ぞ舟ゆて引のぼる、大和の土人鰍ぞ牙一ゆ賞し、鯛ぞ勝ぞ彼水ゆ浸し大和ぞ送る、

蚯蚓出

月令 孟夏月 螻蟈鳴 蚯蚓出 本草綱目

土龍 地龍子 歌女ゆ諸名あり○時珍曰術家ニ云蚓雲ぞ起ぞ雨ぞ〜又陰晴ぞ知る故ゆ土龍、地龍子の名あり、其鳴ぞ長吟、

海松

崔禹錫食經 水故哥女ぞいふ、

松狀松の如くふ

て葉なし、土佐日記 おぼつかなくれくゆハ子の日ゆこのまぬらぐうゝ松ぞぶゆ初のまゝゆものぞ、源氏葵の巻 ものつゆき千ひろの底のゝるゆきのゆひゆくもるゆハてゆものゝそでぞぬれ、源氏

五月

すまし

通俗志 糸切歯 年浪草 ホゝづきまゝハ水馬虫ぞとす、わくゝせ草ゆハ豉虫の事ゝ、青藍按ずるゆ今ゆ關東ゆそハ豉虫ぞとゝづすゆしゝゝゝ、ゆくゝゝゝの説ゆもゝゝゝゝ、猶まの部豉虫の条、すの部水馬虫の条、たゞひゆのゝゝゝゝゝ、

水鳥の巣

浮巣

字彙 鳥穴ゆあるぞ窠ぞいひ、水ゆあるぞ巣ぞいふ、本朝食鑑 菰の集解ゆ云菰の巣、蒲草ゆ類して蔓茂す、夏月水鳥此中ゆ宿しく以て乳を、

六月

御手洗詣

十九日よ

て晦日まで、山城国愛宕郡、糺或ハ只洲ゝ作る、下鴨糺の納涼　の社ことゝと糺の宮とゝ蓋地名よりて是を称ス、社の東ゝ御手洗川あり、その水清冷ゝて溢ゝ流る是祓と修る七瀬の一ゝ、諸人此水に臨て暑と避く、紀事下鴨の社司、川合の社の前、住吉の東の川辺ゝおいて六月祓を修ス、十九日より晦日ゝ至りて、諸人叅詣し、納涼の遊びとゝ為て、林間ゝ假ゝ茶店を設け、酒食及び和多加の鮎、鯉のさゝ身、鰻の樺焼、真桑瓜、林檎ホの果を賣、或ハ竹串を以小團子、数々を貫き焼てこれを賣る、是を御手洗團子とゝ、

御祓

神代巻諸の神々ち罪と素盞烏尊ゝ帰て拝之ゝ千坐の置戸を以て、遂ゝ促徴髪と抜ちひろゝ至て以て其罪を贖ゝ云く、亦曰其手足の爪を抜てこゝを贖ゝ已ゝ〜て竟ゝ逐降ゝ云云、故ゝ夏祓とゝ為ゝきことゝ知ゝ、

御祓川

御祓とゝる川、古より七瀬あり、拾芥抄川合、耳敬川、東の瀧、松ヶ奇、石影、西の瀧犬井川、

道饗祭

晦日　公事根源是ハ疫神の祭ゝ毎年ゝ必行ゝべきゝ〜ゝ近ごろハ絶て侍るゝ、鬼魅の他方ゝ京路ゝ入ざらん為ゝ路上ゝ供物とゝゝ〜て祭るゝ、鎮火道饗の祭と、四角四境の祭と申ゝ、

水うけ合

通俗志ゝこゝとゝいぶすゝ是ゝ卑賤の者、夏日炎暑ゝ堪ず水練のまねびして大勢集ゝ、其真ゝ乗じ左右ゝ手ものまして互ゝ水とゝあびせ、のけて、勝負を争ゝをいゝ、

茗荷笋

蘘頌曰蘘荷春初て葉を生じ、甘蕉ゝ似ゝ、根姜芽ゝ似ゝ、其葉冬枯る根蘊とすゝ堪ゝ、其性陰を好む、木の下ゝ在て生るゝの尤美ゝ、

水芙蓉

貞享式此名ハ新撰ゝ芙蓉ゝ和漢とゝゝ秋の部ゝ入ゝ、ども、水芙蓉と云ゝ時ハ漢ゝ蓮の一名ゝ、倭ゝハ和らげて水芙蓉と讀ども、芙蓉ゝ水を結びゝ、詩ゝ、詩とゝ〜て、ハ決〜て夏ゝ用ゝ、べきゝ、秋の芙蓉ハ陸ゝ咲て、渭てらぬ物ゝ、ハ云云猿蓑集ゝ芙蓉の花のゝ〜ちるゝ云云、

葵

うくうせと本名荅、又鳧葵とも水鏡ともゝ、葉ハ蓴ゝ似て夏黄花をひらく、又白花のもあり、

水中ふ生立て潔し、人家近き池ふも生ぜど、依て見られる人稀ゝ、こもぎと水葵とおほえる輩まゝ有り、浮蕾ハ秋あり、碧花あり混ぞべらべ、

四月

白堂平絹更衣の時上下ふこまと著、

蕾蘼 時珍曰営實墻蘼 此草蔓柔ふ蘼き墻ふ依て授て生ず故ふ墻蘼と名く、其莖棘刺多く、其子簇て生じ、営星の如し、故ふこまと営實と名く、又曰春嫩き蕊と抽んで、既ふ長ずるときハ叢と成す、蔓ふ似て莖硬く刺多し、小き葉尖て薄く細なる齒あり、四五月花さく、四出、黄心白色、粉紅の二色あり、實と結び簇て成る、生ハ青く熟ずれバ紅あり、人家ふ栽玩ぶもの莖粗葉大ふ延長ずると數丈、花も又厚く大ふ白黄紅紫の數色、百葉ハ出、六出のものあり、

大和本草 野蕾薇花白く單へ、野ふ多し、

新樹 之の部若葉の条ふ出す、

元帝纂要 夏草

茂草 と茂草といひ木を蔚林茂林といふ、

椶櫚の花 時珍曰三月木端莖中ふ於て、數の黄苞と出ス苞中に浮

ありて列をなス、乃花と孕めるを、狀魚腹の孕子ゞ如し、是と椶魚亦椶筍と云、漸く長じ、苞と出すときハ花穗と成て、黄白色、實と結び累々として大さ豆のごとし、

芍藥 蘇頌曰芍藥春茅と生じ、叢ごとあり、莖の上ふ三枝五葉、牡丹ふ似て狹く長し、二尺、夏のはじめ花をひらく、紅白紫の數種あり、子と結ふ、牡丹の子ふ似て小し、秋時根と採る、○時珍曰芍藥ハ婥約の如し、婥約ハ美好き貌、血草花の容婥約ゝ故ふ名ゝ、○董子曰芍藥一名將離、別んとする時ゝ互を贈る、○花の宰相、えびす藥、えびす草、貞好草、亦の異名あり、其頭假字の部ふ、わゝらゝて註し、あゝ、

胡蝶花 和漢三才圖会 扇是今云胡蝶 花あり、四月花をひらく、狀鳥尾の花ふ似て小し、灰白色黄の紋あり、實を結ばず、一種小著莪あり、小ふして長六七寸、石菖の葉の輩のごゝ、花もまゝ小し、浅紫畧菖蒲の花ふ似て小く美し、愛ぶべし、

白及 けの部蕙の条ふ註す、

羊蹄根 きの部羊蹄花の条ゝ註す、

四手孔

田長 ほとゝぎすの異名あり、或書にいふ此鳥農業を催さんとゝめ、四五月のころ來る田を作らぜ則作を時過まゝ熟せずと啼云云田長の名是ゝよる○越谷吾山ゝ凡諸鳥皆三指只杜鵑のみ四指ありその樹上ゝ宿るゝときハ二指前ゝ向ひ二指後ゝむゝ四手の田長ハ是とゝて名つく或ハ死出とゝもものハ非〻古今いとゞくの田とつくれどうほとゝぎすを**蜀魂** ほとゝぎすの異名ちでの田長と朝れくゝふ、藤原敏行

あり 蜀王本紀 望帝其臣鼈靈ゞ妻と淫して乃ち位を禪ゞ亡去ぬ時ゝ子規ゝ鳴く故ゝ蜀人杜鵑の啼を見て望帝と悲む、**謝豹** 五雜俎 蟲ゝ差と以て死す人とこれバ足と以て面を覆ゝ差る狀のごゝ此虫杜鵑の声を聞バ則死を故ゝ

賤鳥 ほとゝぎすその異名あり、杜鵑を又謝豹といふ、○名ゝものゝ山里ゝあるちゞ鳥ハ卯花ぐち

鹿の袋角 和漢三才圖会 鹿茸 俗ゝいふ袋角 茸字ゝて鹿の角初て生ぜ、草の生る良俗ゝ以て蓴菌の字とゝて鹿の角初て生ぜ、未開ゝざる蓴に相似ゝり故ゝ然ゝ長さ二三寸尖ら

ぜ堅ゝらぜ本草云鼻ゝて嗅べゝらぜ小白虫あり、こゝとゝ視れども見えぜ人の鼻ゝ入て額を出ゝ蘖も及ぜ

兼三夏物

新茶 古茶 紀事 此月茶と製し了て諸方の人壺ゝ携へ新茶と領納し然後ゝ壺ゝ山岑清冷の地ゝ寄て盛暑土用の暑湿を避ゝ洛外愛宕山宜ゝて、凡茶と製ゝふ前後の次第あり故ゝ摘茶の時、焙炉の時、擇茶の時ゝいふ、○古茶とゝ新茶ゝ對ゝるの名新古ゝゝ夏

紙帳 紙ゝて作ゝる蚊帳あり、季ゝゝ、貧しき者是ゝて蚊を避ぐ

賣 用捨箱 飛鳥川云云むゝし夏近くゝまゝ紙帳ゝり、多ゝふるゝまゝ紙衾ゝり、ゝゝ物を商ひゝるゝ今ハゝくゝふ、此飛鳥川ハ享保出生の老人の筆記ゝまゝ元文寛保の頃まゝハ此商人来ゝるゝゝ、凡ゝ立中ゝるゝ中延宝八年刻 紙帳賣、立置

蛇鮎 毛吹草 越中の松皮鮨、俗蛇の鮨ゝいふ、龍ゝ似ゝる故ゝ、

鹽烏賊 南越志 其性烏ゝ嗜ゝ自ら水上ゝ浮ぶ飛烏是ゝ見て死せゝるゝゝゝ啄む、乃ち巻

取て水ふ入そまと食ふ因て烏賊と名づくいふそろハ烏と賊害へバ〻

夏季せ　夏季ふ用ふるハ遠土山中ゑ〻の海濱ふ遠き田舍のこゝあり、江戸大坂ホの繁花ふハ生鳥賊春より四五月ふ至て、最中ありて、塩烏賊と用ふるこゝあり〻、

新麥

本朝食鑑　早きものハ三四月熟し、晩きものハ五六月熟す、是新麥の候ふ

和名抄　蓴　和名沼奈波

潛確類書　水中ふ生り、

蓴菜

紫色、三月より八月ふ至て、莖細く釵の股の如し、黄赤色ふ似て水上ふ浮ぶ花黄白子す、巢鳧葵ふ似て短長水ふ隨て深浅あり、名づけて蓴菜といふ歌ふ堪て味甘く寒あり、十月漸く粗硬し、十一月萠泥中にあり、

紫蘓

時珍曰蘓ハ穌ふ似ふ音酥舒暢あり、蘓の性舒暢して氣と行て血を和ス、こゝと蘓といふ紫と云ハ白蘓と名づ、

蟭螟

蚊の睫ふ巢とゝふ虫あり、と云、

傳燈録　仰山洪恩禪師ふ問ふ如何ふ〻て月性と得ん、師の云、とゝハ蟭螟虫の蚊の睫ふ巢て巢を作るごとし、

五月

續命縷、朱索、條達

條下こゝる〻〻、

菖蒲刀

黒川道祐曰、端午ふ用ふる處の木刀或ハ菖蒲刀と云、其形の相似ると以て、高物ふ准へてこゝと称、兒輩腰間ふ横ふ端午石戰の戯の後ふ多くこの刀と以て相戰ふこれと菖蒲切と云、菖蒲と勝負と和音相近し、一戰勝負の義、寓ゝ、

神水

金門記　重五の日午の時、雨ある時急ふ一竿の竹と破まバ竹節の間ふ必神水あり、瀝と取て癩の肝と以丸ハ、れバ心腹の積聚と治ス、

紀暦撮要　今日雨ふふときハ來年大ふ熟ス、

新宮祭

三井寺の山中ふ於てこゝと執ス、祭る所、神、新羅明神あり、

元亨釈書　新羅明神ハ天安二年四珍師　智證大師　船ふ乗て唐より帰る、洋中忽ふ老翁船舷ふ現て曰、我ハ是新羅國の神〻誓て師の教法と護持し、慈氏の下生ふ至ら〻、語已てミえぬ、〇三井寺山下の土人ごゝと新宮祭といふ、〇大津所々祭多き故ふこれと闕祭と誤ておもふる者あり、闕祭と称そろものハ貴船明神の祭あり、貴船の祭、闕明神の祭ともふ、逢坂山ふありと、其説、迭ふ異ゝ猶考ふへし、

賑給 公事根源 こゝにいはゆる民ハ米塩あゝと給ふ、京中の條理小路と分て、接非違使承て是を引米塩の勘文ゆ申てこの侍るゝ大臣陳ハつきて是をさゞむ、欽明天皇の御宇よりちゞ侍る、貧窮の者給ふゝ、禮記月令ゆも侍るゝ也、西宮記 東の手ハ愛宕寺北の手ハ右近の馬場、西の手ハ右兵衛の馬場、

諸鳥毛と革る はの部羽接 鳥の条ニ註ス、

麥門冬の花 大和本草 葉厚く五月ハ莖立て、頭ハ穗の如く、長く連つゝる紫花といきて、實ハ秋熟ス、

下毛の花 大和本草 繡線菊小木ハ、叢生ス、臘月早く萠生ス、四月花をいらく、あつまり開きて盛久し、真紅あり、淡紅あり、愛ス、

越瓜 時珍曰 越瓜地ヒ べし、葉ハまゝ、ゆ似ゝり、漢名未詳 以名くるあり、俗ハ稍瓜と名つく、南人菜花と呼ぶ、三月種と下し、苗と生じ地ハ就て蔓と引、青葉黄花夏、秋の間ハ實を結ぶ、

新茄和 世人茄子の料和豆の棒和といへり、其形狀料ハ似ゝる故

名ともそ、ちんきちんと、五音相通ふゝ、

白ぞえ くの部黒ぞえの条ハ註ス、

六月

勝曼恭 朔日 元亨釈書 推古天皇十四年秋七月、太子聖德御ハ對して勝曼經と講ぜ、太子曰吾昔勝曼夫人ゝる時、釈迦世尊此經を說く故ハ吾ゝ此經を講ぜ講已て蓮花と雨らを大サ三尺乃義疏と製して世ハ傳ふ、○當寺勝曼院の号、太子此道場ハ於て又此經を講じゝまゝ故ハ寺号しゝある、摂州四天王寺の西門西北百歩ゝ、本尊愛染明王毎年六月朔日開帳ゝ愛染恭上云、

神今食 江次第 六月十日神今食 其式 行幸あるゝ時ハ中和院ゝて行ひ行幸ふきゝ時ハ神祇官ハ於て行ふ、公事根源 神今食年ハ両度ゝ、

志渡寺祭 十五日ゝ、贊州 十七日ゝ、寒河郡補陀洛山清光院志度寺 眞言宗 緣記 本尊十一面觀世音是補陀洛界觀音の御直作ゝ、本尊ハ御衣木ハ継躰天皇十一年近江國高島郡三尾崎山白蓮華谷より流出湖水ハ漂ふと七十年崇峻天皇御宇湖

水より又宇治川より流出山城國淀の津に止ること三ケ月、夫より海中に流出漂淸そこと數十年、推古天皇三十三年、當浦の高嶋と云小島の磯辺に海藻尼智法と云者、彼木に瑞光ありしを見て引ちげ、旬月を經て觀音大士童子と化現し、十一面の尊像を刻て玉に暮よ子の刻に開眼等ましと終と云云守說に云この堂は藤原不比等淡海公當浦の海人と契を結び給ひ不背の珠を龍宮城より取返しまつられ海人の死躰を葬りし所に故に志渡寺と云へり、天武天皇半一年辛巳その暮に精舍を建立し、死渡道場と名つく抑志渡祭は彦前大臣天平九年丁丑四月十七日薨じ彦前公當浦に下り給ふ時、庶民に慈悲をなし玉ふの故に庶民その恩沢を報ぜん為六月十五日より十七日まで三日夜の間、これ海人の墓に於て水祭を為す、此日諸人交易して市をなすこと祭と云へり、彦前大臣の薨去は四月なれども農業の障ある故に六月に祭る、今日國主警固の義あり

溽暑

月令 季夏土潤ひ溽して暑し、注云溽は濕なり、土の氣潤ふが故に蒸鬱として濕暑となる

說文 岩間に出ると澣と云ふ澣を清徹る水石間にながるゝ

清水

御傘 清水は雜に結ぶとなして夏に堰き夏に云云 貞享式 清水はひもぐと云つる詞となして、古抄に夏とあせもぐ水の清涼と称せるは其詞に及ばざるべし云云 堰結ふの詞に及ばも清水とゞうと夏季とせるは例の蕉門の新撰とせる也

白梵天

和洲田村の梵天祇此種南都にもあり、

醬油造

和漢三才圖会 醬油倭名比之保本邦の俗油の字を加へ醬油は本草に載る豆油なり

四月

翡翠の簾

あの部青簾の條注、

平野祭

此祭今絶たり、祭る神五座にして北野天神の西にあり、貞觀元年十月九日始て祭祀あり、寛弘元年四月十日臨時の祭あり、

廣瀬祭、龍田祭

四日○廣瀬の社は大和國廣瀬郡河合村にあり○龍田の社は同國平群郡龍田にあり 公事根源 祭の日は廢務あり、年に二度行はる、使は前日より大

忌風神の祭とゝ是あり、[増山の井]廣瀬ハ大忌の神、龍田ハ風神あゝ風水の難を除き、豊年の祈ふ公より祭らゝ

日吉祭 山王祭ゝ、さの部ゝゝゝし、

美人草 [名花譜花四] 瓣色艷麗栗ふ類して小あり [古文前集] 曾子固ゝ虞美人草の詩の題注ふ云項王亡滅して虞姫自刎ぬ、其墓の上の草と人呼て美人草ともゝ同く詩ふ云青血化為原上草ゝ〇一種虞美人草とゝ者あり異種ゝ

兼三夏物

単物 [釈名] 衣の裏ふきと単衣ゝゝ

日傘 夏日日と熱ぐ今ハ白紙或ハ青紙と以て張荏の油と用ひぞゝと日傘とゝ

冷麥 [青箱雜記] 湯餅温麺ゝ、九麺と以食ゝもゝと煎ると皆湯餅とゝ、[貞享式] 冷麥冷汁との二品ハ京家の式目ふ多くハ秋の季とあせるハ察るふ冷の字の惑ふ色ゝ夏ハ涼と好ゝ秋ハ冷と悪む天地自然の道理ゝて此等ハ夏と決もゝ、

冷汁 煮冷夏月羮と調和して其器ゝふ冷水ふ浸し氷の

干鱧 くゝゝゝゝて食ふ是と煮冷冷汁とゝ、

和漢三才畫会 風海鱧、海鱧十頭相聯て白鯊ふ作り形斤板の如さとれ夏秋こと賞も、纖く刻ゝ酒醤ふ和て膾ふ

干河豚 [同上] 名護屋鯨ふ、背黄赤ふ代ふ、辣鬣ふく腹白し、味美ふ皮ハ惟皮と剥てこと乾ゝ、

蛭 [同上] 蛭ハ水中の濕ニ皮雜と名づく夏月曜して是と食ふ生ぎろゝまと海帶昆布と久ゝ雨水ふ浸すゝさハ共ふよく化て蛭とゝる牡石灰食塩を忌ひ試ふ塩を蛭ふ點れゝ

蟾蜍 蕪須曰蟾蜍多く人家の下の湿盤縮て死ぬ、

蟾蜍 處ふ在り形大きく背上ふ疣磊多ゝし行こと極て遲く緩ゝ跳躍ことあゝもゝ鳴ぶ、

[抱朴子] 蟾蜍千歳頭上ふ角あり、腹の下の丹書を肉芝と名づくよく山精と食ふ人ゝこと食ふこと得れゝ仙ゝとゝるゝ術家取用ひて霧ゝ起ゝ雨と祈り兵と辟け、縛と解く今技ある者蟾と聚て戯ゝもよく指使ゝきく、

晝寢 [爰日記] 壁ゝとゝ晝寢の好 翁、支考評曰此句ハいふ風ゝ翁の申されゝゝハ是ハ只残暑ゝとて承て候へかゝゝ

蚊屋の釣手ゐどやらすゑ人ゐなぐらゐ、ゐ人へさこをゐゐ
ひゐゐゐ入ゐゐんと申侍るバ、此謎ハ文考ふるべしと
て笑ひてのゝ
ゝてめるゐ云、

五月

辟兵繒 ちの部長命縷の条ゝるべし

鬪百草 劉公嘉話 唐の中宗の朝安樂公主、端午ゐ百草と鬪ハしむ其物の廣きこと欲し
ゐゐゐ

あり。九月の月蠶まで、是とゐてまつる。

氷のおもの、氷水

氷水とハ熱月ゐるとも、御膳ゐを氷と用ゐるとい〳〵氷水〳〵ハ源氏物語ゐもゐてゐり、註云氷水〳〵と云〳〵 枕草紙 いとしくわつきひる中ふいゐるわざとせん扇の風もぬるゐひゐづふ手とひゐ〳〵て云〳〵○室の氷のゐけゐるとひゐづと云、

氷室の雪

氷室の雪とハ氷室よりかゐる雪とゐ、

氷室の櫻

青藍疫ゐるふ氷室作る山のいと寒ゐ〳〵ハ季夏ゐ暑氣をうけて、漸く咲ぞゐる櫻とゐるべし、 千載集 小野の氷室山のゐふ歳ゐの櫻ゐゐけゐる時「下さゐる氷室の山のおそざくゐきえのゐりゐる雪ゐゐゐゐる仲正」 奥の細道 芭蕉翁紀行 六月九日湯殿山ふ登ゐゐる条ふ云腰ゐけてゐゐ〳〵やゐゐふ深〳〵三尺ゐりゐる櫻のつゐ〳〵半ひらゐるあり、降つむ雪の下に埋ゐて、春と忘まぬ花のゐゐろゐゐ形し、

氷室守 六月

を櫻ふゐゐるゐ

氷室守、蓼太

一夜酒 公事根源 一夜酒とハけふつく氷室守、蓼太 ゐゐハ供ゐゐゐ〳〵一夜とへゐゐる竹葉のゐけゐハ一夜ざけと申〳〵、又こざけとゐ申〳〵

ゐまさけ 同事 本草綱目 竹葉酒ハ諸の風熱病と治ゐ心と清くし意と暢淡竹の葉の煎汁ゐ常の如く酒と釀して飲む、

延喜式 醴酒ハ米四升蘖二升酒三升と和合して釀し造る、醴九升と得、此と以率ゐゐ日ふ造ると一度、六月朔日起て七月三十日ふ尽く、日ふ供ゐ六升、

鎮火祭

公事根源 ト部氏の人火とゐちて宮城の四ツのゐゐゐゐて祭る、ゐあり、火災とふせぐんゐあゐ、此祭礼の間秘術多く侍る、

日盛

杜甫苦熱行 日祝融南来鞭火龍、火旗熠々燒天紅、日輪當午凝不去萬國如在紅炉中、

雲雀鷹

ねの部練雲雀の条ふ出つ、

火蛾

和漢三才圖会 燈蛾燭蛾俗云火取虫、按ずるふ蝶の小ふる者と蛾とゐて其種類亦多し、蠶の羽化ゐるゐ蛾と蚕蛾と燈蛾多く雀の嘴ゐり出ゐ大さ五六歩黄蝶ふ似て色枯渇くゐもの〳〵夏の夜燈燭ゐゐる時ハ火と奪ゐんとゐりゐるゐとく、數回ゐて終ふ燈油中ふ投て死す、故ふ愚人色欲貪欲の為ふ、身命と抛つゐて燈蛾ふ譬ふ、

百日紅

格物論 紫薇花俗ふ百日紅

と名く 樹身光滑にして高さ丈餘花瓣紫皺蹴茸萼赤き莖葉相對す四五月始て花さく開謝接續して六七月に至るべし

三才圖会 紫薇俗に百日紅と名く其皮と極くしきに自ら動故怕痒花と名く

大和本草 紫薇花と以て百日紅と也又猿滑と号す

鼓子花

時珍曰其花瓣とるさど狀軍中に吹所の鼓子のごとし故に旋花鼓子の名あり

和漢三才圖会 此花牽牛花の如くして粉紅色日干に盛んなれども且暮に萎む故に俗牽牛花と以朝顔と称するに對して

未草

本草に時珍曰段公路北戸録云睡蓮あり萍蓬草のなぐひ此と昼顔と名く

〇其葉荷の如くして大なり其花葉に布て數重夏の昼に當て花をひらく夜は萎て水に入晝赤ことを出す

〇和俗ひつじ草と称す上の説のごとく未の

射干

時珍曰垂盧數種あり名狀一あらず

ふきさしかの部うぐし

瓠花

其實一類各色あり並に正三月と以て種と下す苗と生ず蔓を引て延縁す其葉冬瓜の葉に似て稍円にして柔毛あり嫩きときは食ふべし故に詩に云

幡瓠葉采之章之五六月白花をひらく實と結ぶこと白色大小長短各數種色あり大なる者は甕盎と生ずべし

駙博はふすくべ要舟として水に浮ぶべし笙として以樂を奏べし

莧

和漢三才圖会 莧藍に六月細花をひらき穗をなす子扁して光り黑く鷄頭子に似て微圓く皺あり

に似て八莖葉を採て蔬とす赤莧は莖葉赤紫色高さ三四尺畧雁來紅に似て美し五色莧は十葉錦に似て共に園に種て愛べし

萋蘆輪 秦莧二種 貧桑子 桑菜

瓜

和漢三才圖会 姫瓜は俗称菓瓜五六月小く瓜と生ず大さ二寸ばかり圓くして淺青色味苦く食ふべからず熟して

ふくさい稍く黄微甘くして食ふに堪ず

雍州府志 九條の田間より出ず大さ梨のごとく其色至て白し故に姫と以て

ことと称す女兒の瓜と求て少し莖をとらば白粉と其面に傳塗と以て鬟髮眉目口鼻耳と畫き水引と以て其莖と結ひ提挈て玩具とす

續養蠶集

姫瓜や袖に入てもかくれなく 至曉

將酒造

時珍曰大豆の醬

名に云醬は將に よく食物の主妻と制す

按ずるに劉熙の釋將の暴惡と平ぐるが如し

〇製法畧之

引飯

の部に

飯の糸出ず

四月

冷水賣

江戸の街頭ふ手桶一荷とおろしぜ大暑ふ冷水とうる、

孟夏旬

扇と賜

年中行事歌合 夏冬季あらとる

扇の拜 始ふ臣下ふ御酒とゝび政とゝこ

ゝ旬とハまつらぎの政よのゞゝ玉ゝ旬ふゝ

の義にり内裏あゝらしく造らるゝて、初ふ南殿ゝて行せ

ゝるゝとハ新所の旬と申ふ、此四月の旬ふ、内侍扇と

て上達部ふたまゝびひさもこゝきて、請取作法ゝど有者、

杜本祭

上の申○河内國安宿郡、國分村、祭う神二座齋大人神、經津主の命わして、香取

大明神是ゝり、公事根源杜本祭四月上申日ゝ神社河内

國ふあり、午の日使ゝり、仁和五年四月ふ祭初ゝ、河内志杜本の

神社ハいゝ人古市郡、駒ヶ谷村ふにり、式ふ安宿郡ふ屬もと

あれども、一向その所ゝまず、云ゝ駒ヶ谷村と國分村と領つゞき

の故ふ、或人云国分村火の谷と申ところを、當時杜本の宮と

唱へ来ゝ、古代ハ杜本千軒ゝて、坊舍千軒あゝて、勅使参向

にゝしゝ申傳ゝ、その近辺土中ゝり、古瓦と折ゝ堀出

もとゝ、ども、社頭と申ところゝ、大木の樟あゝ、その木

ふ藤のつらはとひ、春ハ花咲ゝ、常ゝ木立ゝ、神木

と申傳ゝのところ、四五十年以前山田の日蔭とゝ以て山

の持ゝし善九郎と以ゝ者、件の樟と伐ゝ、ゝふ斧ハぬけて

柄ばゝり残ゝ、俄ふ山一面ふ焼出、件の斧ハ善九郎ゝ家のゝち

へ飛来ゝ程ふゝ善九郎ゝ妻病死ゝ、火の谷明神の影向ゝ

ゝゝゝゝゝと村中騒動してとゝり行ゝ、小祠と建て神楽

と奏し、神慮と慰め奉ゝ、この崇りふゝりて、杜本の宮の

事、穿鑿ゝるの所善九郎方ふ古き書物の證ともきゝ、

件の善九郎ゝこの節次第に死果ゝ、やゝ九歳の孫一人

残ゝり、ゝりて親族どゝゝうち寄書物穿鑿してゝり出し

ゝゝゝゝゝ

大和本草 莖の長さ尺ふ〻ゞも葉八百合のごとくして狹し四五月ふ花をひらく紅白色花蓮ありて小〻莖ふ十餘つらなりひらく紫蘇のごとし園ふ植て賞翫も

五月

をやゆひ草 或人云紫之と

證ニ本考 **藻苅、藻舟、藻の花** 時珍曰藻ハ水草の文あるゆゑ潔淨潔浴するごとし故ふ藻と名ふ三種あり葉の長さ二三寸兩々相對し即馬藻ハ葉細くして絲及ひ臭の鰓の狀の如くして節々ふ連て生ず即水藻ふ俗ふ鰓草と名づく 和漢三才圖会 時藻 水藻 和毛

毛一日毛波 海人船ふ乘て出て繩と以て腰ふ繫ぎ水ふ沒してこれと苅取て田ふ投稻を養ふ **餅梅** 名義未詳梅子ハ梅雨の時熟す其肉黃熟して更ふ滓なく液多きゆえ凝らくふ是と餅梅とふ〻べくも和俗果穀の類の粘るものを呼で餅とも此をいふ **採瓜** 越瓜胡瓜とも ふ縱ふ切劈横ふ割て塩を糝てこれと洗ひ水と去て醋ふ和して食ふことを採瓜とふ

四月

千團子 十六日

○一本ふ千誕子ふ作る江州三井寺の鬼子母神へ今日諸人參詣をこの神一千の子ありと以て享るふ餅一千を供ふる〻故ふ千團子とふ

石蘚 一名いしのね いの部ふ〻ゞし

五月

赤靈符

抱朴子曰或人兵ときるの道を問ふ答ふ曰五月五日を以て赤靈符を作り心前ふ著

蟬 初蟬 格物 空蟬 論蟬

兩翼啄長くして腋の下にあり或ハ以為口あり腸を以て鳴者〻ハ種類多し 枚舉ふ遑あらず 畧之○空蟬もこの蟬ともひ又かぬけくるとふ〻古ものとふ多し

石竹 ふの部撫子の条ニ注す

梅檀の花 棟〻おの部

石菖 時珍曰石菖水石の間ふ生ス葉ふ劒脊あり瘦根密節高サ尺余ノ

るゆゑハ石菖蒲〻人家砂と以てこれと栽ること一年春ふ至て剪洗ふ愈剪バ愈細ふなる〻高サ四五寸葉韮の如く根匙の柄の如し粗き者亦石菖蒲〻甚しきゆゑハ根の長サ三三分葉の長さすぐ〻ふ〻ゞとと錢蒲とふ是あり按ふ仙神隱書ふ云石菖蒲一盆と凡上ふ置夜の間書を視る時煙と收て目と害をるの患なし

六月

早稲田大學圖書

施米 公事根源 施米東山西山北山などいふ所の山寺ふ侍るたつきなき法師ばらふ米塩と施さるゝ事もあり、五月賑給六月施米いふは貧窮孤獨の者ふ米とたまゝふるゝ誠ふありがたきことあり、

蟬の諸声 多く鳴くるといふ 玉吟 鳴立てとゝもとゝもふるとも木隠 後柏原院

蟬時雨 蟬の多く鳴立るといふ、按ずるふ蟬の鳴声の多くゝしまゝきと時雨ふまがらくてらふまがらべし、

蟬の脱 脱ハ虫の皮と解といふ、是と蟬退 枯蟬といふ、

せごゝ鱠 部沖 とのゝ鱠の祭 二注も、

四月

住吉卯の祭 初卯 紀事 四月

卯の日摂州住吉祭相傳ふ卯の日此地ふ垂跡まうとこの神奥基瑞籬の外より人三の門ふ至りて迂幸も神主及祢宜各卯杖を持ちとゝもとすれ草といふ、

菅の宮祭 中午 ○祭の日竹馬煎餅と鬻く者多し、

神社啓蒙 小津の神社近江國野州郡ふ在祭所の神三座所謂大宮二宮三宮是ふ有り、○神鮓ハ宇賀魂くゝ此と世小菅の宮 くの部関白賀茂祭と称せ、

菅笠擔 詣の条ふ注も、

篠の子 和漢三才畠会 篠ハ小竹、叢生して草の如し俗ふ笹の字を用ふ、篠ふ數種あり、馬篠 兒篠 焼業篠 五枝篠 此等の筍皆篠の子あり又一種 長間竹 俗ふ奈伊竹といふ 長間筍篠筍 諸州とりふあり味ひ苦く多くして甜く微あり、多く食ふふ耐ず、

兼三夏物 風土記 仲夏長風扇風常ふあり俗ふ黄雀長風と名づく、

涼し 暑注云此節東南の

鮨 和漢三才畠会 鮨と釀る法塩少し糝しるゝと厭ふ一二日ふして熟る○宇治丸、蛇鮨、ちゝく鮨、釣瓶鮨、早鮨、一夜鮨、飯鮨、月夜ホの鮨あり、其頭字の部ふとりて註しぬ

雀鮨 毛吹草 摂州福島の雀鮨是江鮒といふ、奥ふあり、その大さ雀ふとありて奥の腹ふ飯を多く入くるゝ膨ふて雀の形ふよく似くり依て名とす、

馬齒苋 倭名抄 馬苋 和名宇萬比留○時珍曰馬齒苋其葉比並して馬の齒の如し園野ふ生ず六七月細花とひらき小く尖る實と結ぶ、和漢三才

蔓会 其性剛強して倒樗の間ふ懸るふ日を經て猶活き、景天草の強ゲとし、大和本草 此草と軒ふろくれ、馬蓮内ふ入ら、もトニ云、

五月

住吉の御田植 廿八日 摂陽群談 摂州

住吉神田と植る以て神事と行ふ、相傳ふ神功皇后三韓と征しさまへ、歸陣のとき、長門國ふり植女をめて、五穀農業のことと世ふ廣くもちゐふその李乳守の遊女とふ、アぬこまふよりて遊女今ふ早ととなとつとむといへり、紀事

追加 泉州堺乳守の妓女のうち、約束るとろの、奉公年季明けこる女三人来りてこまと植、今日神殿と植てのち、妓院の暇と出すといふニ云、住吉の御田ハ古き由ゆえて、紅染の千早ふ似ると著し、赤き袴ふ市女笠といく、是古代の姿の残まるゝ、今ハ

水馬虫 漢名水黽 わくゝゼと

たゝ植る真似とあすのこまり、其身細長く五六分ゞりの黒き虫、長さ四足あつて、身ハ水ふつゞ水上と駈るとゝ馬のごし、依て水馬と名つく、畿内西土ふて塩賣江東の兒童シラニシホとゝ筑紫ニてアメカタとゝ、其臭地黄煎の臭ゝ関東ケ、ポッホウ○其色黒赤ほて蟹節ふ似こり、故ふ鰹虫とゝ一説ふ此虫味甘く、錫ふ似こり、故ふ錫賣○今江戸の方言ふアメンボウ、

忍冬花 忍冬こふの部こゝ、

透百合 和漢三才 萬会 自

黄紅の敷種あり上ふ向ひてひらく、花瓣鮮明ふして美く奥州より出つ、

末摘花 への部紅藍の条ふ

注 八閩通志 食貨ハ部云、李其品一ならず、白李赤鷺も、

木子 黄と名づく實清く脆し、五六月熟も、臙脂李ハ

皮肉共ふ紅あり、味甘く夏熟も、琥珀李ハ皮紅ふして肉黄く味微渋し秋熟も、

六月

吉の御祓 同火替 摂州住吉の社僧御祓を修すゝ、晦日 紀事 六月小あるとハ二十九日と用ひ、

大あれハ晦日と用ふ當日毎年神輿と早の輩、住吉の松原ふ宿し、朝ふ浸ゝ垢離とふ、今朝神輿一基と宮前ふ寄と、社僧祝詞と誦して神とうつし、ふろして後社司六七十員騎馬ふて奉供も既ふて神輿堺の御旅所ふいくる是より先社僧六七輩素絹と著し茶磨笠といくき騎馬ふて神ふ先ぶちて堺ふいくる、即神を旅所ふ迁して又祝詞と誦も、

夜ふ入神輿住吉ふ還幸堺の市民手毎ふ炬を点してこれをとむらふ、迎送相連つて白晝の如しことと火替といふこの日大和國神妙寺山の土ととつて神輿ふそそぐふられと堺の宿院神事、あるひハ名越の祓〻とハ荒和の祓といふ〻

菅貫 きちの部茅の輪の條ふ註を、

あき石ふのゝり〻野波 五元集

千人の手を攔干や橋もゝみ 其角

涼臺 開元遺事 長安の富人暑伏の中おとふ林亭の内ふ於て畫柱と植錦を以て結ひ涼棚とを、座具と設け、名妓と召て同〻〻座せしめ、迎ふ相避暑會とを、

納涼 夕もゝみ 岌俳集 夕橋もゝみ もゝみあゞ

すゞしき玉 秘藏抄 そらもまていさゝとてらもを月の色とをゞしき玉の影〻とゞそらる

朗詠 燕昭王招涼之珠當沙月兮 漢

自得〇すゞしき玉ハ燕の招涼珠といふ、

菅苅 三才

嚢会 菅本綱ふ載を、蓋荊三稜の屬ひゝて根異なり、蓐蚊帳釣草とも異ゞと〻〻接るふ菅の葉ハ茅ふ似滑澤やゝて莖ふ白粉あゝ、云〻〇今云菅ハ葉ふ鋸脊あつて硬く軟を、莖の本白し、別ふ一莖と抽んで穂と出を、六月

乗と苅て乾せバ白色、笠ふ縫ひて美あり、

蟐 時珍曰其狀蜀蟲の如し大さ身短く節促て足長く毛あり、樹根及び糞土の中ふ生ずるもの外黄内黑旧さ茅屋の上ふ生ずるもの外白内黯皆湿熱の氣薫蒸て化生ス、夏より秋ふ入、まるもの蛾て蟬となる、

水飯 洗飯 源氏物語 常夏巻ニ おもきまゝあり、ひゝつめ〻て、すゞゝんあどやうぐゝふさうぐきつぐくらふ、云〻〇弄花云、干飯あどの類水つけ〇或御説ニまるもんとて、ひめも云飯とあゝ〻て、

いたゝひて食ふ物〻

追加 い

五月 天仙菓 月令博物筌 新州の山中ふあり、花ふく〻て実と結ぶ枇杷ふ似てふさ〻ふ児好んで喰ふ、

は

四月 樊噲草 大和 本草 品和 是亦俗の名つけし處あり葉ハ蕗の葉ふ似てまくあり黄花さく、

ら

四月 茶筅草 麥の事と茶筅草とをく穂の形と見立いふ名、

五月 朝

露草 糸切歯 下學集ニ錢朝露草と出テ、一名銀錢花とも云ふ花の形楮ニ似て小く、色日く青くなるこゝろ底ニ黒紅のきらひあり、葉ハ三出五出ゆして西瓜の葉ニ似タリ、高さ二尺ばかり、朝ニ開き夕ニ萎む、

草石蚕 異名を甘露子、土蛹、滴露、地瓜子といへり、五月根を掘煮して喰ふ味百合の如く、根老蚕の如し、故ニあづく、

る

四月 **盧陀草** 月令博物筌及び四季部類ニ、こゝを四月の部ニ出テ、是ハヘンルウダ、唯ルウダとハ秋のそじめ花さき、秋の季とする 大和本草 ヘンルウダ近来紅夷より来る、是紅夷ルウダなり、葉ハ細ふして茎の末ニ木のごとく、三四月黄花をひらく、四出ふして一片の間おのく一蓋と出テ花の心ニ實あり、岩梨の実ニ似タリ、夏実のるその年子をもちけハ来年花咲実なるその葉茎根おのく拾ぶこの草常のルウダより悪臭甚シ、の性ニ似て、性猶をゞとなり常のルウダより悪臭甚シ、

た

四月 **車前草の花** 秋の部ニ注ス

た

四月 **橙の花** 喜祝ニ用ふると以て正月の部ニも載せ、その條下ニ注ス、

ね

四月 **鼠もちの花** 藪椿と同ふ、

な

五月 **刀豆の花** 秋の部ニ注ス、

む

六月 **葎茂る** 和漢三才図会本綱ニ葎故墟道の旁ニ生ず、二月苗を生ず、茎ニ細き刺あり、葉節ニ對して生ず、一葉五尖微蒐蘇ニ似て細き歯あり、八九月細き紫花を開く、子を結ぶ、

う

続虚栗 甲斐山中山賤のかくれ閑る葎ゑの芭蕉

く

五月 **蔓菁の花** 秋のうの部蔓菁ニ見の実の条下ニ注ス

四月 **草下毛** 大和本草 木ニも下毛あり、花ハ相似タリ、初夏細き紅花を発く、一朶ニ群ル開くこと、敗將酒の如し、○**苦草** 此詞 四季部類 ようゝとうゝ、青藍桜ぞるニ苦草ハ若草の誤り、

や

くきハ〳〵きくの欠畫せるありて、爰ニ贅しく

初学の惑ひを解く、但し草ハはの部ハ注しあるべくこゝ故見る色じ、

や 五月

蛇狀子 本草蒙筌 蛇床子、古説ヤブシラミと充つ、自別シヤブシラミ即竊衣、尔雅竊衣、注三芹ハ似て食ふべし、子の大さ麥の如し、

六月 金龜子 大和本草

両々相合しもあり、人の衣ハ著く、北戸録曰甲蟲也、五六月草蔓ハ生ず、南人收て以粉ハ養ふ、本草蟲名蟲の附録ハのせくり、婦人白粉の器中ハ入れ、雄ハ緑色光あり、雌ハ灰色光あり、形狀ハ飛蛾ハ似て長し、翼あり、額ハ両角ありて長し、六足あり、俗王虫といふ、

あ 四月 **青木の花** 花紫黯色ハて美あり、葉ハ桃の葉ハて大あり、實と結ぶをゞハ青く熟そもゝゞ紅あり、故ハ漢名桃葉珊瑚といふ、

五月

あつめ汁 五日そち豆、焼豆腐、干鰕ちゞさゝく、の物と汁ハ焼て食ふこれとあつめ汁云、

六月 蘆茂 細きせ芦間ハ紹巴、

さ 兼三

夏物 曝きの部木布の条下ハ注せ、

み 六月 水代粉 水の珍ハ麥とあのさゝゞ、水飛して製し、こゝゝ暑中砂糖ハ和し冷水ハ浸し飲、

し 五月 **神麹製** 本草 主治水穀宿食癥結積滯を化せ、時珍曰、葉氏水雲録云、五月五日或ハ六月六日、或ハ三伏の日、白麪百斤、菁蒿の葉汁三升、赤小豆の末杏仁泥各三升、蒼耳の葉の汁、野蓼の葉の汁、各三汁を用ひて麪豆杏仁と和して餅ハ作り、麻の葉或ハ楮の葉ハ包み、畧醤黄を造る法の如し、黄ある衣の生ずを待て晒しこれと収む、

蕺菜の花 花四葉ありて白く、葉の臭甚さろし、家園ハ植れば繁茂して後ハ除きゞ、篤信翁曰駿州申州の山中の村民、くだこの根と堀て、飯の上ハおきむして食ふ、甘しと、

ひ **六月 日向葵** 大和本草一名西番葵、花史云文菊と云向日葵も漢名ハ巢大ハ莖高し、六月ハ花さく頂上ハ只一花のみ、日ハつきてめぐる、花のうらぞ、最下品く

只日ふつきゝゝはゝるゝと賞もるのゝ

猿蓑 日の道や葵傾く五月雨 芭蕉

四月 錦

葵

大和本草 冬葵ハ似て別ゝ冬葵ハ葉ふ岐ありて五ツふとるる錦葵ハ葉円やして岐ふゝ錦葵々其花紅紫白數色あり四五月ふ開く銭の大さの如し、実とるゝて翌年莖高らぬ花さゝ三年とゝるゝて莖高く枝多くして悪し、

千日紅

花鏡 木の高さ二三尺莖淡紫色枝葉婆娑う夏深紫色と開く花千瓣細碎円整ありて毬のとし、枝の秒ふ生ず冬ふ至て葉萎むとゝ花蔦ゝ婦女採て鬢ふ簪も最能久ふ耐ふ

増補歳時記琴草夏之部終